

ついにレオデグランス国内で内乱が始まった。

始めはエレイン派貴族とリスラン派貴族が各地で小競り合いの諍いを起こしていた程度だったが、戦いは徐々に激化。こうしてレオデグランス国内はエレイン派とリスラン派の貴族達によって二分された。双方の貴族達は本格的な戦争の準備を進め、自分達の領土を護るために武装し始めた。

リスランは大量に雇い抱えた傭兵団を主とした軍勢を各地に押し進め、エレイン派の貴族達の領土を侵略していった。エレイン派の貴族達は各自応戦するも、傭兵達を含めた圧倒的多数のリスランの兵力の前に為すすべは無かった。領民達は家を焼かれ、冷酷な傭兵達に蹂躪され、エレイン派の貴族達は領地を追われた。

この事態を受け、エレインは各地の貴族達の軍勢をキャメロンに集結させる。絶対的な兵数で敵に劣り、長期戦は不利と見たエレイン達首脳陣は、ヴァースを総大将とする主力軍の総力戦によって、一気にリスランとの戦いに決着をつけようとしていたのである。

エレインは一人、悲しい目で執務室の窓から城下を見下ろしていた。そこに扉がノックされる。エレインが静かに振り返る。入ってきたのはリユネットだった。

「あなた、まだこの町にいたんですか？」

エレインが呆れて言う。それにしても、ノックもせずに入ってくるなんて、相変わらず非常識だ。事前に連絡も無しに、私に会いに来るのは、彼女ぐらいだろう。

「はあ……まったく、どうなってるの？この城に入ってから部屋にくるまでに三回もボディチェックされたのよ……わたしがあなたとは顔馴染みだってぐらいわかっているでしょうに……剣もナイフも取り上げられたわ」

リユネットが怒ったように、エレインを見ていった。

「戦時中で、皆、気が立ってるんですよ。許してあげてください」

「それにしたって、ちょっと厳しすぎない？街も酷い事になってるわよ。町中至る所に武装した警備兵が巡回していて、浮浪者や旅行者を有無を言わさず引っ張っていつてるわ。町に入る検問だって、馬鹿みたいに厳しいし……はつきり言って、異常な状況よ。民衆も怯えているわ」

「……現在、戒厳令が発令中なのよ。リスランの工作員が街中に入り込んでいるでしょうから……多少の事は仕方ありません」

エレインが疲れたように言った。

「でも……」

「それより、あなたも早くこの街から出て行ったほうがいい。もうすぐ、この町は戦場になるわ」

「あなた、この街を戦場にする気!？」

リユネットが驚きと不満の混じった声で言った。

「……わたしだって、したくはありません。でも、そうなりそうです」

エレインが今朝受け取った報告書によると、エレイン達が軍勢をキャメロンに集中させているの事を受けて、リスランも軍勢を一箇所に集めつつあるようだ。このままでは両陣営の主力と主力のぶつかり合いになる。だが、どうやってあれだけ大勢の傭兵達を雇う資金を調達したのか、リスランの総勢はエレイン軍の約二倍はあった。野戦で戦って、エレイン達にまず勝ち目は無い。キャメロン城を盾に籠城戦術を取ろうというのが、エレイン首脳陣の一般的な見解だった。

「……甚大な被害が出るわよ……一体どれくらいの民衆が死ぬか……あなた、それでもいいの?」

「……」

エレインは答えなかった。黙って、うな垂れる。リユネットは苛立たしげに舌打ちをした。

「黙っていないで、何とか言ったら!王位継承問題なんて貴族達の都合で、無力な一般市民を戦争に巻き込んで、あなたは平気なの?あなたはもう少しましな人間だと思ってたけど、見損なったわ!」

リュネットが怒鳴る。エレインは顔を上げた。目を怒らせて、リュネットを睨む。

「だったら、わたしにどうしろって言うの？わたしだって民の事は考えている。わたしも少し前まで、まだ王女なんて呼ばれてた頃、誰も苦しまない理想の国家の建設なんて考えてた。子供見たいな夢を。でも、理想だけじゃどうにもならないのよ！人は夢だけじゃ生きていけない。願うだけじゃ、戦争は無くならないのよ！理想と現実とは違うのよ！その事を、国政に立つに立場に立つて嫌というほど理解させられたわ！」

エレインが泣きそうな声で怒鳴った。

そう、現実残酷だった。誰だって戦いなど望んでいるはずがない。皆、ただ平和に暮らしたいだけなのに、戦争はなくなるならない。人は平和の理想のために戦い、戦いが平和の理想を生んだ。そして人はまた戦う。止まる事なく回る矛盾の輪廻。いつの時代も同じだった。

十万の兵が、願うだけで百万に増えるなら、戦争なんてしなくて済むのに。今、エレインの心を満たしているのは酷い絶望感だった。夢見る子供が初めて無機質名現実に直面した時の、あの敗北感。言いようも無い、口惜しさ。

「……わたしに戦争を止める力は無い。だったらわたしは戦う。理想をかなえる力を手に入れるために」

エレインが静かに言った。暗い顔、暗い声で。どこか遠くを見つめて。その声に、リュネットは何か恐ろしいものを感じた。

「……あなた、疲れているのよ。少し休んだ方がいい……」

リユネットがそこまで言った時、エレインが素早く腰から聖剣を抜き、リユネットに向かって投げつけた。

リユネットはぎよっとして身を堅くする。が、剣はリユネットの顔の横を飛び、後ろの壁に突き刺さった。途端、部屋に響く恐ろしい悲鳴。驚いてリユネットが見ると、壁から異形の魔物が浮き出て、剣で貫かれた胸から血を流しながら床に倒れた。

苦しそうに床でもがく魔物に、エレインはゆっくり歩み寄ると、魔物の胸から聖剣を引き抜き、その剣で魔物の首を跳ね飛ばした。魔物の首から飛んだ血飛沫が、エレインの頬に赤い染みをつくる。だが、エレインは表情も変えなかった。酷く冷たい目で、魔物の死を確認する。

「こいつは……?」

リユネットが魔物の死体を見て、呟く。

「……今週に入って、これでもう三回目よ。わたしが魔族に命を狙われるのは、別に不思議な事じゃないけど……いくらなんでも多すぎるわね。それも、この時期に……」

エレインが刃に付いた血を布で拭き取りながら、言う。そして、人を呼び、魔物の死体を片付けさせた。死体を片付ける兵士達は驚愕して、エレインに「お怪我はありませんか?」としつこいほどエレインの身を心配していたが、エレイン自身は落ちついていて、兵士達の手配も随分慣れた様子だ。

その様子を見ていたリユネットが小さく唸る。今週に入って三回目とは……城内の兵士達が神経質になるはずだ。それに、自分の命が狙われたというのに、エレインのこの落ちついた態

度。もう、それだけ襲われ慣れたと言う事だろうか……。

しかし、以前はこれほど頻繁に命を狙われる事なんて無かったはず。どうして急に、襲われるようになった？まさか……。

「まさか、リスランと魔族が繋がっているの!？」

リユネットが声を上げた。エレインは静かに頷く。

「……証拠は無いですけどね。わたしはそうじゃないかと疑っています」

「ありえないわ!人間と魔族が手を組むなんて」

リユネットが言う。しかし、感情ではそう言ったものの、リユネット自身、有り得ない事では無いと思い始めていた。人間も魔族も、基本的にそう違いのある種族ではないのだ。それにお互い、利害で動く生き物だという事では一致している。それなら、利害のために手を結ぶ事があってもおかしくないではないか。

「……真偽のほどはわかりませんが、それにそのような事、どちらでもいい事です。リスランも魔族も、わたしにとって倒すべき敵である事には変わりありません」

エレインは言った。だが、リユネットにはそう簡単に割り切れる話ではなかった。イーリアス教徒のリユネットにとって、リスランは例え敵でも、まだ同じ人間だが、魔族は悪の象徴、神の敵なのだ。その魔族と人間が手を組むとは……頭ではお互いが手を結ぶ可能性が無い訳ではないとわかっていても、感情では絶対に許されざる行為だった。

しかし、リユネットは思った。自分だって少し前、魔界でネーテルという魔族と行動を共に

していたではないか。いや、それ以前にロアだって、いくら人間界で暮らしている吸血鬼とはいえ、種族的には魔族に分類される。

リユネットが長らく教わってきた経典では、魔族は許されざる悪魔。ロアもネーテルも魔族。しかし、二人は邪悪な悪魔だったか？否、二人はリユネットにとって友人だ。信じてきた常識と現実の違いに、リユネットは苦悩した。

唇をかみ締め、苦しそうに考え込むリユネット。エレインはそんなリユネットから黙って目を放すと、窓辺に歩み寄り、窓から外を見つめた。城下は騒がしかった。民衆は徐々に近づいてくる戦争の足音に怯え、多くの者は町から逃げ出す準備を始めていた。

「……わかるでしょう？わたしには休んでいる暇などありません。力が無いから、人は苦しむ。わたしはわたしの民を苦しめたくはありません。だから、わたしは力を手に入れる。絶対的な力を……勇者アトロを、いや、わたしは歴史上の如何なる王も越える偉大な王になってみせませ。運命さえも捻じ曲げる力を持った王に」

窓から外を見つめたまま、エレインが力強く言った。

リユネットは眉を曇らせた。やはり、今日のエレインは何処かおかしかった。何か、違う。以前は、気が強いただの世間知らずの王女様だった。だが、今のエレインからは溢れるような力強さを感じる。しかし、それは鋭く脆い、危険な力強さだった。そして、リユネットにも何故だかわからないが、心の底に渦巻いていく黒い不安……。

「……危険だわ。あなた、本当に疲れているのよ」

「……リユネット、帰ってください。そして、この町から出て行ってください。私の側にいるのは危険です。これは友人として、あなたのためを思って言っているのです」

「嫌よ！」

リユネットがエレインに向かって叫んだ。危険ですって！少しぐらい危険だから、なんだって言うの！

「危険だから逃げろですって！馬鹿にするんじゃないわよ、この馬鹿王女！友人が危険に晒されてるつてのに、わたし一人逃げ出せるわけじゃないじゃない！意地でも側を離れないわ。相手はリスランだが魔族だか知らないけど、わたしも一緒に戦う！」

「なら仕方ありませんね」

エレインはそう言うと、手を鳴らした。部屋の外から武装した兵士達が入ってきて、暴れるリユネットを押さえ付ける。

「馬の背に括り付けてでも、ラヴィーンに送り返してください」

「ちよっと！これが友人に対する仕打ちなの！？」

リユネットが兵士達に抵抗しながら、叫んだ。床に敷いてあった絨毯にしがみ付いてでも、兵士達に逆らう。しかし、多勢に無勢。リユネットの身体は徐々に部屋の出口に向かって引き摺られていった。

その時、部屋の部屋の入り口に一人の侍女が姿を現した。エレインが訝しげに侍女を見る。その侍女は、何があったのか、酷く震えていた。リユネットを引っ張っていた兵士達も動きを

止めて、侍女を見る。

「エ、エレイン様、お客様です」

震える声で、侍女が言った。

「お客？今日は来客の予定はないはずでしょ。それとも何か急用なの？誰だか知らないけど、謁見室で待たせておいて。すぐに行くから」

エレインが言う。

「そ、それが……」

「邪魔させてもらうで」

酷い地方訛りの声と共に、震える侍女の後ろから、純白のローブを着て、痩せた枯れ木のよ
うな老人が部屋に入ってきた。リユネットはその老人の姿を見た瞬間、どこにそんな力があつ
たのか、自分を押さえ付けていた兵士達を跳ね飛ばすと、地面に頭をつけて平伏した。震えて
平伏したまま、顔も上げない。その場にいた兵士達も侍女も、一瞬驚きに身体を硬直させた
が、慌てて地面に平伏する。

「いやー、ほんま外は暑いわ。久しぶりに外歩いたら、随分汗かいてもうた。そこのお嬢ちゃ
ん、悪いけど何か冷たい飲みもん頂けんかな。あ、酒はあかんで。わし、ほんまは酒大好きな
んやが、酒なんか飲む坊主は生臭坊主やいうさかいな。イーリアス様も困った決まり作って
くれたもんやで」

老人は平伏している侍女にそう言うと、部屋の椅子に断りも無く腰掛けた。侍女が慌てて立

ち上がる。部屋に備え付けられている水差しから水を汲むと、震える手で老人に差し出した。エレインは平伏しなかった。しかし、驚きで目を丸くし、呆然と立つ竦んだまま、その老人を見つめた。

「法皇様……どうして……こちらに？」

エレインが掠れた声を、なんとか搾り出す。そう、エレインの目の前にいるのは、イーリアス教における最高位の僧、バラハム法皇その人だった。

バラハムは侍女から手渡された水を美味そうに一気に飲み干す。そして、一息つくくと、ようやくエレインの方に目をやった。

「なーに、アヴァロン王のお嬢ちゃんが旅からようやく帰ってきたというし、うちのリュネツトもこちらにおじやまになつとるようやから、お忍びで少し二人の顔見に来ただけや」

バラハムが笑って言う。エレインはその言葉に呆れた。お忍びで……この世界で最高の権力を持つとまで言われるイーリアス教の法皇が、そんな勝手な事をしていいのだろうか。もっとも、エレインも人の事を言えた素行ではないが……。

「それにしても、お父上の事は残念やったなあ……いい奴やったのに……いい奴は早死にして、わしみたいたるくでもない人間ばっかりが無駄に長生きしよる」

バラハムがしみじみと言った。

「いえ……」

「しかし、しばらく会わんうちにお嬢ちゃんも随分大きくなつたなあ。前に会つたのは一年前

くらいか……たった一年で大人の顔になりおった。これならお父上もあっちで安心してるやろ。しかし……」

—そう言うと、バラハムはじっとエレインの顔を見つめた。

「……随分、疲れた顔しとるな。顔色もようない。何か思いつめとるようやの」

「……」

エレインは答えられずに黙り込んだ。目を伏せる。その瞳の奥から心の底を覗き込むように、バラハムはエレインの目を見つめた。

「……みんな、悪けど少し席を外してくれんか。わしはエレインと二人きりで話したい」

バラハムがエレインを見つめたまま、言った。リュネットや部屋にいた兵士、侍女は慌てて立ち上がり、部屋から出て行こうとする。そのリュネットに、バラハムが後ろから声を掛ける。リュネットの肩がびくりと震えた。

「リュネット、おまえはいったん聖都に戻れ。いつまでキャメロンに居座つとるつもりや。教会から帰還命令が来とるのは知つとるだろう。また無視するつもりか？」

バラハムの言葉に、リュネットは慌てて振り返る。不味いところを見つかった。リュネットはもう一週間も教会からの帰還命令を無視し続けてキャメロンに居座っていたのだ。命令無視など毎度の事なので、帰還命令など気にもしていなかったが……まさか、法王がキャメロンに来るなんて……。

「いや、……あの……しかしですね。わたしは、その……」

「今おまえがここにいても、エレインの力にはなつてやれん。おまえにはおまえの仕事があるはずや。うだうだ言うたらんと、はよう帰れ」

「は、はい！」

バラハムに一喝されて、急いで部屋を出て行くリユネット。さすがのリユネットも、法王に面と向かつて逆らう度胸は無いようだ。リユネットの背中を見送るバラハム。

「まったく……才能も器もあるのに、どうも変なところで頑固やからいかん。それだけ友達思いつて事やろうが……まあ、まだ若いちゆうことか」

そう言つて笑うと、エレインに向き直つた。

「さて……お嬢ちゃんの話や。なんぞ悩みがあるんなら、わしに話してみんか？ 今日はそのためにわざわざ来たんや。人の悩み聞くんは、坊主の専売特許みたいなもんやさかいな」

バラハムが笑顔で言う。

「別にわたし、悩みなどありませんが……」

「嘘言うなや。そんな暗い目して、悩みが無いわけないやろ。一年前に会つた時とは、まるで別人かと思つたわ。おまえさん、あんまりよくない顔しとるで」

「……そうでしょうか？」

「ああ、酷い顔しとる。まるで何かに脅えとるようや」

「……」

エレインは黙り込んだ。確かに、私は少し疲れているかもしれない。いや、今までに無いく

らい、間違いなく精神は疲れている。政務の疲れ、父の死によって急に押し掛かってきた王女としての責任の重圧、その心労だ。だが、国政の悩みなど、僧に打ち明けて何になるというのだ。

「実はな、わし、どうも最近、心が落ち着かんのや。どうにも嫌な予感がある。なにかとんでもないもんが近づいて来てるような気がしてならん」

「とんでもないもの？」

「わしにもはつきりとはわからん。だが、ろくでもないもんや。それにお嬢ちゃんが深く関わってる気がする。だから、心配で来たんや……わしの思い過ぎであってくればいいんやけどな……」

「……」

「そうや、近頃、何か変わった夢は見んかったか？」

「夢？夢が何か関係あるんですか？」

「おおありや」

バラハムがきっぱりと言った。そういえば、あのティアという子供も、夢には気を付けてと言っていたが……。そういえば、エレインも近頃、変わった夢を見た気がする。変な夢だった。まるで現実のような感触……エレインは微かに笑った。馬鹿らしい。どんな夢でも、所詮夢じゃないか。

「夢は心の奥底と繋がっている。心の底には、自分も知らん自分がおる。そして、そこは人の

心の中で最も脆くて弱い部分や。不安や恐れ、心に隙があると、そこによくないもんが纏わり付いてくる。心に魔が取り付くと、人は簡単に魔道に堕ちる……気を付けや」

「……」

バラハムの言葉に、エレインはうな垂れて何か考え込んでいたが、やがて、口を開いた。

「……わたしは今、自分の力の無さに怒りを覚えています」

「ほう？」

「理想と現実の違いに絶望しています。善良な民を救う事が出来ない自分の無力さに……わたしにもっと力があれば、誰も苦しむ事なんて無いのに……わたしは、わたしの理想を実現するために力が欲しい。わたしはこの国を、豊かで貧困も飢えも無い、貴族も民も誰も苦しむ事の無い国にするつもりです」

エレインが言った。

「危険やな」

「危険？理想を求める事がですか？」

エレインが反発するように言った。

「理想のために力を求める事がや」

そう言うのと、バラハムは難しい顔をして押し黙ってしまった。が、やがて……。

「これは……イーリアスの経典なんかには絶対に書かれへん禁忌やけどな……かつて魔王モートも理想を求める優れた王だった。モートも若い頃は、今のおまえさんが言ったような、理想

国家の建設の情熱に燃えていたそうだと。事実、彼は奴隷解放といった、あの時代の古く悪質な因習を次々を壊していきおった。まさに新時代の革命児やな。彼の求めた理想とは、奴隷も平民も貴族の階級が無い、いや人間やエルフ、ドワーフといった種族の壁さえ無い、完全な理想国家。そんな国家がもし出来ていれば、まさに地上の楽園やな」

バラハムが言った。

エレインは驚いた。エレインにとって、魔王モートといえば、まさに悪の象徴、残虐のかぎりを尽くした暴君というイメージしかない。バラハムから聞く人物像からはかけ離れていた。

「しかし……モートは自分の理想を求めるときに力を求めおった。理想国家の建設を、力で押し進めようとしたんやな。ただ一途に民の事を思つてな。だが、その結果はどうなつた？彼の民は苦しんだし、モート自身の心はもっと苦しむ事になりおった。そして、かつては彼が愛した民、その民が起こした反乱によって、破滅した。魔道に堕ちたもんの憐れな末路や」

「……」

「アトロが勇者と呼ばれ、魔王モートを倒す事が出来たんは、アトロがモートよりも力を持っていたからやない。モートや今のお嬢ちゃんが求めていたような力とは、全く別の『強さ』をアトロは持っていたからや。そこを間違うてはあかん」

「……アトロの持っていた『強さ』とはなんでしょう？」

エレインにはわからなかった。力以外の何で、アトロはモートに勝てたと言うのか。アトロが勝つたのは、モートより力があつたと言う以外、言いようが無いではないか。エレインには、

バラハムの言葉が、何の責任も持たない僧侶の、ただの詭弁に聞こえた。

「そんな、わしは知らん。自分で考え。わしなんかより、アトロの血族であるお嬢ちゃんのほうが、本能的にそれを直感できるはずや」

バラハムは笑って言う。

「……わたしには、わかりません」

エレインの、正直な言葉だった。本当にわからない。

「心を研ぎ澄ませ、己の心を平常に保っておれば、自ずとそれは見えてくるわい。いいか、心の安定を得る事が大切や。怒りや悲しみ、恐れは心に隙を作る。ろくでもないもんは、その隙に纏わり付いてくる」

「……」

「エレイン、けっしてモートの二の舞にはなるなや。モートのように、理想のために力を求めるなんて安直な道を選ぶと、おまえまで魔道に堕ちる事になるで」

「大丈夫です。見ていてください。わたしは正義の道を歩んで見せます」

エレインが力強く言う。しかし、その言葉を聞いたバラハムは顔をしかめた。

「そう言っている奴が、一番危ないんや……」

バラハムは呟いた。

ロアは深い森の中を走っていた。

側面の茂みから、いきなりトロロークが躍りだす。手に持つ錆付いた巨大な鉄の斧がロアに向かって唸りをあげる。ロアは軽くそれをいなすと、上に飛び上がり、両手を組んでトロロークの頭に振り下ろす。巨大な牛に似たトロロークの頭はトマトのようにぐしゃりと潰れた。

咆哮が上がり、次々とトロロークが森から姿を現す。ロアはトロロークの間を超人的な動きで飛び回る。蹴り飛ばし、投げ飛ばし。僅か数分後には、森の中にトロロークの死体が山積みされ、ロアは無傷でその中に立っていた。

「ワハハハ、俺様無敵」

満足気に腰に手を当てるロア。で、辺りを見回してみると、アッド達の姿が見えない事によりやく気付いた。

「……うん？みんなどこ行った？……というより、俺がどっか行っちゃまったのか？」

トロロークを追う事に夢中で、森の中の何処をどう走ったかまったく覚えてない。覚えてるのは、逃げるトロロークまで執拗に追いかけて、少なくとも十数kmは駆け回ったという事だ。ロアはキョロキョロと辺りを見回して、「おーい」とか叫んでみるが、誰の声も返ってこない。

「まいったな。俺、方向音痴だし、こりゃ完全に迷子だな」

そう言いながらも、適当な方向にずかずかと進んでいくロア。彼の頭には、そこで仲間を

待っていたほうが確實という考えはないらしい。

魔界の森は、昼間だというのに、薄暗かった。得体の知れぬ不気味な色をした植物が生えていて、遠くでは恐ろしい獣の遠吠えが聞こえた。

進めば進むほど、森は深くなっていく。一時間も歩いた頃、ロアの目の前で哺乳類か虫だかわからない気味の悪い生き物が横切った。その生き物は基本は猫みたいなんだが、足が六本ある。おまけに尻尾は文字通り毛の生えた太い蛇で、ちゃんと目はあるし開いた口から赤い舌をちろちろと覗かせていた。猫の顔か蛇の方か、どっちが頭なんだろうと眺めていたロア。とりあえずロアはその生物を『猫蛇』と名付ける事にしたんだが、その猫蛇とロアの目が合った。毛を逆立たせ、六本の足をばたつかせ、威嚇する猫蛇。なんか物凄く凶暴そうだなあとロアが思っている時、突如、猫蛇の横の黒い木が大きく揺れた。

ギャーツと森の中に響く猫蛇の悲鳴。黒い木の幹が裂け、そこから文字通り真っ赤な口と白い牙が見え、その牙に猫蛇は食いつかれていた。そのまま上体を大きく揺らし、猫蛇を完全に飲み込んでしまう猫蛇喰い（ロアはこの木を『猫蛇喰い』と名付ける事にした）。驚いた事に猫蛇喰いは、木のくせに、どすんどすと音をたて、根っこの足で歩きだした。ほんとに植物か？

「あー、なんか変わったところだな。あ、こら、俺を喰おうとするな。おまえは猫蛇喰いだろうが」

噛み付こうと寄って来た蛇猫喰いを殴り倒して、ロアは先に進んでいく。歩けど歩けど、仲

間は見つからないし、景色は変わらない。いや、むしろどんどん周りの景色は不気味になっていく。

お腹の虫が鳴った。

「……腹減った」

ロアが呟く。昼食前に迷子になったのが痛かった。

「いつもなら鼠か兎でも捕まえて食べるんだが……さすがになあ……」

そう言っただけで辺りを見回す。なんか周りにいるのは、喰ったら悪食のロアでも即死してしまいうるような不気味な生き物ばかりだった。

でも、またお腹の虫が鳴った。

「……いや、猫蛇とかは案外うまいかも……」

呟くロア。

で、また目の前で猫蛇が横切った。ぴたりと猫蛇が立ち止まる。両者の目がぴたりとあった。ロアの瞳がきらりと光る。異様な殺気を動物の本能で感じたのか、猫蛇はビクリと身体を震わした。

じりじりと詰められていく間合い。ロアのギラギラ光る目と、猫蛇の脅えた目。

猫蛇が急にロアに背を向けた。

「逃がさんッ！」

ロアが駆け出した。猫蛇は脱兎の如く、一目散に逃げていく。猫蛇の足は、足が六本あるせ

いか、人間界の猫より遙かに速かった。その小さな身体で草陰を走り抜けていく猫蛇、森の中を駆け回るロア。捕まえようとするとロアの手をすりすりすとすり抜けていく。

「わはは、なかなかやるな。だが、……」

ロアが速度を上げた。

「……貰ったッ！」

ロアが中腰のまま、猫蛇を手に掴もうとする。が、その時、何かに足をとられ、思いっきり前に転倒するロア。鼻から土に突っ込む。その隙に猫蛇は逃げ去っていった。

「いたた……いったい何だ？」

何につまづいたのかと、ロアは自分の足を見ようとする。

その足が、突然、後ろに引っ張られた。

「何だッ!? 何だッ!?!」

凄い勢いで地面を引きずられていくロア。驚いて腕をじたばたと動かす。だが、止まらない。十数メートルも引っ張られて、急に、天と地が逆転した。ようやく動きが止まる。

「……いったい、何なんだ？」

腕を組んで、考えるロア。状況はよく、というかまったくわからないが、少なくとも現状は、足にロープが絡まり、木から逆さ吊りされている。

「ありや? これまた変てこな獲物が罠に掛かったわね」

茂みから姿を現した女が、吊り下げられたままブラブラ身体を揺らしているロアを見て、目

を丸くして言った。

「誰だ、あんた？」

「類人猿かしら……知能は低そうだけど……まあ、よく焼いたら、食べられない事はないか……」

「……おいおい、俺は美味しくないぞ」

「くせが強そうだから、首を切ってしっかり血抜きをした方がよさそうね」

「おい、こら。人の話を事を聞け」

腰の鞘からいかついナイフを引き抜いて、こっちに近寄ってくる女に向かって言うロア。

「あはは、冗談よ」

女はそう言うのと、さっとナイフを振ってロアの足に絡まっていたロープを切った。どさりと地面に頭から落ちるロア。

「あーあ、しっかし、これでまた昼飯抜きか……」

女が呟く。

「わけもわからないまま逆さ吊りにされた俺の事はなんとも思わないのか？」

地面で打った頭をさすりながら、ロアが言った。

「あっと、ごめんごめん。大丈夫だった？」

女が笑って手を差し出す。ロアはその手を掴んで立ち上がった。

見れば、若い女で、女性にしては長身。丈夫で動き易そうな服装で、腰にはごついサバイバ

ルナイフ、履き潰された皮のブーツ。そして、何より目を引くのは、染めてるのだから何だか知らないが、黒味を帯びた艶やかな赤い髪だった。

「しかし、驚いたわよ。こんな魔界の森の深部で人に会うなんて」

女がロアに言った。

「俺も驚いたよ。いきなり逆さ吊りにされたんだからな」

「もう、しつこいなあ。ごめんって言ってるじゃない」

「まあ、それはいいんだが……あんたこそ、こんな森にいるなんていったい何者なんだ？」

「わたし？わたしは吸血鬼よ。名前はレイナ。魔界じゃちよつとは名の知れたハンターにして冒険家。この森には旅の途中で通ってるだけ」

「吸血鬼!？」

ロアはびっくりして身を引いた。

「ん？なに驚いてるの？あなただって吸血鬼でしょ？」

「……そりやそうだけど、俺は、……ってなんで俺が吸血鬼って知ってるんだ？」

「そんなの見ればわかるわよ。あなた、わたしと同じ匂いがするから」

笑ってそう言うレイナ。その瞳が、一瞬、きらりと金色に光る。ロアはボールス以外の純粋な吸血鬼に会った事はほとんどなかったから、なんだか不思議な気がした。

「で、あなたの名前は？」

レイナがロアに聞く。

「ロア」

ロアが言う。

「ロア？あのロア・ソア？」

レイナが目を丸くして言う。

「なんだ。やっぱ、知ってんじゃないか」

「そりゃ知ってるわよ。そっか……あなたがあのロアなの……我等が始祖、ボールスを殺したっていう親殺しのロア……全ての吸血鬼の仇敵……」

そう呟くレイナの瞳が、ギラギラと金色に光る。レイナの全身から放たれた殺気に、ロアがとっさに身構える。レイナが金色の瞳でロアを見つめる。

「……ぶ、はは、あははは」

いきなり、レイナは腹を抱えて笑い出した。ロアはきよとんとした目でレイナを見る。

「そんなに恐がらなくてもいいわよ。わたしはボールスの仇とろうなんて気はさらさらないから。そうか、これが噂のロア君ね。あのボールスを殺したから、どんな化け物みたいな吸血鬼かと思えば……あはははは」

苦しそうに、腹を押さえて笑い続けるレイナ。しかし、ロアはまだ身構えたままだった。先ほど放たれたあの殺気。紛い物とは思えなかった。本当にロアを殺るつもりなの、殺気だった。

「……自分のボスが殺されたのに、何とも思わないのか？」

ロアが怪訝そうに聞く。

「ボス？そりや、ポールスはわたしの産みの親かも知れないけど、それを言えばあなただって同じでしょ？でも、わたしはポールスに忠誠を誓った覚えなんてないし。むしろ、いずれはこの手で殺してやろうと思っていたわよ、あんな男……」

レイナが複雑な表情でポールスの名を呟く。妙な表情だった。言葉に出来ない怒りや悲しみ、歓喜が織り交ざったような……。

「殺すとは、そりやまた……」

「自分でも変わった吸血鬼だとは思わよ。でも、あいにくわたしは誰かに仕えるなんて事が性に合わないの。せつかくこの世に生まれたんだもの、つまらないものに縛られてなんかいいで、この広い世界で好きに生きた方が楽しいじゃない」

レイナがまた笑って、言った。もうレイナの中から殺気は完全に消えていた。ロアも安心してように緊張を解く。

「それで、ロア君はこんなところで何してんの？」

「うーんと、仲間とはぐれたんだけど……まあ、進んでいけば何とかかなるかなと」

「行きたい方角はわかってるの？」

「方角？さっぱりわからないよ」

ロアがあっさり言った。

「飽きた……こんなところで迷ったら、いくら吸血鬼だって生きてこの森から出れないわよあなた、ここがどんなに危険なところかわかってるの？」

レイナが叱るようにロアに向かって言った。

「まあ、魔界だから、多少は危険だと思っけど……前に魔界に来たときは、そんなに強いモンスターにも出会わなかったから」

「あのね、一言に魔界って言ったってむちゃくちゃ広いのよ。比較的開かれた危険の少ないところもあれば、どんな魔族だって恐れるような未開の地もあるわ」

「はあ……」

「『はあ……』じゃない！」

レイナがびしりと言った。

「ロア君はあまい、あますぎる！よくそんな事でこの魔界で生きてこれたわね！」

「いや、俺は人間界で暮らしてきた吸血鬼だから……」

「いい？魔界の秘境にはね、あの十三使徒だって真っ青になって逃げ出したくなるような化物がうじゃうじゃいるのよ。そうね、例えば『大蟲』。こいつは魔界の地中奥深く住む巨大なミミズだけど、その全長は千メートルをゆうに超え、その口は小さな山をも飲み込むと言われている。それに『餓鬼蟻』。体長5cmほどの蟻で、百万匹以上で群れを成す。この餓鬼蟻は恐ろしく獐猛で、群れの移動途中にあるものを全て食い尽くして進んでいく。こいつにかかれば巨大なドラゴンだって三十秒で骨だけにされるわ」

「へえ……それは怖い」

ロアはあんまり興味なさそうに相づちをうつ。レイナはロアの態度など気にせず、話し続け

る。

「ね、この世界には私達の想像も出来ないような化け物がまだまだいるのよ。まだ誰も足を踏み入れた事のない秘境、そこに住む未知の生物達。ああ、ロマンだわ。考えただけでぞくぞくする。誰も目にした事のないものを見てみたい。それが私の夢なの」

熱っぼい瞳で語るレイナ。

「はあ……がんばってください」

ロアが呟いた。

その時、遙か遠くで声が聞こえた。アッド達の声だ。ロアが声のした方向を振り返る。

「お、アッド達だ。じゃあ、俺、行くわ」

「そう。じゃあ、元気でね。何をしてるのか知らないけど、気をつけて」

「おう」

「バイバイ」

レイナが笑って手を振る。

ロアが走り去っていく。その姿が森の奥に消えるのを見送って、レイナは後ろを振り返った。その表情からは笑みが消え、鋭く光る目で森の奥を見つめる。

「……あの能天気さんは気付かなかったみたいだけど、わたしまで気が付かないとも思ってるの？」

レイナが森の奥に向かって言う。

答える声はない。

レイナが素早く腰のナイフを引き抜いて、森の奥に向かって投げつけた。野鳥が声を上げて飛び立つ。レイナはゆっくり奥へと進んでいった。太い木の幹に、レイナのナイフは突き刺さっていた。レイナが幹からナイフを引き抜く。見ると、刃には僅かに血が付いていた。

「……で、誰だか知らないけど、わたしに何の用なの？」

レイナが言う。いつのまにかレイナの背後にフードを被った男が立っていた。

「なかなかいい腕をしてらっしゃる。あやうく胸をナイフで貫かれるところでした」

「何の用だつて言ってるのよ。返答しだいじゃあ、この場で殺すわよ」

レイナが瞳を金色に光らせて、言う。

「これは失礼しました。わたしの名前はサルトと申します」

フードの魔族は深々とお辞儀した。

「サルト……聞いた事ある名ね。たしかモードレッドのところの高官……」

レイナが呟く。

「わたしの事をご存知でしたか。ならば用件の方もお察しできるでしょう。今日はモードレッド様の命で来ました。モードレッド様が、あなたにお会いしたいと」

「ふふふ、笑わせてくれるわ。あの十三使徒の副王様が、わたしみたいな下級魔族に何の用だつて言うの？ それにあなたみたいな高位魔族をわざわざ使いによこして」

レイナはサルトを見て、自嘲気味に笑った。

「下級魔族ですか……たしかに線引きの難しい言葉ではありますが。少なくとも、ほんの数十年前まであのポールス殿の片腕とまで呼ばれた強力な吸血鬼に用いるには不適な言葉だと思いますがね」

「……」

「一緒に来ていただけますね？」

「断ると言ったら？」

レイナがそう言った途端、辺りから気配が発せられた。森の奥の闇から、無数の光る目がこつちを見ている。囲まれていた。

「有無は言わせないわけね……」

「ご同行なされた方が賢明かと思えます。たとえ、今この場を脱する事が出来たとしても、モードレッド様の手からは逃れられません」

サルトが懇懃な口調で言った。レイナはしばらく手でナイフを弄んでいたが、やがて鞘に収めた。

「行くわ」

レイナが言った。

そう言って一歩踏み出したレイナの脳裏に、なぜかポールスの姿が映った。懐かしい記憶。憎しみと愛しさが交じり合った記憶だ。その記憶の中に、ロアの姿が混じり込んだ。ぐるぐると溶け合っていく。

なぜだ？あのロアと会った時の、私の妙な心の昂ぶり。不安と温もりと憎しみと嬉しさと悲しみが、私の中で……わたしはロアに、いやかつてポールズに、私は何を求めていたんだらう？

体の奥で、静かに血が踊る。吸血鬼の血が……。

レイナはそっと胸を押さえた。

ここ数日、キャメロン城内では連日の戦略会議続きだった。ついにリスランが、軍を集結させ、この首都キャメロンに進軍中との伝令が入ったからだ。リスランの軍は、巨大だった。斥候の伝令によると、その数約二十万。リスランの本拠地からキャメロンまでの間にあるエレイン派の小城など、荒波を前にする砂城のようなものだ。足止めにもならない。リスランは蚊を振り払うように、押し潰して通るだろう。

今日もエレイン、ナナ、ティグレイン、十二大貴族の当主達をはじめとするエレイン派の有力貴族が大会堂に集まって、議論を重ねていた。

議論は二つに割れていた。リスラン軍との野戦での決戦は避け、主力を温存し、キャメロン城に立て籠もり、籠城で戦おうという意見が大半を占めていた。ナナをはじめとするエレイン直属の首脳陣もこの意見を推していた。自軍とリスラン軍の戦力差を考えれば、たとえ消極的

な作戦と言われようと、これが妥当な案に思えた。

もう一方は、過激な主戦派だった。この主戦派は若手の貴族達や、すでにリスランに領地を侵略されてしまった貴族達が主だった。彼等は若さゆえ血気にはやって、または失うものが無いせいか、野戦による決戦を強く主張した。

「野戦にうって出るべきだ！こんな所で議論しているだけ時間の無駄である！時間が経てば経つほど、我が方は不利になっていくばかりだ！」

大会堂で、若い貴族が席を立ち上がって言った。賛同を得ようと一同を見回す。一部の者達から賛同の声上がる。

「うって出て、勝てる保証はない。相手はこちらの倍以上の戦力なのだぞ」

歳は六十代ほど、紳士風の貴族、十二大貴族ヤース家の当主である、ドファン・ヤースが諭すように言った。

「少数が多数にいつも負けるとは限らない！戦は水物である！一か八か、決戦に出るべきだ！」

「話にならん……戦はギャンブルではないのだぞ。まして今回は、こちらに分の悪い勝負だ。そんな危険な賭けに、レディ・エレインのお命を賭ける気か？」

「なら、一体どうするのです？古来、箆城して勝った話など聞いた事がない！」

「相手は大軍。二十万もの兵の兵糧を確保するだけでも困難なはずだ。城に箆って持久戦に持ち込めば、かならず勝機はある」

「馬鹿らしい！こちらもキャメロンという一都市に、十万近い兵を集めているのですぞ！リスラン軍に町を包囲され、輸送路を封鎖されてしまえば、先に干上がるのは我々の方です。それだけでなく、前線ではリスランの大軍の前に手も足も出さず、敵側に寝返ってしまう味方の拠点も出始めているのだ！このままでは味方の士気は下がるばかりだ！」

「……持久戦にさえ持ち込めば、たとえ勝てずとも、我々で和平交渉を実現してみせる。そうすれば、最悪の事態だけは避けられる」

「何を言うかと思えば、戦う前から既に負けた時の事を考えていらっしやるとは！ヤース公、あなたは既にリスランと内応の約束でも取り付けられているのでは？」

「馬鹿な！口を慎まんか、小僧！」

裏切り者と言われ、さすがに温厚なヤースも声を荒げた。しかし、大貴族の消極的な案に不満を持っていた若手貴族達が、次々とヤースに野次を飛ばす。

「お止めなさい」

この場の副議長格であるティグレインが強く言う。しかし、中々騒ぎの声は収まらなかった。ティグレインは疲れたように額に手を当てる。

ティグレインやナナ、エレイン派首脳陣の考えは決まっている。箆城だ。野戦で戦うには、あまりに敵との戦力差がありすぎた。この会議はあくまで主戦派の貴族達を説得する場であった。だが、一向に主戦派の勢いは収まらなかった。その原因は、味方の総大将であるエレインだった。

そう、エレインだ。ティグレインは心配そうに、自分の横に座っているエレインを見た。エレインは、我関せずと言った風に会議の論争にはまったく耳を貸さず、何か黙って考え込んでいるようだった。ここ数日、会議でエレインは一言も意見を発していない。

始め、じゃじゃや馬なエレインの性格を考えれば、エレインは必ず攻戦的な作戦に出るだろうと、ティグレイン達は予想していた。そのエレインを会議上でなんとか説得して、籠城作戦に賛成してくれれば、主戦派の貴族達も従わざるえない。

しかし、予想に反して、エレインは野戦を主張しなかった。それどころか、何の意見も主張していない。うって出るのか、籠城するのか、それとも降伏するつもりなのか……ナナ達心にもエレインが何を考えているか、わからなかった。総大将の意思がまだどちらにも傾いていない。その事が主戦派の勢いを煽る事となった。

「エレイン様！どうか、決戦のご決断を！」

若い貴族が、エレインに向かって言った。ずっと机の一点を見つめていたエレインが、急に呼びかけられて顔を上げ、目をぱちりと瞬かせて、その若い貴族を見た。

「……？」

「ご決断を！」

「……ああ、そう言えば、もうこんな時間ですね。では、今日は閉会とします。続きはまた明日に」

エレインはそう言って立ち上がると、呆然と見つめる貴族達を気にもしないで、さっさと一

人で大会堂を出て行ってしまった。

嘩然として、誰一人声が出ない。

「……いったい、エレイン様は何を考えていらっしやるのだ？」

一人がぼそりと声に出す。あたりがざわめき始めた。

「まさか……すでに勝てないと悟って、諦めていらっしやるのでは……」

「考えられますな……戦力差が戦力差ですし……」

「いや、しかし、レディ・エレインは先代アヴァロン王も手を焼かれたほどの気性のお方。この期に及んでそんな弱気になるはずが……」

「……所詮、女性という事でしようか……やはり、いざとなると戦いが怖くなったのでは？」

不安の声は、ざわめきと共に、部屋に広がった。その不安を一蹴するように、凜とした声が部屋に響く。

「皆さん、静まりなさい。聞いたとおりです。今日は閉会とします。明日も同じ時刻にお集まりください」

そう言って立ち上がるティグレイン。しかし、そのティグレインの心の中にも不安の影はよぎっていた。

エレインの自室の扉が叩かれた。入ってきたのはティグレインを先頭に、ヴァース、サレン、

ヤース。エレイン派の十二大貴族の五人のうちの四人。

エレインは机に向かい、椅子に座っていた。静かに本を読んでいる。その後ろにはライオネルが立っていた。

入ってきた四人がエレインの前に並ぶ。

「おや、皆さんお揃いで。何事ですか？」

エレインが本から顔を上げ、一同を見て言った。

「レディ・エレイン、本など読んでいる場合ではないでしょう！こうしている間にも、敵の大軍は迫ってきているのですぞ！うって出るか、籠城か、今日こそ御決断頂きたい！」

この中では一番若い若いサレンが、詰め寄るようにしてエレインに言った。

「ああ、その事ですか。その事なら、まだ未定です」

エレインはあっさりと言うと、本に目を落とした。

「未定って……敵はあと数日でこの町に到着するのですぞ！」

サレンが怒鳴る。そのサレンを制するように、ヤースが一步前に出た。彼の表情は、サレンと違って、落ち着いている。

「レディ・エレイン、まだ命令を下さないのも何かお考えがあつての事でしょうが……これ以上は兵士達の士気に関わります。せめて、我々だけにでも、どうなさるおつもりか話していただけないでしょうか？」

「考え？考えなどありません」

ヤースの言葉に、エレインが答えた。

「まな板の鯉は動かぬものです。じたばたしてどうにもならないなら、大人しく観念しているのも一興でしょう」

「馬鹿な！」

サレンが叫んだ。

「降伏なさるおつもりか？リスランの性格はご存知でしょうか？今さら降伏を申し立てたところで、受け入れるリスランではない。いや、たとえ我々は万が一命が助かることがあったとしても、レディ・エレイン、あなただけは間違ひなく処刑される」

「……でしょうね」

エレインはくすりと笑った。

「なら……」

「言ったはずです。未定だと」

サレンの言葉を遮って、エレインが強く言い放った。エレインの眼光に射すくめられたように、サレンはうっと押し黙る。

そこに、一人の兵士がエレインの部屋に入ってきた。全身は血と汗にまみれ、戦場の殺気そのままに、肩を上下させながら荒い息を吐いている。

「……申し上げます。我が主人、モズヴァニの居城が敵勢に囲まれております。援軍を要請をお願いに参りました」

血にまみれた兵士が言った。モズヴァニ公は、エレイン派の十二大貴族の中でただ一人、スランのキャメロン侵攻経路途中に領地があるので、自己の領地の守りのために自家の手勢を連れてキャメロンを離れていた。この兵士は敵の包囲網を突破して、ようやくこのキャメロンまでやってきたのだらう。敵兵をたった一人で突破して、休む暇も寝る暇もなく、ただ援軍を待つ仲間のために一刻を争って馬を走らせてきた。その旅は想像もつかないほどの苦難であつたらう事は、彼の悲愴な姿から見て取れた。

「……」

エレインは黙ったまま、じつとその無惨な兵士を見つめた。

「敵は二十万を超える大軍。我が方は一万にも足りません。このままでは落城は時間の問題。なにとぞ、援軍を」

兵士は跪いて、頭を地にこすり付けて、言う。部屋にいる一同は、苦しい表情でその兵士を見つめた。

「……援軍は送れません」

兵士を見下ろして、エレインが冷たく言う。平伏していた兵士の肩が震えた。

「モズヴァニ公を見殺しになさるおつもりですか！あの方はあなたのお父上の盟友、あなたにとつても叔父同然のお方でしょう！」

サレンが怒ったように言った。

「だからどうだと言うのです？それに今さら五千や一万の兵を送ったところで、焼け石に水で

す。どうしようもありません。それはあなたにもわかってはいるはず。それとも、全軍を引き連れて援軍に行けというのですか？」

サレンは拳を握り締めて、黙り込んでしまった。サレンにもわかっている。そんな事をすればキャメロンの守備が空になる。敵軍が迂回してキャメロンに到達すれば、それでこの首都は落ちてしまう。そうなれば終わりだ。

ヤースが口を開いた。

「しかし、まったく援軍を送らないというのも……せめて一万なり援軍をお送りになれば、モスヴァニ公の兵の士気も高まります。モスヴァニ公はレディ・エレインの御恩に奉じるため、死を賭して敵と戦うでしょう。逆に援軍を送らなければ、言いたくはない事ですが……敵に降伏しかねません。絶望的な状況でしょうし、敵に降伏したところで、我々にモスヴァニ公を責める事はできません。」

「その心配はありません。そうですね？」

ヤースの言葉に、エレインが平伏していた兵士に言った。兵士は立ち上がり、ギラギラと輝く目で、エレインを見据えた。

「我が主人、モスヴァニは恥を知る騎士です。如何なる苦境にあらうと、なんでアヴァロン王の御恩を忘れましょう。我々は胸を剣で突かれ、脳髓地にまみれる事にならうと、逆賊リスランに降伏などいたしません。最後の最後まで戦い抜きます。」

兵士は血に濡れた唇絵を噛み締め、言った。

「よく言ってくれました。たとえここで死すとも、モスヴァニ公とその旗下の勇卒達の名は、国を救った勇者として、永遠にこの国の歴史に刻まれるでしょう。兵の援軍は送る事が出来ませんが、このわたしの言葉を援軍としてモスヴァニ公に伝えなさい。兵達は一万の援軍に勝る勇気を得るでしょう」

「はっ！」

兵士はエレインに敬礼して、部屋を出て行くこうとする。それをヤースが引き止めた。

「そなたは帰らんでいい。全身傷だらけで、今にも倒れそうではないか。戦場から数日、不眠不休でここまで駆けて来たんだらう。モスヴァニ公への伝令には、わたしの部下から誰か適当な者を選んで送る。そなたはこの城でゆっくりと休め」

「やめなさい」

エレインがヤースに向かって、きつく言い放つ。ティグレインも頷いた。

「レディ・エレインの言うとおりです、ヤース公。死を賭してここまで来たこの若者、ここで引き止めては彼の名誉に傷を付けてしまいます。彼も仲間と共に戦って、仲間と共に死ぬ事を望んでいるはず。ここは黙って行かせてあげましょう」

ティグレインの言葉に、ヤースも兵士を引き止めることはやめたが、まだ哀れそうな目で兵士を見ていた。

兵士は黙って、エレイン達に敬礼すると、部屋を出て行った。

「……見上げた者ですね。彼のような若者がいれば、この国の未来はまだまだ明るい……そう

だ、せめて簡易な食料を持たせましょう。馬上の旅でも邪魔にならない物を……」

ティグレインは侍女を呼んで、先ほど出て行った兵士のために食料を用意するようにと命じた。

兵士が出て行った後、一種の悲愴な空気が部屋を重く満たした。沈痛な表情で、誰も口を開こうとしない。やがて、エレインの言った「用が終わったのなら、出て行ってください。わたしも暇ではないのです」という言葉に、ティグレイン達四人は部屋を出る。

宮中の広い廊下を歩く四人。皆一様に押し黙っていたが、やがてヤースが口を開いた。

「……レディ・エレインも何を考えてらっしゃるのか……先ほどの兵士にはああ言っていたが……これでエレイン様が戦わずしてリスランに降伏なんて事になったら、モスヴァ二公もあの若者も無駄死にだ……」

ヤースが呟く。

だが、ティグレインはエレインが降伏を考えているなどとは思えなかった。時折、エレインが見せるあの瞳の光。あれは戦う事を放棄した敗北者の目じやない。断固として揺ぎ無い、戦いの意思に満ちた瞳だ。何事も恐れぬ勇氣と固い意思。その二つが自分よりも優れていると思っただからこそ、ティグレインはエレインをこの国の女王として支持したのだ。彼女こそ、この国に光と希望をもたらす女王になるだろうと。

だが、最近のエレインの瞳を見ると、時々、なぜか心が寒くなる。ティグレイの心の底に、不安の影が揺らついているのだ。それが何かわからない。自分がエレインの何に脅えている

るのか、わからない……だが、予感がするのだ。光と希望を引き換えに、絶えられぬ絶望と悲しみを、エレインが運んできそうな気がして。

「……レディ・エレインのお考えがどうであろうと、我々はレディ・エレインに忠誠を誓った身。如何なる事態になろうと、我等はレディ・エレインのために行動すればよい」

テイグレインの不安を打ち払うように、ヴァースが言った。

テイグレイン達四人が部屋から出て行った後、エレインは手にしていた本を投げ出し、机の上に地図を開いた。レオデグランス全土を描いたその巨大な地図上には、部分部分に赤いバツ印と赤い線が引かれてあった。バツ印は斥候からの連絡を元に描いたリスラン軍が落とした味方の拠点、赤い線はリスランの侵攻経路だった。

真剣にその地図を見つめるエレイン。ふと、自分の後ろにライオネルが立っている事を思い出した。その存在を忘れるほど、ライオネルは無言であった。

「……あなたは、わたしが何を考えているか気にはならないのですか？」

地図を見つめたまま、エレインは言った。

「あなた様が何を考えていらっしやろうと、わたしの仕事はエレイン様を守る事です」

ライオネルは言った。

「……しかし、本当にどうしましょうかね？敵は二十万。味方で動員できるのはせいぜい十万足らず……この状況じゃあアトロだだって逃げ出したくなるでしょう」

エレインは自嘲気味に笑う。だが、ライオネルは笑わない。厳しい顔でエレインの後ろに直立している。エレインの顔から笑みが消えた。

「そんな怖い顔で、無言で後ろに立たれては、纏まる考えも纏まりません。わたしの事はいいですから、あなたも自室に戻って休んでください」

「お断りします」

きっぱりと答えたライオネルの言葉に、エレインは溜息を漏らした。

「ここのところ続いている、わたしを狙ってくる刺客の事を心配してくれているのでしょうけど、わたしなら大丈夫です。わたしももう子供ではないのです。自分の身ぐらい、自分で守れます」

「……」

だが、ライオネルは無言のまま動かない。エレインは怒ったように、ライオネルの方に振り向いた。

「はっきりいいます。わたしはあなたの身を心配しているのです。わたしは二度と、わたしの身近な人が傷つくのは見たくないのです」

「……」

「……こんな事は言いたくなかったし、わたし自身何故だかわからないけど……今のわたしはたぶん、あなたより強い。あなたがいれば、逆に足手まといです」

「……」

ライオネルは動かない。

「……これ以上、命令に背くなら、衛兵を呼んででも、あなたを外に放り出しますよ」

イライラした口調で、エレインが言う。

「御勝手になさればよろしいでしょう。わたしも、衛兵を打ちのめしてでも、勝手にさせていたたく」

その主人を主人とも思わぬ口調に、エレインの表情にも怒気が走る。が、やがてエレインは笑いだした。政務について以来、久しく忘れていたかもしれない、くったくのない笑顔。

「あなただけは、本当に変わりませんね。わたしが物心付いた時から、ずっと変わらない。本当に石のような人。あなただけはずっと、わたしの側にいてくれる……」

「……」

「前言は撤回します。あなたはやっぱりわたしより強いですよ。いくつになっても、わたしはあなたに勝てそうにありません」

エレインは笑って、巖のような顔をしているライオネルに言った。

リスランは葦毛の駿馬の引く優美な馬車に乗り、甲冑を着た兵士で山河を埋め尽くさんばかりの大軍をレオデグランスに向けて進めていた。

鋼鉄の箱の中で、銀の皿に乗せられた葡萄を摘みながら、リスランはうつつすらと笑う。馬上

での指揮は、リスランは嫌いだった。馬に長時間乗っていると腰が痛くなる。馬車の方がはるかに進軍が楽だ。

戦鬪は何の問題もなく進んでいる。エレイン軍の抵抗は予想していたより遥かに少なかった。ほとんどの貴族の砦は抵抗らしい抵抗も見せず、ある者はさっさと逃げ出し、ある者はリスランに降伏した。

最大の抵抗を見せたのは、エレイン派の十二大貴族の一人、モズヴァニだ。彼はたかだか一万の兵で居城に立て籠もっていた。当初、リスランはこの程度の敵戦力などまるで気にしていなかった。モズヴァニも馬鹿ではない。戦力差は歴然、適当な餌を付けて勧告書でも送ればあっさり降伏してくるだろうと思っていた。だが、リスランの予想に反して、モズヴァニは勧告に応じないどころか、積極的に攻撃を仕掛けてきた。リスランは呆れた。城から出てきた敵軍を軽く蹴散らし、城を包囲する。そのまま再三攻撃を加えたが、いくら待ってもモズヴァニが降伏してくる気配はない。

こんなところで手間取っているわけにはいかない。リスランは総攻撃を命じ、モズヴァニ軍の抵抗も激しかったが、一週間ほどで城を陥落させ、モズヴァニ公以下主だった者の首じるしを上げた。

進軍し始めて以来、連戦連勝で兵の士気は高まっていた。もはや、何の障害もない。残るは首都キヤメロンを制圧するだけだ。

リスランを乗せた馬車が急に止まる。馬車のドアが開いて、士官の一人が顔を見せた。

「何事ですか？」

「最前線で敵の小勢力が急に戦闘を仕掛けてきました、おそらくはエレイン派の貴族の残党か何かでしょうが……僅か数百ばかりの敵兵で、ここからは数キロ先で事ですので、ご安心ください」

「またですか」

リスランが面白くないように言った。進軍が途中で止められるのは、今日だけでもこれで三回目だ。せっかく連勝で気分がいいところなのに、僅かばかりの敵兵に目の前をうろちよろされてはうっとおしい事この上ない。

「もっと四方の軍を分散させて、敵兵を発見しだい殲滅するようにしなさい。たかが数百ばかりの敵兵の攻撃に、こう何度も中軍の進軍を止めていては味方の士気に関わります」

「はい。そう全軍に伝えます」

士官は敬礼して下がった。

数十分して、馬車は動き出した。敵兵を殲滅したか、逃げ出したのだろうか。

リスランは馬車の窓から外を眺めた。遙か遠くに山脈が見える。『霧の山脈』と呼ばれる山々だ。その山脈を越えれば、平原に広がるキャメロンの都市が見えるはずだ。数百万の人々が住む、大陸最大の都市。世界の中心。

その女王に、わたしはなるのだ。

リスランは熟れた葡萄の甘酸っぱい酸味を口の中に感じながら、笑みを浮かべた。

その日、雨は昼を過ぎた頃から降り出し始めた。

伝令によって、モスヴァニ公の戦死がキャメロンに伝わった。リスランの軍勢はもう目と鼻の先にまで迫っている。エレイン派の貴族達は一樣に危機感を増し、軍議を重ねていた。

しかし、相変わらずエレインは軍議に出るも、皆の意見を聞いているのかいないのか、頬に手を付いて退屈そうに欠伸を噛み殺している。

そして、定時にはさっさと席を立って、大会堂を出て行った。

「本当に……エレイン様はどうなさるおつもりなのだ？」

「野戦にするにも籠城するにも、早く意思を固めていたただかんと」

「やはり、ただのおてんば姫……女王の器ではなかったのか……」

「これでアヴァロン家も終わりだな……」

そんな貴族達の声を知らずにか、エレインはこの日も最低限の実務だけこなすと、部屋にこもって、まだ夕暮れだと言うのに寢床についてしまった。ここ最近、エレインは昼間から寝てばかりいて、一部の貴族達に『眠り姫』だの『お昼ね王女』だの、さんざん陰口を叩かれていた。

日はとうに落ちて、夜空は真っ黒な雲が覆い、人々が寝静まり、静寂の中に響く雨の音が夜の闇を包んだ夜更け過ぎ。

エレインの部屋を扉を小さく叩く音がする。

その小さな音に、エレインはベットから身体を起こす。部屋の扉が静かに開き、二人の女性が暗闇の中、部屋に音もなく入ってきた。

「聞きましょう」

エレインが暗闇の中にひざまずいている二人、ナナとエステルに向かって言った。

「諜報部の報告では、リスランのいる中軍は『霧の山脈』を越え、その麓に陣をひいて休んでおります」

エステルが言った。

「よし！ナナ、そちらの方はどうです？」

「はい」

エレインの言葉に、ナナはにやりと笑って頷いた。

「うまくいきましたよ。こちらの嫌がらせにリスランは苛立って、軍勢を広範囲に分散させているみたいです。後軍もまだ山脈を越えていませんし、前左右の軍も中軍からは離れて夜営してますね」

その言葉を聞いて、エレインはベットから飛び起きた。

「ナナ、全員を叩き起こして、精霊廟に集めなさい！」

叩きつけるように言うエレイン。その言葉にナナは「おもしろくなってきました」と呟いて、さっと風のように部屋を出て行く。

「エステル！鎧と剣！」

「はい」

夜具を脱ぎ捨て、エステルの差し出した軽装の銀の鎧を目を見張る速さで着込み、腰に聖剣エクスカリバーを差す。美しい金髪を革紐で後ろに束ねると、眼光鋭い目で窓から外を見た。外はどしゃ降り雨だった。

「馬は？」

「鬼百合！」

「すでに城前に繋いでおります」

「よし！」

電光のように言い放つと、もうエレインの身体は部屋の外に走り出していた。

突如、出陣の角笛が吹き鳴らされる。その音に驚いたように城の中に明かりが灯り、ようやく騒がしくなってきた。

「これは何事だ？」

「どうやら、出陣らしいぞ」

「出陣！？籠城に決まったのではなかったのか？」

「わからん、わからんが、姫様はどこだ？」

「もうとっくに出陣なされたらしいぞ」

「なにッ！いかん、我等も急げ！」

エレイン派の貴族達は慌てて戦の準備をし、取るものもとりあえず駆け出した。

精霊廟とは、キャメロン城の横にある小高い丘の上に立つ神殿の事で、かつて勇者アトロはこの場所で精霊から啓示を受けたと言い伝えられている。

酷い嵐の夜だった。雨は天をひっくり返したかのように降り注ぎ、雷鳴は地を轟かした。

神殿前に、続々と兵士達が集まってくる。寝ぼけている者、わけもわからず走って来た者、慌てたせいか武器の不ぞろいな者。

エレインは兵士達の前に立ち、じろりと一同を見回した。雨が彼女の全身を濡らす。ぱつと雷光が光り、エレインの白い顔を浮かび上がらせた。

「聞け！」

エレインの声は、雷鳴に混じって、異様な大ききで彼等の耳に響いた。

「今、逆賊リスランはバルリット、リヴァ、アイレン、ボールハンド、レイマンといたった十二大貴族の子どもを扇動し、二十万の兵を起こし、ついに王位を篡奪せんと陰謀する。その陰謀を打ち砕こうとする我等は寡兵といえど、心中に一片の私心なし。王道の衰微を憂い、民の安寧を願う、正義の軍だ」

そう言うのと、エレインは聖剣を腰から抜いて、暗黒の天にかざした。

「かつて勇者アトロはここで古き精霊達の声を聞き、邪を払い善を敷き、この地に三百年の王

道の礎を築いた。そして今、ここで、わたしも神の声を聞いた。我等の破邪の願いを神が聞き届けてくれた証拠だ」

雷鳴がいちだんと大きく轟いた。

あっと、人々は叫ぶ。それはエレインの頭上に雷が落ちたかとも思われた。彼女の持つ聖剣が、いや彼女の全身が一瞬、眩いばかりの光りを放ったのだ。その神々しい白い閃光に、人々は畏怖した。

「神が後ろのついている。誓って今度の戦いは我々の勝利と決まった。疑うな。疑う奴は叩つ斬る！」

今まで見せた事のない、鬼神のような形相で言い放つ。それは必勝を期す、彼女の鉄壁の自信に見えた。

「おーッ！」

「おーッ！」

「おーッ！」

みんなはその凄まじい気迫におされて、一斉に切っ先を天に向けて応じた。

「ヴァース！」

「ここに」

ヴァースが一步前に進み出た。

「貴公に全軍の指揮権を与えます。今すぐ全ての兵を率いて、キャメロンを出発し、敵に正面

からぶつかりなさい。今日、雌雄を決するのです。一步も退く事は許しません！」

「はっ！」

「ライオネルはプリンセスガードを、ティグレインは自家の旗本の精鋭を率いて、わたしに続けッ！」

エレインはそれだけ言うと、返事も待たず、真っ白な愛馬『鬼百合』飛び乗ると、鞭を当て、彼方に駆け出していた。ライオネルやティグレインも一斉にエレインの後に続いて行く。

エレインの乗る鬼百合はぬかるんだ道を、泥を撒き散らして、疾風のように駆けて行く。黒い空から降り注ぐ大粒の雨が、エレインの頬に当たり、弾け、四散して、霧のように流れていった。

手綱を堅く握り締めて、馬を走らせ、闇の先を睨みつけるエレイン。雷光よりももっと眩しい、触れれば全てを溶かしてしまいたいような、白い輝きが私の中に溢れていく。自分の中の爆発してしまいたいような、熱くほとばしる力を、冷たい闇の中に流しだしたい。熱くて、堪えられない。いや、違う。苦しいのに、私はもっとそれを求めている。甘美な麻薬のように、わたしを犯す。もっと、もっと……わたしが弾けて消えてしまうほど……敵を、全てを、壊してしまいたい。

自分の中の全てを闇夜にぶつけ出すように、エレインの白い姿は暗闇の中を駆けて行った。

扉の向こうには、ネヴィーナにとって懐かしい気配、魔力に満たされていた。

その城は、古城とは言え大きい。そこを満たすほどの魔力。

彼女は、改めて知る事実に軽い畏怖の念を感じた。

古い記憶を頼りに小奇麗に清掃された廊下を進んでいく。

「何用ですか？」

その時、突然背後から声が掛かる。

瞬間に戦闘状態に移行し、素早く背後を振り返るネヴィーナ。

「おや、お嬢様、ネヴィーナお嬢様ですか！これはお懐かしい。かれこれ三百年ぶりですか
な？」

視線の先にはネヴィーナから発せられる気迫を物ともせず、好々爺な口調で言葉を嚙む身
なりの整った老人が佇んでいた。

「ド、ドウガン爺？ドウガン爺なのね！」

記憶の奥深く、その懐かしい顔を思い起こさせる老人にネヴィーナは声をかける。

「はい、お嬢様。ドウガンにて御座いますよ」

そういつてドウガンは恭しく頭を垂れた。

「……」

ネヴィーナは驚きと感嘆で声が出なかった。

彼女がまだ幼き頃より爺として、彼女達の世話をしてくれていたのだ。

いかに長寿の魔族といえど、さすがに……

そう思っていた。

「して、お嬢様この度はどのようなご用件でこちらに？」

沈黙しているネヴィーナの代わりにドウガンが口を開く。

その言葉に先ほどもまでの感情を収め、ネヴィーナは真剣な表情でドウガンに告げる。

「お母様はいらっしゃるかしら。今日はお母様に尋ねたいことがあって来たの」

「奥様ですか……ではこちらに」

一瞬意味ありげな表情を浮かべるが、瞬時に、ネヴィーナに悟られぬように表情を戻し、ネヴィーナを案内するドウガン。

ネヴィーナの瞳には決意の意思が宿っている。

長い廊下をしばらく歩き、いくつかの角を曲がったネヴィーナの前には、一際大きな扉が鎮座していた。

「ここに奥様がおられます」

ドウガンはそう静かに言つてノックする。

静かな廊下に、ドウガンのノックの音が響く。

ネヴィーナの表情にさらなる決意が満ちてくる。

そして、

「お入りなさい」

扉の向こうから静かな、しかし強烈なる意思と力を持った声が届いた。

「失礼いたします」

ドウガンはゆつくりと扉を開き、ネヴィーナを中へと誘う。

ネヴィーナも、力強い足取りで部屋の中に進んでいった。

部屋の中ほどまで進んで、ネヴィーナは軽く頭を垂れ、

「お久しぶりですお母様」

そう言つて顔を上げた。

その先には、書齋のような部屋の一番奥、大きな窓の前にこちらに背を向けて金髪の女性が

立っていた。

「そうね、三百年ほど。多少の乱れはありますが、元気そうですね」

そう言いながら、ネヴィーナの母はこちらに振り返った。

ネヴィーナの母と思えないような若さ。

姉と言われても疑いようがないその容姿が目につく。

しかし、そんなものよりも、眺めているうちに惹きつけられるのがその瞳である。

切れ長のその瞳には、意思の力が宿り、そこに引き込まれていく感覚がネヴィーナに起こる。魔界で最強の淫魔、サキュバスである母親の力であるのか。

「今日はお話があつて来ました」

しかし、その瞳の力を押し返し、目的を告げるネヴィーナ。

右手の甲を口元に当て、朗らかに笑い声を上げるネヴィーナの母。

「気迫が違いますわね。いいでしょう聴きましょう」

前半は、その笑顔のまま。しかし後半の言葉を紡ぐ表情は、力を持ったものであることを証明するような、そんな厳しさを持った表情であった。

ドウガンが用意した魔界紅茶を一口含み、ネヴィーナの母は静かに口を開いた。

「それで、話とは？」

静かにネヴィーナを見つめる。一直線に。

「……」

その眼力に押されているのか、ネヴィーナは口を開くのを躊躇われた。

この事を聴いてもなんの意味も無いかもしれない。

遙か昔、この質問をして、恐ろしい思いをした記憶がネヴィーナに蘇る。

恐怖に囚われそうになるネヴィーナ。

しかし、その脳裏にヴェネルクスの顔が浮かぶ。

そこで体が一気に軽くなるのをネヴィーナは感じた。

（そうね、立ち止まっても仕方ない。今は進む、そう決めたのよね、私は。）
心の中でそうヴェネルクスに告げる。

ネヴィーナにはヴェネルクスが満足げに頷いたように感じられた。

（そう、彼は前に進む人。進み続ける人。だから私も）

一度、魔界紅茶を口に含み。

まっすぐに母親を見詰め返してネヴィーナは告げた。

「私の、私に流れている血について聴きたいの」

静かだった部屋に、音も無く、しかし高速に広がるものがあつた。

それはネヴィーナの目の前から広がっている。

母親の殺気。

しかし、ネヴィーナは臆することなく母親を見つめ続けていた。

時間にしては約数十秒。しかし力無き者には永遠にも感じられた数十秒であつただろう。
数十秒後、殺気を収め、ネヴィーナの母が口を開いた。

「それを知ってなんとする」

いつもの母親の口調ではなく、一人の魔族の口調になっていた。

「私の中で暴れ回る力の正体を知り、飼いこなす」

母親の変わった口調を物ともせずキツパリと言い放つネヴィーナ。

暴れ回ると聴いた所で、一瞬驚愕の表情を浮かべるドウガン。

ネヴィーナの母は表情を崩さない。

更なる沈黙が部屋を覆う。

しばしの時間がそのまま過ぎる。

ネヴィーナはその間も母親から目を背けることはしない。

それだけの決意があるのだろう、そうネヴィーナの母は感じ取った。

「……いいでしょう。貴方の父親の、われ等の秘密を今こそ打ち明けましょう」

沈黙を破り、古き箱の鍵が今開け放たれる。

「その前に覚悟はいいかしら、このことを聞いたあと、貴方は判断を間違うことは許されな
い」

今までよりも強烈な威圧がネヴィーナを捕らえる。

「私は、私の思うとおりに判断する。そして、その判断を、正解にしてみせるわ」

その威圧を跳ね除け、ネヴィーナは大胆にそう言い切った。

「フフフ、それでこそわが娘。我等が王の娘ね」

ネヴィーナが威圧を跳ね除けた瞬間に、ネヴィーナの母から、至って普通に、しかし最大の爆弾が投下される。

「我が王の娘って！」

ネヴィーナがはっとなって思わず立ち上がる。
軽く笑みを浮かべながら言った先ほどとは違い。

顔に緊張感を持たせながら

「そう、貴方は私達の王、世界の霸王、モート様、唯一の娘、血族なのよ」
そう静かに言い放った。

風が流れたように感じる。

自分の対面から吹く強風。

そして、視線を上げた先にあるのは、息づく種。

最強という名を受け継いだ種。

その種に栄養を与えるかどうかはネヴィーナに託されている。

ある程度の戸惑い。

しかし、ネヴィーナは顔を上げる。

その種に栄養を与えるために。

育てるために。

「それが私の中の流れの正体。暴れまわった龍」

「そう。貴方はモート様の力を受け継ぎし者。その判断はすべての」

「関係ないわ」

母親の言葉を遮り、ネヴィーナははっきりと告げる。

「ネヴィーナ!?」

「さっきも言った通り、私は私の思うとおりに判断するわ。魔族とか関係ないわ。私に必要なモノはたった一人。その為に私は私の力を使うわ」

そう断言するネヴィーナ。

「それが魔族を救う道でも、滅ぼす道でも。私は迷わない、後悔しない。私の欲しいモノはひとつだけなの」

何かを言いたそうにしている母親に関係無用を言い放つ。

ドウガンが少し困ったような表情をしている。

そして

「フッフ、ハハハハ」

ネヴィーナの母が笑い声を上げ始めた。

思わず呆気にとられるネヴィーナ。

ドウガンはやっぱりといった表情をしている。

「さすがは私の子。最強のサクユバスの血も受け継いでることはあるわね」

そう大胆不敵といった笑みを浮かべている。

「私達サキユバスはそう生きるものよ。自分の欲望に忠実にね」
妖艶な笑みを浮べる。

「お母様」

「ネヴィーナ。貴方は貴方に忠実に生きなさい」

そう言つてネヴィーナを抱き寄せる母。

その時、

「奥様！」

ドウガンが叫ぶ。

激しい轟音と共に、外から内へ弾ける窓。

浪々と立ち込めた煙の向こうに人影が写る。

「ネヴィーナ嬢、ここにおられたか」

黒き翼を持った白銀の甲冑の男が空中に佇んでいる。

瓦礫の先に、ドウガンが障壁を張っている。

その後ろに敵を見つめる視線が四つ。

「ここがリリス・コワンクトウの城と知つての狼藉か？」

ネヴィーナの母、リリスがそう告げる。

静かな口調の中に激しい魔力の波動を感じる。

「ええ、知っています。モードレット様の召集に応じない魔族の一貴族でしょう？」

そう言って微笑を浮べる男。

「貴様何者だ」

ドウガンが声を掛ける。

「これは申し遅れました。新生魔王軍四魔候が一角、ブランケット・ジョルジュと申します」
そう言って恭しく礼をする。

「墮天使ジョルジュ……」

この世界に天使はいない。翼人種なる種族はいるが。しかし人間にとって天使とは偶像ではあるが存在する。そして、先の戦いで、多くの敵を滅ぼしたこの黒翼を持つ彼を、人間は墮天使と呼んだ。

「名前をご存知とは光栄です。しかし、貴方方には与えるモノは死シ。しか御座いませぬ。美を与えることを申し訳なく思います。しかしながら、美しき死シを差し上げましょう」
そう言ってジョルジュは黒き翼を羽ばたかせた。

「ただいま兄さん」

一人の若者が、部屋に入りながら言う。

「リーフか。何処に行っていた？」

振り向きざまに言葉を返す一人の男。

「ちよつとね……でも、いいものが手に入ったよ」

リーフはそう言いながら、机の上に男の首から上だけになった残骸を、静かに置く。

「ほう……これはまた新鮮な……」

「だろ？それに、人間界じゃそこそ有名な奴らしいよ」

「私の研究も完成が近い。これで、モードレッドやトゥオンの鼻を明かしてやる事ができ

る」

男はそう言い、静かに笑う。

「十三使徒を外される事は愚か、あのモードレッドにさえ馬鹿にされる始末……この屈辱を晴らすさぬわけにはいくまい」

「カリオン兄さん……本当にうまくいくだろうか？僕には不安で仕方がないよ」
自らの世界に入り込むカリオンの傍らで、リーフが静かに呟く。

「リーフ？何が不安なのだ？」

「カリオン兄さんが十三使徒を外されたのは、やっぱり力不足だからじゃないかな……もし研究が完成しても、モードレッドやネヴィーナに勝てるのだろうか？」

「ふむ……」

リーフの言葉について、考え込むカリオン。

「確かに、私の力は弱い。知でも、ヘンギストやポールのかなわぬところがあるだろう。だがな、この研究が完成し、究極の生物を作り上げる事ができれば……それはまた話が変わってくるのだ」

「究極の生命体……」

「そうだ。原理はヘンギストとポールの研究を使わせてもらったが……奴らは詰めが甘い。究極の生命体は究極の軍隊へと変わる」

カリオンは、近くにある椅子に腰を降ろしながら言った。

「でも兄さん……」

「わかっている。過信は禁物だと言いたいのだろうか？大丈夫、私はそこまで馬鹿な男ではない。とにかく、この研究を完成させることが先決だな」

「そう言い終え、立ち上がり窓の外を見るカリオン。」

「まずは第一段階として、その男を蘇らせる。そして、第二段階に移行だ。この二つの研究が完成すれば、私は神に最も近い存在となる」

「第二段階の実験が成功すれば……ね」

カリオンの言葉に、リーフが静かに呟いた。

―第一ミルチア城前

ゼトの集めたミルチア兵と、残ったエーデルリッターの働きにより、ミルチアはかつての平静を取り戻しつつあった。

「ロット殿！」

ロットの姿を見つけたゼトが、声をかける。

「ゼト殿！状況は……？」

「装甲機は大方片付いた。そっちはどうだ？」

「それが……」

ロットは言葉に詰まりながら、コーデリアの方を見る。

「コーデリア……？」

ゼトが静かに、その名を呟く。彼女は、ただ黙ったまま空を見上げていた。その黄金の瞳は、どこか虚ろで、悲しみに溢れたように見える。

「コーデリアに何かあったのか？」

「ええ……少し……」

話していいものかといった表情で、ロットは再び言葉に詰まる。それを察したゼトは、コーデリアから視線を外した。

だが、そのコーデリアは見上げていた空から視線を外す。

「何……この嫌な感じは……」

誰に言うでもなく、コーデリアが呟く。コーデリアを包む、周りの空気が重くなる。その事に、ロットとゼトも気づいた。黙ったまま、静かに剣を抜くコーデリア。やがて、その重苦しい雰囲気をもし出す原因が、姿を現す。

「何者だ？」

剣を構えながら、その者に言葉をかけるコーデリア。やがて、原因ははっきりと姿を現す。

「魔族か……!」

「貴様がヘカテを倒した小娘か……」

その男は、ゆっくりとコーデリアへ近づいていく。

「魔族め!失せろ!」

叫び、その男に斬りかかるコーデリア。しかし、その太刀はコーデリアの体ごと、男をすり

抜けてしまう。

「な……!?!?」

「フン……同じ魔族に対して、その言葉はないだろう」

その言葉に、表情を硬くするコーデリア。

「これは幻影だ。いくら斬りかかっても無駄な労力を費やすだけだからやめておけ」

「貴様……一体……!」

「十三使徒モードレッド。私はこんな辺境な土地にくるほど暇ではないのでね。幻影で失礼したまでだ」

「十三使徒……十三使徒が何の用だ!」

「お前に用があつて来たのだよ。女騎士よ……いや、ヴァンパイアだったな。その力、私のために役立ててもらおう」

「誰が……貴様の為などに!」

「私は役立ててもらおうと言ったのだ。スカウトしにきたわけではない。いつ誰が貴様の意思を尊重するなどと言った? 勘違いもほどほどにするのだな」

「黙れ!」

再び地を蹴るコーデリア。その姿を見て、モードレッドは静かに右腕をコーデリアに向かって上げる。

「はっ!」

モードレッドが唸る。すると、彼の手から幾数もの光の閃光が放たれた。その閃光は、あっという間にコーデリアの体を包み込んでしまう。

「くっ……なんだこれは……!!?」

必死にもがくコーデリア。だが、やがて光に体全体が包まれてしまう。

「……!!」

かすかな声で詠唱を始めるモードレッド。すると、今度は光の刃が姿を現す。その刃を、コーデリアを包む光に向かい放つモードレッド。刃は、コーデリアを包む光に突き刺さる。

「コーデリアさん！」

剣を抜き、モードレッドに駆けるロット。

「邪魔だ、虫けらが！」

モードレッドが左腕を振るう。振るわれた腕から衝撃波が発生し、モードレッドに向かうロットを軽く弾き飛ばしてしまう。

「コーデリアとか言ったか。魔界で待っているぞ」

そう言うのと、モードレッドは姿を消した。同時に、コーデリアを包み込む光も消える。

そのまま、地面へと倒れこむコーデリア。

「く……コーデリアさん」

身を起こしながら、ロットが呟く。名を呼ばれたコーデリアは、ゆっくりと立ち上がりロットの方へと目を向ける。

「私は……私は……四魔候コーデリア。違う！私はブラックナイト隊長、コーデリアレキだ！でも、私はモードレッド様に忠誠を誓う四魔候。でも私は……」

その言葉を続けるコーデリア。そのまま、頭を抱え、しやがみ込んでしまうコーデリア。「うう……ろ、ロット殿！ミルチアを……頼む！」

そう叫ぶと、コーデリアは地面を蹴る。そのまま、樹海の方へと姿を消してしまった。

ーサンダルーク城

エフラムがサンダルークと交わした約束の期日がやってきた。

「しかし、よろしいのですかな？」

謁見も間へと向かうスイートピーの横を歩きながら、リジヨがそう尋ねる。

「はい……。ユング様はどうしてもサンダルークを離れるのが嫌だと仰いました」

「そうですか。それで、ユング様は今どちらに？」

「城内にいるのはとても危険な状態でしたので、モリスン殿にお願いして、今は城下町のどこかに身を画しておられるかと思えます」

「一先ず安心と言ったところですか。それで、魔族達への対策の方はどうなってますか？」

「ミルチアは今回、こちらから出す条件を飲まないわけにはいかないはず。条件を飲み、

我々サンダルクを目下に加えるか、尻尾を巻いて逃げるか……もし、条件を飲まずに我々と事を構えるような事があれば、それは、共に滅ぶという事を意味しています」

「ふむ、あのエフラムという軍師は、そこまで無能な輩には見えません。おそらく、条件を飲むはずでしょう」

そんなやりとりをする二人の前に、謁見の間の扉が姿を現す。兵士が扉を開け、中へと導かれる二人。そこには、すでにエフラムの姿があった。

「お待たせしましたエフラム殿」

エフラムに目をやりながら、スイートピーは謁見の間の中央へと向かう。

「ユング王の姿が見られないが？」

「……」

「まあいいさ。で、返事の方はしてただけなのかな？」

「条件を飲んでいただければ、こちらは全面降伏をいたします」

「条件？俺は無条件降伏を勧告したんだが？」

「条件を飲んでいただけなければ、こちらとしては降伏することができません」

「フン、飲む気はないが、一応聞いてやろうか」

エフラムはそう言って、スイートピーの言葉を待つ。

「魔族の大軍がこちらに向かっています。今何処にいるか……どれくらいの規模の魔族がこちらに向かっているか。我々は魔法を通じて遂次、その情報を得る事ができます。もし、今我々

とあなた方ミルチア兵が事を構えるとなると……両軍とも共倒れすることになるでしょう」

「フム……だが、そんな信憑性に欠ける話を聞かされても困るのだがな」

「ですが事実です。信じられないなら、あなた方の持つ装甲蟲を偵察に向かわせるといいでしょう」

「それで時間を稼ぐつもりか？その手には乗らんよ」

「時間を稼いでどうしますか？我々には、時間を稼いでもどうすることもできないのです

よ？」

スイートピーが賢明に説得を続けるが、エフラムは全く聞き入ろうとしない。

「少しいですか？」

その光景を見かねてか、リジヨが二人の間に割って入る。

「エフラム殿、この際条件などはどうでもよい。サンダルクは全面降伏するでしょう。だが、それは君にとって、サンダルクをミルチア領土とし、魔族からこの国を守る権利と言うものが発生する事を肝に免じておるか？」

「それくらいわかっている」

「ならば、サンダルクを加え、魔族を撃ち破ってくれ。我々サンダルクが生き残る道は、それ以外にはない……」

リジヨの言葉に考え込むエフラム。

「いいだろう。俺も虐殺が好きなのではないからな。魔族と戦えるなら、それぞれで結構……」

…今より、サンダルクをミルチア領土として迎え入れる」
エフラムはそう言い、ゆっくり王座へと腰を下ろした。

——カーマの屋敷。

ネッコ（のクマネコ王子）によって半壊させられた屋敷を下級魔族やモンスターに修繕させながら、カーマは自室の椅子にふんぞり返っていた。その表情は苛立ち、神経質に強張っており、カーマの手下たちも腫れ物に触るような態度で彼女と接している。

「ええーい、ネッコ・ヴァンシユタインはまだ見つからないのですか!？」

大声を張り上げるカーマ。金属を引っかくような甲高い声に、彼女お付の二人の部下は思わず身を硬くさせる。

「そ、それが、大森林のどこを探しても……」

青白い顔をした、細身の部下が言った。

「だったら大森林の外に出たのでしょうか!」

「そんな、人間がそう易々と抜けられる場所では無いはずなのですが……おまけに森林の外は他の使徒の管轄で、勝手な搜索活動はご法度ですし、我々の権限では……」

チビの部下が言った。

カメラはゆっくりと立ち上がると、妙な落ち着きを払って、二人の部下の方へと近づいた。皺だらけの目じりに、蛇のようにおぞましい眼光。激昂とは違う、腹の底を這い上がってくるような威圧感に、チビと細身の部下はすくみ上がった。

「いいですか、管轄など関係ございません。私は、ネッコ・ヴァンシユタインを捕まえて来なさいと言っているのです。いえ、正確にはあの人形！」

カメラがくるっと背を向ける。

「私は欲しい！悪神の気まぐれから生まれたような、あの馬鹿馬鹿しい、理不尽で、狂氣的で、トンデモナイ力を内包するあのヌイグルミが、私はどうしても欲しい！俄かには信じられなかった、たかが一匹の人間が十三使徒を軽々と凌駕したという例の噂……何のことがある！あれなら一匹や二匹の十三使徒など問題に足らず。否、かの魔王にも匹敵しうる存在かもしれない！私はあれが、なんとしても欲しい！あれを手に入れ、その力の神秘を解明し、『超魔族プリンセス・オブ・ダークネス』として、この私、カメラ・カメレオンが魔王に代わって世界の頂点に君臨するのです！誰にも絵空事とは言わせませんよ！」

「あ、ぬいぐるみでしたら見つかりましたよ」

細身の部下の言葉に、恐ろしい速度で振り返るカメラ。

「昨日の昼、西の空からこちらに飛んできたのです。最初はゴミかなーと思ったんですが、あの人間が使っていた人形だったので、忌まわしや、明日の荒ゴミにでも出そうと思っ……うぐ

えっ」

カーマは細身の部下の喉をがっしりと掴んだ。とんでもない握力に部下の血は脳天にうつ血し、目玉がはじき飛びそうになって、意識は一瞬にして明後日の方向へ飛んでいってしまった。「物の価値を知らないアホばかりがこの世には蔓延って……それを早くおっしやいなよお！」
ぎりぎり歯軋りを立て、部下の喉を掴む腕に力を込めるカーマ。隣で脅えるチビの部下が、恐怖に足をがくがくと痙攣させ、その場に尻餅をつきそうになる。

「あなた！」

チビに怒鳴るカーマ。

「は、はいいい！」

「腰抜かしないで私を案内なさい！今すぐ、そのぬいぐるみの元へ！」

カーマの一喝に気おされ、チビの部下は一度後ろへでんぐり返しを打ち、足元を滑らしながら立ち上がると、顔中から汗を噴出しつつ回らぬ舌で「こちらです、こちらです！」と何度も言った。――その頃には、首を締められていた細身の部下は、とつくに絶命していた。

ネッコによって破壊された大広間にカーマがやってくると、修繕作業をしていた部下達の間には緊張が走る。カーマは壁際に無造作に転がっているクマネコ王子の前までやってくると、それをじっと見下ろした。

「確かに、ネッコ・ヴァンシユタインのヌイグルミ……しかし、なにかがおかしい。以前の

スーパーパワーが感じられませぬ。この間みたときは発動以前にもマグマの滾りのようなものを内に感じたのですが……」

ヌイグルミの耳を掴んで、ぐいっと持ち上げるカーマ。ビーズで拵えた黒目をまじまじと覗き込む。

「しかし魂は宿っている……人間の魂が、一つ、二つ、三つ……」

カーマはぬいぐるみを裏返したり引っ張ったりして、隅々まで点検した。

「なるほど、この魂の混在した場所へ術者の魔力をぶつけて、火打石のようにエネルギーをおこし、魂と魔力の爆発が凄まじいエネルギーを産むというわけですね……原理はおそらくそう言ったものでしょう。モディファイド・ベアを発展させた、変種のレベル5魔法……と、言うよりはもっと突然変異的な……」

カーマは薄く閉じた目を宙へやった。

「しかし、テクノロジーが分かったとて、現代魔法学ではこれを人工で作り出すのは恐らく不可能に違いない。おまけに、魔族がこれを扱うのもまず不可能！人間でも扱える者は極一部に限られ、このヌイグルミに宿った魂に、ある種の共鳴反応（シンクロナイズ）を返すことができる者のみ……」

不気味に思う周りの部下達の気など知れず、カーマはひたすら独り言を続ける。

「ほほほほ！しかし、これほどのスーパーパワーを、そう易々と諦めるのは愚劣というもの。なアに簡単さ！これを扱える人間を、私の奴隷として仕えさせれば良いだけのことではありま

せんか！ネツコ・ヴァンシユタイン！いや、探せばきつとネツコ・ヴァンシユタイン以外にもこれを扱える者が必ずいるはず！待ちましよう！このヌイグルミを追い求めて来る者を、このヌイグルミとシンクロナイズできる者を！」

カーマはヌイグルミを遠くの空へ向けて掲げた。

「ああ、まだ見ぬ私の愛しき奴隷！愛しき従僕、愛しき従女！あなたの大切な宝物に巢を張って、まだら模様の毒蜘蛛タランテラ、わたくしカーマはしっかとお待ちしております！」

——サンダルークの最北端であり魔界との境界線、ノース・ポイント。

そこは魔界と人間界の両者が永年に渡って冷ややかな睨み合いを続けてきた、お互いにとつての最終防衛線である。三百年ものあいだ大きな戦闘らしい戦闘が無かったこの地域では、広大な草原に花々が咲き乱れ、一見とても平和な印象を受ける。目に見える敷居も無いし、領域もとても曖昧なのだが、しかし、だからこそ誰もが神経質に近寄らない場所だった。

ノース・ポイントでは前大戦時代に、魔物の進攻を防ぐための要塞の建設が予定されていたが、勇者アトロたちの手によって魔王モートが倒されると、魔王軍の沈静化にもなって要塞の必要性は無くなった。そればかりか、要塞の存在はせっかく静かな魔王軍を悪戯に刺激し、

反感を買うと危惧されたため、国の命令によって建設工事は完全にストップさせられた。サンダルクは幾百年のあいだ、魔物との組織だった大きな戦闘を避けることに成功したが、昨今の新魔王誕生の影響を受け、魔王軍の人間に対する明確な戦闘の意思を察知すると、スイートピーの命によって再び（実に三百年ぶりに）要塞建設の再開が始まったのだった。

だが、魔王軍の行動はそれよりも一足早かった。

牧歌的な大地に広がる黒いうねり、地平を染める黒い渦、それは死の戦慄に人々を包み込む、恐怖と暴力の黒い荒波。——魔界からやってきた、今は亡きヴァジュラを崇拜する魔族たち、あるいは、ただただ人間たちとの闘争を望む魔物たちの群れが（実際はこちらが大半数に及ぶ）、遂に人間界……サンダルクへの侵攻を開始したのだった。

五千名からなるノーススターナイツ・サンダルク方面部隊は、ペルセンやパッセに比べて平和な地方だっただけに実戦経験が少なく、未だかつて無い魔物の軍勢の侵攻を耳にすると、そのうちの誰一人として恐怖せぬものはいなかった。疑う余地の無い自分たちの運命に絶望し、ただただぼんやりと悪夢を見るように、ノース・ポイントの穏やかな風景を眺めている。——木偶のように、剣だけはしっかりと握りしめて。

「怖気づくな！状況を報告せよ！」

ミーシャ將軍は己の恐怖心を振り払うかのように、毅然とした大声で訊ねた。

ペルセン方面部隊より帰還し、故郷のサンダルクに帰ってきたミーシャ將軍は、その失態

によってノーススターナイツをクビにされた。しかし、今回の急な魔王軍の侵攻によって、ノーススターナイツ・サンダルク方面部隊に強力な司令官の存在が急募されると、たまたまこのノース・ポイント近くの砦に一般兵として勤務していた彼女に白羽の矢が立った。たとえ地方は違えども、長年戦ってきたノーススターナイツに対する思い入れは強かったのだろう、彼女はその申し出に対し、迷うことなく二つ返事で承諾した。その制服に身を通したときの充実感が、何よりの証拠であった。

「敵軍はノース・ポイント平原地帯数キロに渡って広がり、いぜん進攻中！魔法部隊による迎撃可能地点まで、およそ距離ニキロ！」

遠見の魔法を使う物見がミーシャに報告する。

「援軍の到着はまだか？」

「シーグムンド將軍率いるサンダルク軍第一歩兵師団が、現在こちらへ進行中とのこと！到着まで数時間を要します！」

「……いいか！」

ミーシャは叫んだ。

「敵は所詮、統率のとれていないモンスターが集まりだ！向こうがいくら大群で攻めて来ようと、首尾よくやれば我々にだって時間稼ぎぐらいは出来る！サンダルクの大地に奴らの足跡一つ許すな！」

気休めに過ぎないミーシャの煽動だが、兵たちは彼女の情熱に呼応し、無理矢理己らの士気

を高めんと叫び声をあげる。

(すまない、みんな。私たちノースター・ナイツはサンダルク……人類の壁なのだ。私たちがここで朽ち果てようとも、あとはシーグムンド将軍がきつと……)

「ミーシャ将軍、来ました！目視可能距離です！敵勢力、およそ十万強と思われまます！」
震え上がる兵士達。

「じゅ、十万強……」

「俺たちの二十倍以上だ……」

「見ろ、まるでデカイムカデみたいだ！」

「いや、山だ！山が動いてるんだ！」

「これが人間と世界を二つに分かつ、魔物たちの軍勢か……」

「勝ち目なんてありっこない！」

我が身に襲いかからんとする絶望を、口々に嘆きあう兵士。そして恨めしそうな顔つきで敵の軍勢を睨みつけるミーシャ。

「私たちが足止めしたところで……シーグムンド将軍がやってきたところで……彼らのたった一個師団がこの数の魔物に勝てるのか……?」

ミーシャは苦虫を噛み潰すような表情で、誰にも聞こえないような小声でそう呟いた。自分は司令官なんだ、不安は見せられない。そう思いつつも、彼女の脳裏に過ぎるのは、幼少の頃からずっと彼女を守ってきてくれたオートニーの背中。その幻影を振り払うようにミーシャは

己に毒づいた。

（馬鹿め、ミーシャ！甘えを捨てるんだ。ここは戦場だぞ！オートニーは……もういないんだ。私はずもう、自分一人だけでやらなきゃならない！）

ぐらぐらと揺らぎかけた覚悟を固め、挑戦的な視線を地平線上に叩きつけるミーシャ。しかしそのとき、はるか上空から、奇妙で、滑稽な「ひゆるるる」という音がする。せつかくの覚悟も瓦解し、背筋にぞくぞくと戦慄が走る。

ミーシャははっと息を飲むと、反射的に「伏せろ！」と叫んで頭を伏せた。数々の戦闘でノイローゼになるほど聞かされた、魔法による迫撃砲の落下音。落下音の緊張が最大にまで高まったその瞬間、巨大な爆発が前衛部隊のド真ん中で起こった。高さ数mにも及ぶ火柱と砂塵を巻き上げ、数人の兵隊たちが木っ端微塵に弾けとぶ。飛び散る肉片、木霊する絶叫。ただでさえ脅えきっていたところへ見事に先制攻撃を撃たれ、ノースターナイツの面々は完全に面食らい、動揺し、統率を緩めてしまう。

ミーシャは身を伏せながら命令を下す。

「慌てるな、敵の迫撃砲火だ！被害状況を報せ！支援班は早急にプロテクトを展開！こちらから前進して魔法部隊の射程圏まで接近し……はっ！」

ひゆるるる、という落下音。大声で指揮を取るミーシャの直ぐ近くで爆発が起こる。ミーシャ本人への直接被害はなんとか免れたが、それもまさに間一髪のことだった。

爆風に吹き飛ばされ、地面を転がり、こなごなに砕け散った部下達を見て青ざめるミーシャ。

「く……！」

彼女は苦しそうに顔をゆがめると、胸のペンダントをぎゅっと握りしめた。——それはベルセン方面で別れたきりの、オートニー將軍の忘れ形見であった。

「……ぜったいに撤退は許されない。そうだ、私たちがここで少しでも足止めしなければ……サンダルークは……人間界は……！」

ミーシャは痛む体を庇いつつ、近くの兵たちに支えられながら、なんとか立ち上がる。しかしその時、また例の、ひゆるるる、という落下音とともに敵の砲弾が飛んでくると、寸前のところで展開されたプロテクト・シールドに接触し、ナイツの上空で大爆発を起こした。真っ黒なくすみと爆煙がドーム状に広がる。もしプロテクトが無ければ、完全にミーシャへの直撃を免れぬ軌道だったろう。

不安そうにミーシャの顔を伺う兵士達。

「……か、構うものか……前進だ……構うな！みんな、前進しろ！ここには狙い撃ちにされるだけだ！足を止めるな！砲弾に気をつけ！飛び道具に気をつけ！隊列を組んで様子を見張れ！二本の足がついている限り、ひたすら相手に向かって前に進め！二本の足を失った者は、負ぶって貰って前に進め！心臓が鼓動をやめていたって、前進をやめるんじゃない！無責任に死ぬ奴は兵隊失格だ！いいな！」

ミーシャの半ば自棄に近い掛け声に従う他ない兵士達は、野獣のような咆哮を上げ、敵の軍勢目掛けて驍進する。その猛々しさの反面、胸中では、己の足で火の川に飛び込んでいくよう

な、残酷な未来を予期せんとしてしまふ。

やがて魔法部隊の射程圏に到達するナイツ。

「よし、歩兵部隊はそのまま前進続け！魔法部隊は彼らを援護するんだ！」

ミーシャの命に従い、歩兵部隊は敵軍に向かって前進し、魔法部隊はその場に立ち止まる。

魔法都市サンダルクにおける魔法部隊の優秀さは、ノースターナイツとて例外でなかった。恐らくその実力は、レオデグランズやパッセなどの正規魔法軍にも劣らぬであろう。これを利用しない手は無い。

「全員、構え！標的は前方の敵軍大部隊！どいつでもいい、気に入らない奴を狙え！」

魔法兵がすでに詠唱を済ましていた攻撃魔法を、敵部隊に向けて構える。無数の杖や魔法書、指先が眩く光り、場違いにきらめく昼の蛍の群れとでも言おうか、どこか儂く危うげな光景が陽炎に揺れた。

「撃ち方、はじめええ！」

ミーシャの掛け声と共に、小さな火炎の砲火が雨のように敵軍へと降り注ぐ。その悉くが命中していくものの、それは敵の数の異常さ、いわばマトの巨大さ故であり、しよせんは焼け石に水に過ぎなかった。小さなダメージはあったとしても、ミーシャが予想していた程の効果は上げられない。

白兵戦においては、完全に敵の方に分があった。ノースターナイツ・サンダルク方面の兵士達はいずれもよく訓練された勇士たちであったが、敵の単純な身体能力の優越さと異常と

もいえる数とに圧倒されて、彼らは次々となぶり殺しにされていった。

「弓手は二時の方向からやってくるガーゴイル隊を狙い撃ちにしろ！十時のトロローク隊は力比べでは不利だ、魔法で倒すんだ！魔法部隊、弾幕が薄い！しっかりしろ！手の空いている者はプロテクトの補強を急ぐんだ！あの武道着タイプの魔族が敵部隊の隊長だ！ここから見えるだけでも十はいるが……なんとか奴らの元まで突破口を開け！一つ一つ着実に敵のブレインを叩いていくんだ！でなければシーグムンド將軍が来たところで、彼らの勝機は万に一つも無い！私たちはあくまで後続のためにーさあ、耐えろ、耐えるんだ！耐えぬいて……頑張るんだ！怖気づくな！しかし、無駄な犠牲は控えよ！」

その場当たりの指揮に躍起になるミーシャ。己の兵ばかりが減っていき、依然健在な敵勢力に絶望する。彼女は額から流れてくる汗を拭った。汗と思つたそれは血だった。砲撃のときに転んだ所為だろうか。しかしミーシャはいまさらそんなことに気に止める様子も無く、もう一度服の袖で額を拭う。

「援軍の到着まであとのぐらいただ！？」

ミーシャは近くにいた物見に訪ねた。

「およそ二時間です！」

「二時間……この調子じゃあ、三回は全滅している……！」

ミーシャにハンカチを手渡す兵隊。彼女はそれを受け取り、額にあてた。白いハンカチはあつという間に真っ赤に染まった。

「ミーシャ將軍、ここは後退するしかありません！」

「あの軍勢を市街に誘き寄せると言うのか？……それは駄目だ！それでは……サンダルークの市民にも、死んでいった仲間たちにも、面目が立たない！」

「ではどうするんですか！？」

ミーシャは兵士の胸倉を掴んで、こう怒鳴った。

「もたせるんだ！」

死に物狂いの特攻が功を奏し、司令官と思わしき武道着の魔族の一人の元へ、やつとのこと
で到達することが出来た十数人の兵士達。彼らは敵司令官を容赦なく囲み、劍を構える。敵は
圧倒的不利な状況で、しかし、それでも不敵な笑みを絶やさない。

気合と共に襲い掛かる兵士の白刃を、武道着の魔族（元ヴァジュラ配下の高官）はあっさり
と見切り、電光石火の掌底を相手の顎に食らわせた。その凄まじい圧力に、兵士の顎が碎ける
より先に頭が吹き飛んだ。次に、一度に三人の太刀が魔族目掛けて振り下ろされる。今度ほと
らえた！三人の誰もがそう思った瞬間、魔族の身体は陽炎のようにたち消えて、三本の太刀は
空を切った。彼らが太刀を振るったのは魔族の残した残像に過ぎず、それに気づいた時には敵
は彼らの頭上を飛んでおり、まず一人目の脳天を華麗な足刀でかち割られた。噴出す血飛沫と
脳漿。二人目には目つきが襲い掛った。眼窩を抉られるようなことは無かったが、二本の指は
頭蓋をそのまま貫いていた。すぐさま、後ろからもう一太刀を浴びせようとした三人目を、回

し蹴りが迎え撃つ。かかどが首の骨に命中し、三人の兵士たちはみんな自分たちが死んだことも知らずに死んだ。

魔族を囲んでいた残りの兵士たちはその有様を見て、すっかり脅えきっていた。挑むか逃げるか迷うヒマも無く、敵の追撃にまず一人の兵士が叩き殺される。続いて二人目、三人目……力量の差は、あまりにも圧倒的であった。

「愚かな人間ども！ 蛆虫どもよ！ 貴様ら一匹残らず叩き殺し、いまこそ我らがヴァジュラの無念を晴らしてやる！」

魔族の叫び声と同時に、四人目の額に手刀がめり込む。頭蓋骨のあるべき場所までべっこりと兜がへこんだ。続いて裏拳で後ろの兵士の脇腹を打つ。兵士は血反吐を吐いて地面を転がりまわり、まるで林檎のように頭部を踏み砕かれ、絶命した。

「ば、ばけものめえええ！」

そのとき、一人の兵士が叫び声をあげ、剣も構えず圧倒的な敵に向かって駆け出す。一見、自暴自棄としか思えない兵士の行動に、敵は嘲笑を浴びせた。

「うわあああああ！」

「ふん、ヤケクソか。死ねいっ！」

魔族は己に襲い掛かってくる窮鼠に対し、凄まじい勢いで頭突きを浴びせかかる。しかし、それが兵士の脳天に命中するかしないかという瞬間、俄かに、眩い閃光が兵士の腹部で輝いた。真っ赤な鮮血にも似たその閃光は、まさしく魔結晶の輝きである。ぎよっとする魔族。神経が、

筋肉が反応するより先に、圧倒的な爆風があたりを包む。

——少しして煙が晴れたとき、下半身を残して立ち尽くす果敢な兵士の前で、頭部を失ったヴァジュラ高官が立っていた。やがて、どさりと、という音と共に、両者の死骸は虚しく地面に転がる。——自爆を敢行し、やっとのことで敵の小隊長を一人倒すことができたナイツ。しかしこの強敵ですら、数十はいると思われる敵小隊長の一人に過ぎないのだから、せっかくの苦勞もミーシャ達の絶望をかきたてる一要素となったに過ぎない。

そして、事態の峻烈さは更に加速していく。

突如として、前衛の兵士達を覆う黒い影。見上げた兵士達全員の表情が氷河の如く凍りついた。

それは燃えるような赤い鱗と、鋭い牙、爪、そして二枚の巨大な翼を持った、人類が真っ先に恐怖の対象として挙げんとする、まさしく最大級・最凶の魔物であった。頑強で、凄艶ですらあるその姿に、ノーススターナイツは言葉と希望を失った。

「あ、ああ、あれは……!」

一人の兵士が指をさし示す。

「……ドラゴン……!?!」

「ド、ドラゴン級です!ミーシャ將軍!敵部隊にドラゴン級モンスターが出現しました!」
兵士の報告に、ミーシャが驚愕する。

「……まさか……!」

ドラゴンの口から吐き出される、火炎の吐息。魔法のプロテクトがあっさりと溶解し、人間達はまともに炎を被った。

更紗のカーテンのように流麗な炎は

立ち向かう果敢な兵隊たちの身を焼き

抵抗も許さず、断末魔の声も許さず

ほんの瞬き一つの間

幾多の黒焦げた肉塊を作り出す

絶望に打ちひしがれ

恐怖に打ちのめされ

まるで抵抗する気力を無くした兵隊たちへ

再び浴びせられるが炎の祝福

腰を下ろして休む兵士の

仲間に寄り添って眠る兵士の

くすんだ骸が並ぶ光景に

涙を流すことも忘れて

女騎士は呟いた。――ただ一言、「地獄だ」と。

ミーシャは目の前で展開される悪夢に、ぼんやりと見入っていた。自我は完全に麻痺し、全
ての感覚がすりガラスのように曇っている。自分はこんなところで一体なにをやっているのだ
ろう？みんなどうしてこんなところで戦って、そして死んでいくのだろう。こんなことに一体
なんの意味があるのだろうか。

帰りたい、家に帰りたい。

オートニーの元へと帰りたい。

一人の兵士がミーシャの前でなにかを大声で叫ぶ。しかし、ミーシャにはなにも聞こえな
かった。なにかを言っているのは分かるし、それが自分に向けられた言葉とも分かっているが、
耳に届いた言葉が意識にまで届かない。無感覚と無感動。だから怖くはないし、辛くもない。
ただ一つの欲求は、家に帰ってゆっくり休みたい、ということだった。――そしてそれは、万
に一つも適うことの無い欲求であろう。

「……シャ將軍……ミーシャ將軍！」

ようやく兵士の声に気づいて、はっとするミーシャ。

「どうなされたのです、ミーシャ將軍！」

「……い、いや。なんでもない！どうした？」

「援軍が……やっと、援軍がきました！」

「援軍だって!？」

ミーシャの心臓が大きく高鳴る。しかし、現実を考えれば俄かには信じられない報告である。まだ援軍の到着する時間ではないのだ。

「そんなはずはない! シーグムンド將軍たちが来るにはまだ丸々二時間はある。お前は幻覚を見ているんだ」

ミーシャの言葉にかぶりを振る兵士。

「いいえ、違うのです! これは本当のことです! 援軍はシーグムンド隊ではありません。東から、ノーススターナイツ・ペルセン方面の数個連隊が……!」

「ペルセン方面?」

「そうです! オートニー將軍が来てくれたのです!」

「オート……ニー……!?!」

全身の皮膚があわ立つのを感じ、思わず涙を零すミーシャ。

「オートニーが生きていた……!」

敵軍との接触寸前まで進軍し、守備態勢をとるノーススターナイツ・ペルセン方面部隊。

オートニー將軍はその中枢で、歴戦の風格を放ちながら指揮を執っていた。

「我々はミーシャ達とは合流せん! あくまで敵の注意をひきつけて分散させるだけだ! モンス

タードものサンダルク方面部隊一点突破を許すな！しかし、無理はするな！」

オートニー將軍が命令を下す。本来の管轄であるペルセンに半分以上の兵力を残してきたオートニー軍は、魔族の軍勢とまともにぶつかりあえるほどの兵力を擁してはいなかった。

「ミーシャの奴め……サンダルク内に敵を迎え入れず、あくまで壁として戦うとは、相変わらず己の信念に愚直と言おうか、なんと言おうか……」

オートニーは白い顎鬚をさすって、自分たちの東前方に広がるノーススターナイツ・サンダルク方面部隊を眺める。その目には、若い自分の娘を見守るような暖かさが含まれている。

「ミーシャ様らしいではないですか」

オートニーと長年戦ってきた副將が、彼にそう呟いた。

「……それに、オートニー將軍。あなたがミーシャ將軍と同じ立場にあれば、あなただってそうなされたでしょう」

「……ふむ……」

「ミーシャ様はあなたに似てらっしゃる。あなたから学んだ戦法や信念、そしてノーススターナイツの誇りを、あの方は愚直に貫き通しているのですよ」

オートニーは眉を潜め、副將の言葉が凶星であることに幾ばくかの羞恥を感じた。やがて、首を横に振り、静かに目を閉じると、一度だけ大きな深呼吸をし、自分の中の決意を固める。

そして、こう呟いた。

「ミーシャ、私はお前を死なせはせん」

オートニー將軍の到着により、ミーシャの死への猶予はほんの少しだけ伸びたが、それでも彼女達の絶望的に不利な戦況は変わらなかつた。たった数個の連隊が到着しただけで、どうにかなる戦闘ではないのだ。

……しかし、勇敢な戦士達の奇妙な命運は、彼らの頭上に希望の光（そのあまりの光のどぎつさに、多少の当惑は覚えても）を浴びせかける。

果たして悪魔を裁くのは、人でもなく神でもなく、同じ悪魔なのだろうか。

——ノーススターナイトの千数百m後方、とある高台。

そこでは約数十名からなる魔法使いの精鋭部隊が、整った円陣を成していた。一心不乱に魔力を高め、各々から放たれる魔力の稲妻を連結させて、大きな魔方陣を象っている。

彼らの後方で、大魔法使いルドヴィヒは一冊の魔法書に目をやりながら、隣で状況を確認している助手に尋ねた。

「出力はどうか？」

「現在95%です。あと数秒で、二つのほうもつ宝物の発生値に到達できます」

若い女の助手は片手に乗せた水晶を覗き込みながら、そう答えた。光が反射して、眼鏡に複雑な数字や文字の羅列が映っている。

「優秀なものだな」

ルドヴィヒは魔法書をべらべらと捲りながら、魔法使いたちにそう呟いた。

「イルアン・グライベル・シールド、メギンギョルズ帯ともに発生確認！さらに出力上昇中！……凄いい、予想値の120%を軽く超えてしまいそうな勢いだわ……」

「150%まで保つか？」

ルドヴィヒの言葉に、ぎくり、とする魔法使いたち。しかし、そのうちの一人が「ルドヴィヒ様のお望みとあれば」と言つてのけると、全員の顔つきが再び緊張に引き締まった。信頼する弟子たちの快い返事に、宜しい、と呟くルドヴィヒ。偉大な師匠の満足を得、魔法使いたちは自分たちの誇りを失わずに済んだ。そしてそれこそが、大魔法使いを心奉する彼らの無上の喜びでもあった。

「出力増加中！……110……115……120%突破、まだまだ上昇します……！」

助手は水晶を覗き込み、報告を続ける。

魔法使いたちが形成していた魔方陣の稲光が、青白い光から黄色いものへと変化していく。大地が震え、彼らの居る高台の頂上が、真っ白い光に包まれる。

「超魔法術……十余年の歳月をかけ、ようやく試射にまで持ち込むことができた」
ルドヴィヒは魔法書を捲りながら呟く。

1 3 0 …… 1 3 4 …… 1 3 7 ……

「是非とも君たちの力で、古代魔法（クラシック）やレベル5を超えてみせてくれ」

1 4 0 …… 1 4 2 …… 1 4 3 ……

「君たちの力でサンダルークを救ってくれたまえ」

1 4 4 …… 1 4 5 …… 1 4 6 ……

「1 4 7 …… 1 4 ……っ！きやあ！」

突然、助手のもっていた水晶が破裂する。水晶の測定できる魔力の許容範囲値に限界が訪れたのだ。助手は後ろに転んで尻餅をつき、眼鏡を地面に落とす。

「……げ、限界ですルドヴィヒ様！理論値をとくに超えています！」

助手がそう言うが早いか、ルドヴィヒは魔法書を、ぱたん、と閉じるとそれを天空へ高く掲

げる。魔法書は彼の手を離れ、不思議な球体の光に包まれて、まるで大きなシャボン玉のように彼の頭上にぼっかりと浮かび上がった。

「よし！全員、詠唱開始！」

ルドヴィヒの命令に従い、魔法使いたちが口々に叫ぶ。

「大いなるトル雷神の雷光よ！」

「遥かなるアースガルド天界より降りて！」

「悪しき命脈焼き尽くさん！」

「ブロックとエイトリの業を借りて」

「打ち砕くものよ、いまこそ汝の在るべき姿に！」

すると、魔法書は眩い光を放ち、一本のウォーハンマーの形に変化した。凄まじい魔力の放流に、高台の大地が彼らを中心にクレーター状に沈む。突然の足場の変化にバランスを崩しかけるが、既に予測済みの現象だったためになんとか全員が堪えきった。

「照準、モンスター軍中枢！」

ルドヴィヒはウォーハンマーを握り締めると、それを空高く掲げた。

「ミヨルニルの槌よ、いまこそ我らが敵を討たんや！」

ルドヴィヒの掛け声と共に、魔方陣が真っ赤に染まり、電流がまるで猛り狂う龍のように宙

を舞う。その全てをルドヴィヒの持つハンマーが吸い込み、一瞬息も詰まるような沈黙が訪れると、膨大な魔力の柱が遡る滝のように、凄まじい勢いで天へと放出されていった。

白い雲を裂き、彼らの頭上に眩い太陽の光が差し込む。

あまりの魔力の奔流に、顔をゆがめるルドヴィヒ。彼が杖を握る腕から、焦げ臭い肉の焼ける臭いがたち込める。魔力のオーバーヒートが彼の身を焼いているのだ。

「いけない、ルドヴィヒ様を保護するシールドがもたないわ！みんな、メギンギョルズ帯の出力を半分にカットして！」

助手の言葉に、魔法使い達の全員が一斉にルドヴィヒに掌を向ける。

「ならん！」

ルドヴィヒが反対する。

「ですが、このままではルドヴィヒ様のお体が……！」

「お前達は第二射の準備だ！この魔法は……私が意地でも……！」

天空に掲げたウォーハンマーからほとぼしる波動の勢いは止まる所を知らず、ルドヴィヒの老体がこれほどの圧力に耐えていられるのは、彼の大魔法使いとしての魔力があつてのことだろう。固唾を飲んで見守る弟子達。ルドヴィヒの焼け爛れた右手から赤い鮮血が滴り落ちる。

しかし、ここでウォーハンマーを手放す行為は、魔法の失敗はもちろん、その暴発すらも起こしかねない。ミョルニルの槌が暴発すれば、ルドヴィヒはおろかその場にいる全員の命が一瞬にして蒸発してしまうだろう。全員の間に、ただならぬ緊張感が走る。

突如、がくん、とルドヴィヒの膝が折れる。

「もう限界だ！」誰もがそう思い、己の死を覚悟したであろうその瞬間、遂に杖から全ての光が出尽くし、魔力の波動は天空を超え、宇宙の星となるまで駆け上がっていった。ルドヴィヒはハンマーを手から落とし、右手を庇うようにうずくまると、すぐさま挑みかかるような視線で天空を睨みつけた。不自然に丸く晴れた空の向こうに、光は消えていった。

——魔物軍の中枢。

「なんだ、たったこれっぽっちの人間どもに、どうして我々が足止めを食らわねばならんだ！たかだか五千や六千の毛ジラミ如きに……こっちは十万だぞ！？小賢しい！」

魔族の大軍勢の中心にいる総司令官が、口惜しそうに罵り声を上げる。ヴァジュラ存命のとき副官として仕えていた魔族であり、また、使い魔のリリパットをモードレッドに差し出した張本人である。

「潰せ潰せ！兵の海で潰せ！戦争は数だ！数さえいれば負けることは無い！魔界の荒れ狂っているいまこそ、我々が最初に人間界を征服し、第二の魔界帝国として名乗りをあげるチャンスなのだ！モードレッドがなんだ！トウオンがなんだ！潰せ！もつと潰せ！ヴァジュラの名の元に潰しまくれ！血と肉と骨が大地に染みこんでしまうまで、愚かな人間どもを踏みにじって……

……んんん？」

そのとき、彼らのはるか上空、薄い雲の向こうから、眩い光が注がれる。

雲を掻き分け、太陽よりも眩しい光が覗いて、それはあつというまに肥大化していった。

「……なんだ？あれ、ピカって……」

——刹那。

耳を劈く轟音と共に、白い光が魔物を包む。

直径一メートルほどの柱状の光線が大地を貫き、そのエネルギーが地中で爆発する。

とてつもなく馬鹿デカイ穹窿（ドーム）状の閃光が半径数百メートルに渡って広がっていく。魔物という魔物は、魔族という魔族は、みな一緒にたになって飲み込まれ、塵埃のように舞い上がって、燃え上がり、跡形も残さず消え去った。その余波の有する恐ろしい破壊力は、直接閃光に巻き込まれなかった周囲の魔物たちも、直撃同様に肉体を崩壊させ、ゴミ屑のように蹴散らしていく。

……閃光は消えた。鼻腔を刺激し頭痛を誘うただならぬ異臭があたりに広がる。巻き上がった砂塵と爆煙が、巨大なお化けキノコのように不気味に盛り上がり、やがて黒い雨になって降ってくる。大地は赤く焼け付き、ひび割れ、あの平和なノース・ポイントはもう昔の様相を呈していない。

そこに戦いは無かった。

あるのはただの死と消滅。

魔族や人間たちの全員が、怒りや憎しみといった感情を忘れ……

——ただただ目の前の破壊を見やる。

「な、なんだ……いまのは？」

敵の中枢に落ちてきた稲妻と閃光に、ミーシャは我を忘れてそう眩いた。稲妻の落ちた大地は真っ赤に染まり、まるで巨人の墓のように深く広大なクレーターを作っていた。

「何が起こった!? 報告しろ!」

ミーシャは物見に怒鳴った。

「わ、分かりません! 分かりませんが……落雷と思わしき光が、遙か数キロ向こうにある敵軍の中枢に直撃して……い、一瞬にして敵勢力の三分の一を消滅させました!」

「さ……」

ミーシャが思わず訊き返す。

「さんぶんのいち、だってえ!？」

「は、はい! 敵は実に……およそ三万以上もの兵を……あの一瞬の光の中で喪失したのです! 更に負傷者は五万超、敵の総司令官と思わしき者は消滅! 敵の内部は完全に混乱し……あっちの指揮系統はもうメチャクチャです!」

物見は言っておきながら、自分の報告を信じきれない様子だった。引きつった笑みが顔面に張り付いている。

「ば、馬鹿げてますよ、こんなのに！」

本当なら喜ぶべき事態なのだろう。しかし、ミーシャは目の前の地獄の光景に、喜ぶ気になど少しもなれず、地球の形までも変えたであろう巨大な稲光に対して、空寒いなにかを覚えた。それは人が持つには余りに大きすぎる力のように思えた。

これが戦いと呼べるだろうか？これだけの力をもって、人類は一体どこへ行こうと言うのだろうか？そしてそんな我々を待ち構えるのは、神々による裁きか、はたまた神をも超えた責任か。

——ノースポイント南の高台。

魔法使いたちの予想以上の消耗により、もう一度出力を蓄えるほどの魔力が残っていないのと、ルドヴィヒの利き腕の負傷によって、第二射の準備は取りやめになった。

自分たちの空けた巨大なクレーターを、高台からじっと見下ろす魔法使いたち。まるでえぐられた大地から鮮血が噴出したように、クレーターからその周囲に至るまで、魔法の影響で真っ赤に染まっている。彼らの胸中に渦巻くのは、勝利感と、達成感と、そしてその裏側に潜む冷やかな何か……

「敵軍へのダメージ、地質学的損傷、ともに予想値を完全に上回っております……味方軍への

直接被害はほぼありません。試射は大成功……ですね」

ルドヴィヒの助手はひびの入った眼鏡を通して、予備の水晶で計測した結果値を確認し、報告する。

「魔法汚染の影響は？」

「外部被曝の影響大なり。爆心地を中心に半径一キロメートルに渡ってストロベリー・フィールズが広がっております。——百年間はペンペン草一本生えてこないでしょう」

魔法放射線は魔結晶が爆発した折に発生する、概して有機物に対して多大な悪影響を及ぼす。エーテル体の一種で、ストロベリー・フィールズ（苺畑）とはその魔法放射線の影響によつて真っ赤に染まった、死せる大地の通称である。

ルドヴィヒの助手が言ったとおり、ストロベリー・フィールズには生命が宿らず、その影響は規模によつて数年から数百年と続く。——今回、ルドヴィヒ達が放った超魔法術、ミヨルニルの槌は、魔結晶を核燃料として発動させる魔法なので、爆発と同時に莫大な放射線が周囲へ照射されてしまったのであった。

「ふむ……ノーススターナイトがサンダルクの外で戦ってくれたのは、幸いというべきか……」

「放射線の被曝はノーススターナイトが、ミヨルニルの槌と同じ陽性のプロテクト・シールドを張っていたために軽減されましたが、それでも早急に全員の診察と治療とが望まれます」

「予定通り治療部隊の派遣を急がせてくれ」

「はい。それと……ルドヴィヒ様も」

そう言うと、彼らはルドヴィヒの右手に注目した。赤黒く焼け爛れた表皮が、その傷の酷さを物語る。ルドヴィヒは全く意志どおりに動かない自分の右手をじっと眺めると、小さなため息をつき、戦地のクレーターに目を向けた。クレーターはまるで、我が身を欠損させられた地球による恨みのまなこの如く、ドス黒い赤みを湛えていた。色々なものが壊れてしまつて、色々な感情が過ぎ去つて行く。

「諸君」

ルドヴィヒは誰にとも無く訪ねる。

「我々は悪魔かね」

彼の言葉に、その場にいた全員がじつと俯いた。己の胸のうちに押し止めていたある感情が、心の深淵からぽっかりとその顔を覗かせる。技術、知恵、力など、相手に打ち勝つただけに求めたあまり、気が付けば蔑ろにしていた人間的感情。だが今更それを振り返るには、あまりに現実は凶暴すぎた。

「……いいえ、悪魔ではありません」

一人の魔法使いが答える。

「例え悪魔的な力を有しても、それを扱うのはあくまで人間です！」

「ではいったい、その人間とやらはどこにいるのかね」

ルドヴィヒの言葉に、はっとする魔法使い。彼はなにかを口籠もるが、結局なにも答えな

かった。

ルドヴィヒは足元に転がっている、魔法書に戻ったミヨルニルの槌を拾い上げると、小さなため息をついて戦地を見下ろした。その深い憂えを湛えた目に映っていたものは、彼の周りにいた助手や魔法使いたちと同じ深い罪悪感と、人類の行く末を案じるただならぬ不安であった。

「――まったく、人間は木と同じようなものだ。

高く明るい上のほうへ、伸びて行けば行くほど、

その根はますます力強く、

地のなかへ、下のほうへ、暗闇の中へ、深みの中へ、

――悪の中へとのびて行く」

Zarathustra

――サンダルク謁見の間。

テーブルを挟むエフラムとリジヨの前に一枚の紙切れを持ってくるスイートピー。上質の羊皮で出来た、サンダルクの降伏の文章を綴った調書である。

「では、ここにサインを」

スイートピーが言うと、エフラムは大業そうに椅子から背を離し、羽根のついたペンにインクをつける。

（ふん……魔物の軍勢か。虫ケラどもがいくら数でこようとも我がゴットシップの爆撃には耐えられまい。そして、サンダルークは丁度いい虫取り網。市街もろとも全てを破壊し、ミルチア帝国を一から築き上げるか……くくくく）

「どうかしましたか？」

エフラムの残酷な笑みを見て、スイートピーが訊ねる。

「……いや、なに。素敵な町だと思っただけ。こんな素敵な町が私たちのものになると、嬉しくてね……くく……」

リジヨはほんの僅かに顔を顰める。スイートピーは全く動じた様子も無く、あくまで事務的な態度を崩さない。

そしてエフラムが全面降伏を受諾する調印を記そうとしたその時……

「待ってください！」

扉を開けてクローリンがやってくる。

「全面降伏の必要はありません！」

スイートピー、リジヨ、エフラムの三人は揃って彼女の顔を見る。

「どういうことですか？」

スイートピーが席を立ち、眉を潜めて訊ねた。

「『ミヨルニルの槌』が成功しました！もうミルチアの軍勢に手を借りる必要はありません！」

クーフリーンの言葉に、スイートピーとリジヨは思わず顔を見合わせた。出るべき場所まで出てきた奇跡のジョーカー・カード。その強運を引き寄せたのは、偉大な魔法使いルドヴィヒ・ヴァンシュタインの努力と才覚ゆえか。

エフラムは嘲笑に似た薄ら笑いを浮かべる。

「ふん、まだ言っているのか……諦めて我が国の支配下に……」

エフラムの言葉の途中で、リジヨは席を立ち、調書を取り上げる。

そして、エフラムが理由を訊ねる暇も無く、彼は調書を真つ二つに裂いてしまうと、魔法でそれを消し炭にしてしまった。

はらはらと舞い散る黒い燃えカス。

羊皮の焼けた独特の臭いが部屋に充満する。

「……バカなっ！」

エフラムがいきり立ち、席を立つ。

「後悔するぞ！お前たちにミルチアと魔物の軍勢を食い止める手立ては……」

「ミルチアは近々戦闘不能に陥る。魔物軍もはや、一個師団で十分過ぎるぐらいだ」

「なに……？」

リジヨの言葉に底知れぬ自信と確信を感じとり、思わずたじろぐエフラム。

「貴様ら、いったいなにを……」

バン!

とスイートピーが机を叩き、エフラムははっと息を飲んだ。

「全面降伏は、歯車がずれた時のいわば保険。でも案ずる必要は無かったようですね」と、スイートピーは言う。

「あとは使徒討伐隊の四人だな……」
リジヨが続く。

「何を言っているんだ！絵空事で話を進めるのはやめろ！ミルチアが戦闘不能だと！？魔物軍は一個師団で十分だと！？へ々な時間稼ぎをするために私を欺くのはやめろというのだ！……そうだ！元々魔物軍なんていなかったのだろう？どう考えてもこれは戦争を引き伸ばすための……」

「クーフーリン」

「はっ」

スイートピーの言葉に姿勢をただずクーフーリン。

「エフラム氏を丁重にお見送りして差し上げなさい」

「はいっ」

「ま、さて、まだ話は終わって……こら、離せ！襟首を掴むな！おい、こんな無礼が許される

と思うな！くっ、おのれ、こうなったら全面戦争だ！ミルチアの総力を上げて、貴様らサンダ
ルークと……ええい、離せ！離せと言っている！一体なんなんだこれは！？くそおお！」

必死に抵抗するエフラムをずるずると引っ張って、クーフリーンは謁見の間を退席した。

サンダルークを救う為に、幾重にも重ねられたスイートピーとリジヨのプラン。どのスイッ
チが入ってどのスイッチが入らなかった場合、どのスイッチを入れておくべきか。網の目状態
に広がる参謀の緻密な計算は、対するミルチアや魔物軍ですらもコマの内か、サンダルークの
絶体絶命の窮地を救ったユング王の地位確保にも繋がっていた。――全てはユング王の為に。

アルテオムという独裁者の喪失により事実上戦闘不能となるミルチア。

ミヨルニルの槌によって壊滅したヴァジュラ残党を中心とした魔物軍。

「あとは……」

と、リジヨは呟く。

あとは、この動乱において最も巨大な元締めを……。

――アリス・ルービンシュタインの屋敷。

ダイニングルームで朝食をとるアルアルパッツとリリパット。執事のメンフィスが彼らの前に立ち、現在の魔界や十三使徒、人間界の状況を、知る限りの範囲で口述していた。

「む……………」

スープを啜る手を止め、感覚を澄ますアルアルパッツ。

「……………どうかなされましたか」

儀礼的にメンフィスが訪ねる。

「……………いや、なんでもない。地震かと思ったが……………どうやら気のせいだったようだ」

アルアルパッツはコップの水面が全く揺れていないのを見て、そう言った。——魔法使いとしての卓越した神経が、遙か彼方で発動した超魔法術、ミョルニルの槌、の壮烈なエネルギーを感じ取り、彼はそれを地震と勘違いしたのだった。

「……………それでは現在、トゥオンとモードレッドの二大勢力が魔界を分けている、ということだな？」

話を元に戻すアルアルパッツ。

「大雑把に言ってしまうえばそういうことになりますな。しかし、実際にはモードレッド軍の方が数の上では圧倒的に勝り、トゥオン率いる旧魔王軍は苦戦を強いられています」

「旧魔王軍など、魔王が不在となった今ではただの形骸に過ぎんというわけか」

「左様で。あくまで魔王モートトを崇拜する歴戦の勇士や有力者たちは、魔界の地方に隠れ住み、戦況を傍観するに止まっております。トゥオンが第二のモードレッドとなることを危惧してい

るのでしょう」

「しかし解せぬ。いまや『時の禁呪』を成功させたモードレッドが、奴らにとって新たな魔王ではないのか？」

「もぐもぐ。ご主人、そいつぁ難しいとこですよ」

チキンを頬張りながらリリパットはそう言った。

「モートを崇拜する連中ってのは、魔王としての支配が及ばなくなった今でもモートを崇拜してるってことでしょ？つまり、あいつらは……崇拜者の連中は、言っちゃあモートの力量ではなく、偉業や人格に惚れてんだ。モードレッドにモートほどのカリスマがあるかつつと……微妙などこじやないすか？」

「ふん、奴にそんなものあるはずがない」

憎きモードレッドに対して毒づくアルパッツ。

「……しかし、事態は飲み込めた。どうやら私も遂に『時の禁呪』を行う時がきたようだな」と、彼は言った。

ぽかん、と口を空けるリリパット。

メンフィスも難しい顔をしている。

静かにドアが開いて、一人のメイドが姿を現す。

「メンフィス様、大広間の床板の油敷きが終わりました」

何も知らない顔をしてメンフィスの元にやってくるアールグレイ。しかし、メンフィスとり

リパットは訝しげな表情をアルアルパツゾに向け、一言も口を利かない。

「あの、とても滑りやすいんでみなさまお気をつけ下さい……ね？」

やはりアールグレイの言葉に反応しない三人。彼女は不思議に思ったが、誰かに事情を問いつけるような権限も無ければ、勇気もない。ただ三人の顔色を少女特有の好奇心でもって、ちらちら伺うだけである。

「……果たして成功しますでしょうか」

と、メンフィスが言った。

「執事風情が疑うのか？」

「いえ、そのようなことは決して……」

アルアルパツゾはハンカチで自分の口元を拭い、ゆっくりと席を立つ。

「……まあいい。確かに、貴様の思うところも分からんでもない。百年ものあいだ生死の境目を彷徨い続けた私が、ようやく地上に出てこれたばかりのところ、禁呪を成功させるのは、まづ不可能というものだろう……本来ならばな」

アルアルパツゾは右手の拳を眼前に突き出し、湧き上がる力に不敵な笑みを零す。

「ふふ……しかし、しかしだ！ 私はひよんな偶然から、奇跡的に、神にも勝る力を手にしたことができた！ 枯れ果てた私の身体は、ある力をもったアイテムから、まるでスポンジのように超魔力を吸収することができたのだ。まったく、笑ってしまうようなきつかけだったよ……だがきつかけはなんであれ、私はこうして十三使徒としての器を超え、いまや魔王への掛け

橋に足をかけている。時にメンフィス！」

アルアルパッツは肩にかかったマントを翻し、メンフィスに向き直る。

「何でございましょう」

「貴様……人間を飼っているな？」

アルアルパッツの指摘に、流星のメンフィスも驚きを隠せなかった。しかし、彼以上に驚いたりリパットは、アルアルパッツの食器を片付けようとしていたアールグレイの顔に食べていたものを思いつき吐き散らす。彼と同じ衝撃を受けていたアールグレイは、チキンの残骸をエプロンに引っ掛けながら、真っ青な顔でアルアルパッツの顔を見ていた。

「ぶ、ゲ、ゲボッ！」

リリパットは食べ物喉に詰まり、苦しそうに胸を叩く。

「騒々しいぞリリパット……とにかく、メンフィスよ。魔界の瘴気に耐えていられる者なのだから、それなりの魔力やポテンシャルを秘めた者なのだろう。私にその人間の血肉をよこすがいい。『時の禁呪』成功のためには、やはり少しでもエネルギーが必要だ」

黙ったままじっと俯くメンフィスを、リリパット、そして、アールグレイが、心配そうな顔つきで眺める。

「よもや、断るまい？人間が居ることは臭いで分かるのだぞ」

アルアルパッツが言った。しばらく何の反応も示さなかったメンフィスだが、やがて自分の胸中で決心をつけると、「こちらへ」と呟き、アルアルパッツの脇を通ってダイニングルーム

を出た。

(……メンフィス様、ネッコ・ヴァンシユタインを差し出すつもりなんだわ……！)

アールグレイはようやく分かり合えかけた、初めての人間の友人の未来を予期し、絶望に打ち震えた。——同じくリリパットは、それを己の妹の危機だと勘違いし、やはり絶望に打ち震えた。

ダイニングルームを出て、長い廊下をアルアルパッツを引き連れて歩き、地下室への階段の前まで辿り着くメンフィス。その間、彼はあれこれとネッコが助かるような策を思案したが、いいアイデアは一つも出てこなかった。

「……この階段の下に、強力な魔法使いがおります。名をネッコ・ヴァンシユタインと言って、あのヴァジュラを倒した経緯を持つ、非常に危険な輩ですので、どうかご注意を……」

「ふん、ヴァジュラのような筋肉バカを倒せぬ魔法使いがどこにいるものか。しかし、人間にしてはまずまずやるようだな。いいエネルギーになりそうだ」

怖気づくと思つてヴァジュラのことを口にしたメンフィスだが、逆効果を生んでしまった。悠然とした歩調で階段を降りていくアルアルパッツ。

十三使徒の背を眺めながら、メンフィスは思った。

(……ネッコ・ヴァンシユタイン……奴が犠牲になってアリス様が助かるのなら……それも仕方あるまい。アリス様、どうかお許しを)

と、その時、廊下の向こうから駆けて来ると、メンフィスの肩を突き飛ばし、己の妹を助けんとあわてて階段を下りるリリパット。

「あ、アルアル様、ちよつと待ってください！その人間は、その人間はダメなんだっ！」
哀願するリリパットの情けない声が地下に響き渡る。

彼のあとにアルグレイも続こうとする。

「待て、アルグレイ！」

慌ててアルグレイの手を掴むメンフィス。

彼女は泣きそうな顔をして振り返った。

「で、でも、ネッコが……！」

「……どうしようもあるまい」

「メンフィス様、アリス様が悲しみますよ！」

「我々にはどうしようもないのだ。分かってくれ、アルグレイ」

「ああ……ああ、そんな……不条理だわそんなの！あの人は魔族と人間との掛け橋なのに！あの人はより良い未来への革命の触先に立つ人なんだから！メンフィス様、あの方が亡くなられるのは、アリス様だってもちろん、平和を望む魔族や人類のみなだつてきつと承知しませんよ！」

メンフィスの腕を振り解き、廊下を走り去っていくアルグレイ。

メンフィスは落ちつかなげに彼女の後姿を見ていたが、やがて妙な不安に胸を駆られる。

「……まさか……！」

メンフィスは直感した。——アールグレイはアリスの元へ走ったのだ。

「待て、待つんだ、アールグレイ、アールグレイ！」

廊下を駆け、大広間で急停止し、油塗りたての床板でつるつる足を滑らせ、危うく転びそうになるアールグレイ。履いていた靴を放り出すように脱ぎ捨てると、靴下まで脱ぎ捨てて、裸足で階段を駆け上がった。メンフィスがその後を全速力で追いかけてくる。

「待つんだアールグレイ！アリス様の元へ行ってはならん！アリス様は……お前が思っているような病気とは違う！アリス様は伝染病などでは……むうっ！」

アールグレイが転びそうになった大広間で、メンフィスは見事に転倒すると、硬い床に思いつきり背中を打ちつけた。物凄い物音が響きアールグレイも足を止め、心配そうな顔つきで彼を見たが、メンフィスがよろけながら立ち上がるのを見ると、彼女も慌てて全力疾走し始める。

「ぐう……ま、待つんだアールグレイ！待てと言っておろうに！」

階段を駆け上がって左に曲がり、よく見慣れた廊下を裸足で突っ走る。後ろからメンフィスの呼ぶ声が響いてくるが、アールグレイの耳には全く入らなかった。古ぼけた木のドアが一つ、二つ、三つ、四つ……そして、病に臥せているはずの主人のドアが見える。ネッコが来てからいつも下の隙間から手紙を預かってきた、あのドアだ。

「アリス様、アリス様！失礼します！ネッコが、ネッコ・ヴァンシユタインが……！」

「待て、アールグレイ！アリス様は伝染病じゃない！アリス様は……うおっ！」

階段を登ったところでまたも足を滑らし、派手に転んでしまうメンフィス。彼のただならぬ執念に肝を冷やし、アールグレイはほとんど考える間もなくアリスの部屋のドアを開けてしまった。

「アリ……ス……様？」

その部屋は一面に、魔族とは思えない装飾が施されていた。

白い壁。花柄のカーペット。薄いピンクのカーテン……そして、花瓶に差した菖蒲の花。それはまさに、魔族とは相容れない、いや、正反対とさえ言える、**人間的少女趣味**に他ならなかった。予期せぬ光景に唾然とするアールグレイ。

アリスは机に向かって手紙を書いていたが、アールグレイが部屋に飛び込んでくると、その手を休めて立ち上がった。一瞬は驚きこそしたが、同じ家の下での隠し事にいいかげん嫌気が差していたアリスは、突然の客人に慌てず、開き直って微笑した。

「こ……これは……！？」 アリス様、一体……」

「ようこそアールグレイ」

アリスは自分のメイドを真っ直ぐに見据えると、臆せずと言った。アリスの美しいブロンドのツーテールは、まるで百姓娘や学生のようなただのお下げ髪に変わっていた。

「いままで黙っていてごめんさい、私は伝染病なんかにかかっていないわ。アールグレイ、私は……」

「……に、人間……!」

「そう。カーマに呪いをかけられて、私は人間に……」

眩暈を起こし、ふらふらとその場に崩れるアールグレイ。あわててアリスが駆け寄って、彼女の背を支える。

「アールグレイ! ショックなのは分かるけれど……どうか気をしっかり持って。そして、どうか私を嫌わないで頂戴!」

アールグレイは二、三度深呼吸をすると、そっとアリスの手を握った。

「……いえ、そんな、とんでもない、とんでもございませんわ! アリス様、私はあまりに突飛な予期せぬ事態に、ほんの少し驚いただけでございます。ですがそれはただそれだけのこと。アリス様が人間になられてしまわれたと言って、私がアリス様をお嫌いになるようなことなど……あろうはずがありません!」

「アールグレイ……!」

アールグレイの言葉に感激するアリス。しかし、人間になってから心配性になった彼女の性格は、すぐにメイドの言葉を信じることができなかった。

「でもアールグレイ。私は人間なのよ。あなたたち魔族が忌むべき存在の……」

アールグレイはアリスの言葉を遮るかのように彼女の手を両手でしっかりと握ると、真っ直ぐ

目を見てこう言った。

「人間だからなんだって言うんですか！」

「……アールグレイ……」

「個人の絆に種族なんてものは少しも関係ありませんよ！それに、私にはすでに、一人の人間の友人が居るんですから！」

ネッコのことね、とアリスは思った。

「そして、その友人が今、闇より暗い運命に身を窶そうとしているのです！アリス様、どうか、アルアルパツゾ様を止めてください！それができるのはあなたしか……」

「ネッコ・ヴァンシユタインが！？」

何度も頷くアールグレイ。アリスが慌てて立ち上がると、アールグレイも彼女の手を取って立ち上がり、二人は揃って部屋を飛び出した。

しかし……廊下には、強張った表情で立ちはだかるメンフィスの姿があった。

「どこに行かれるおつもりですか」

上司に思いつき逆らってしまったアールグレイは、メンフィスの姿を見ると、そそくさとアリスの後ろに隠れた。アリスは腕を組み、精一杯の威厳を保とうとする。魔法の天才児と言われた魔族の頃ならまだしも、こうして人間の少女のお下げ髪姿で虚勢を張っても、メンフィスには通用しない。

「ネッコ・ヴァンシユタインの元へよ」

「そのお姿ですか」

「そうよ」

「アルアルパッツ様が黙っておいでになられませんかでしょうな」

「ここは私の屋敷よ。アルアルパッツ様と言えども、勝手にはさせないわ」

「魔族の心を無くして、忠誠心までお捨てになられたのですか！」

メンフィス様！彼の言葉の辛辣さに耐えかねて、思わずアールグレイが叫んだ。

が、アリスは手を伸ばし、彼女を制す。

「忠誠と言ったわね、メンフィス？……だったら、どうして新時代の魔王となったモードレットに従わない魔族が居るか、どうして今は亡きモートに未だ忠誠を誓う魔族がいるのか、あなたには理解できる？」

「……」

「メンフィス、あなたは どうして人間になってしまった私に従うの？」

「……それは……」

「そして、私は人間となった今でも、魔族のあなたを忠実な僕として信頼しているわ……わかるかしら？全ては遠からず同じことなのよ」

メンフィスは黙ってアリスを見据える。アリスはメンフィスから目を逸らさない。

「個人の絆に種族はもちろん、家柄や血筋なんて関係ない。誰に忠誠を誓うかは、私自身が決めるわ」

つかつかと廊下を歩み、メンフィスの脇を通り過ぎるアリス。——メンフィスはアリスを止めることができなかつた。圧倒的に腕力で勝つていても、そんなものは、強い意志の輝きの前にはまったくの無力に過ぎない。

「一つだけ言っておくと」

と、アリスはメンフィスに背を向けたまま言葉を続けた。

「私は人間になって、たしかに色々なものを失つたけれど……でも、それらをかき集めても足りないぐらい、もっと素敵で素晴らしいものを得たわ」

家柄に縛られて何もできないアリスは、いつも兄・リリパットが羨ましかった。周りの評判も何も気にせず、自分の信念（わがまま）に従つてしたいことをする。自分が仕えるべきと思う相手に、何の気兼ねも無く仕える。生きているか死んでいるかも分からない主人の帰りを待ち、家に塞ぎこんで、まるで晴れ間の無い青春を過ごしてきたアリスだから、その羨望や嫉妬は察するに及ばない。一体、彼女はどれだけ新鮮な空気を待ち望んだことだろうか。どれだけ新鮮な日差しを待ち望んだことだろうか。——そしてそれは、皮肉にも魔族というレッテルを捨て去ったとき、初めて手に入ったのだった。

「自由ですか」

と、メンフィスは言った。アリスは驚いて振り返る。

「そうよ、メンフィス。自由よ！あなたにも分かるでしょう？」

「……生憎ですが、私には少し刺激の強すぎる考えですな」

「そんなことないわメンフィス。だって、紛れも無くあなただって自由なんだから！本当にね！」

そう言うと、アリスは踵を返し、ネッコの待つ地下室へと駆け出した。メンフィスはアリスの言葉を老いた忠犬に対する同情のようなものとしか受け取ることができなかったが、アリスは本心から彼を自由だと言ったのである。人間となった自分に仕える、己の信念に自由な彼に、並々ならぬ敬意と感謝を込めて。

地下室を降りていこうとするアルアルパッツに慌ててしがみ付くリリパット。彼は我が妹を救おうと必死になっていた。

「待ってくれ、アルアル様！この先にいる人間は……」

アルアルパッツが強烈な眼光で睨みつけると、リリパットは続けて声を発することが出来なかった。しがみついていた手を離し、思わず尻餅をつく。

「……リリパット」

アルアルパッツは落ち着いた声でそう言った。

「貴様は少しうるさい」

掌をリリパットの前にかざすアルアルパッツ。リリパットは視界を遮られ、彼の掌以外の何も見えなくなった。しかし、逃げようともしなければ、手をどけようとするでもない。アルア

ルパッツの無尽蔵の魔力による呪縛か、それとももっと単純で原始的な恐怖による硬直か。

「あ、アルアルさ……」

リリパットが口を利こうとした瞬間、彼の視界は真っ暗闇に閉ざされた。そして、そのままぐったりと冷たい床に沈みこむ。催眠術と呼ぶには強引な、アルアルパッツによる意識を喪失させる魔術であった。

アルアルパッツはリリパットの方を見向きもせず、まっすぐ静かな廊下を歩く。石で囲まれて音の良く反響する、真っ暗で、とても冷ややかな廊下である。曲がり角の先から一際明るい光が覗いていた。あの先に使徒ヴァジュラを倒したという、人間にしては破格とも言える魔法使い、ネッコ・ヴァンシユタインがいるのだ。メンフィスの言葉通りなら、時の呪術を行うための大きな糧になる。そして、己の超パワーを試すための好敵手にも丁度いい。

思わず口元が綻ぶアルアルパッツ。

「時代は近い！」

アルアルパッツが廊下を曲がると、その先に鉄格子に遮られた小さな部屋があった。いや、元は物置だろうか、部屋と呼ぶには些か雑然としすぎている。その物置部屋のご真ん中の空間に、まだ若いが魔力の脈流を感じさせる、まさしく人間の若い青年が、どっしりとあぐらをかいていた。

青年はまっすぐに来客の方を睨みつけていた。

「……」

「……」

アルアルパッツはゆっくりと歩を進め、格子戸の前までやってくると、静かに青年を見下ろす。二人の距離は鉄格子を隔ててわずか一m程度のところまで肉薄する。空気を締め付けるような沈黙と緊張感。どちらも怖気づいた様子は無い。

ネッコ・ヴァンシユタインは手をばんばんと払うと、ゆっくりと立ち上がり、両腕を組んだ。口を開いたのはアルアルパッツの方だった。

「……ネッコ・ヴァンシユタイン、だな？」

「何もんだ？」

「十三使徒の一人、アルアルパッツという」

「ああ、その名前なら知っている。昔、学校の教科書で読んだ覚えがある」

「それは光栄だな」

「で、そのアルアルパッツ様が何か用か？」

「貴様に用は無いが……貴様の血肉に用があつて来た」
「けっ、とネッコは言った。」

「あいにくと僕は食材なんかじゃないんでね」

「くくく、と笑うアルアルパッツ。」

「そうかな？私には貴様が丸々と肥え……」

瞬間、廊下を照らす眩い閃光、そして炸裂音。

アルアルパッツが喋り終えるより先に、ネッコによる無詠唱の魔法が敵の顔面に直撃した。十分なチャージは出来ないでも、不意をつけば魔法によるシールドも間に合わない。アルアルパッツは勢い良く後方に吹っ飛び、床を擦り、仰向けのまま廊下の端まで滑っていった。

「火炎竜！」

高温の魔法で格子を焼き切るネッコ。そして鉄格子の一本を引っこ抜いて己の手にもつと、その先端を注射針のように斜めに切って、鋭利な武器にした。そして、数日ぶりに物置部屋から飛び出し、即席の槍を敵に向けて構えた。

「探す手間が省けたってなもんだ、アルアルさんよ！」

両手を床に叩きつけ、その反動で起き上がるアルアルパッツ。ダメージどころか、顔には焦げ目一つついていない。

ネッコは不思議に思った。

魔法には二種類による対極の性質がある。太陽の輝きに似た性質を持つ陽、そして闇夜や月の輝きに似た陰の性質である。聖と魔、光と闇など、様々な呼び方があるが、全て同じ事物を指す。

この世の有機物のほとんどは陽の性質を備えており、人間もその例外ではなく、普通の人間の体では陽の性質の魔法しか扱うことができない。陰の性質の魔法を扱えるのは、時の禁呪によって己の肉体を陰の性質に作り変えた者たち、即ち、魔族や悪魔と呼ばれる種族のみである。陽と陰は互いに反発しており、その二つが争えば魔力は普段の何倍もの破壊性を備える。つ

まり人間の魔法は魔族にとっての弱点であり、魔族の魔法は人間にとってとてもない脅威である。人間同士、魔族同士が戦うよりも、よほど危険なのだ。

詠唱を必要としない簡易な攻撃魔法だったとは言え、まったくの無防備な状態の顔面に陽属性の魔法を照射されて、いくら十三使徒の魔法耐性と言えどもそう無事で済むものなのだろうか？しかし、現にネッコの目の前に立つアルアルパッツには、まったくのノーダメージなので、なにか理由があるに違いない。

魔法はダメだ。そう直感したネッコは、いよいよ応急処置として拵えた鉄の槍に頼ることを考えたが、武術の心得の無い彼にそれがどこまで扱えるかという話になると、仮にも十三使徒であるアルアルパッツを前にしては絶望的という他無い。

「……陽の魔法。太陽の子、生命の息吹、光の業」

アルアルパッツは言った。

「我々魔族にとっては忌むべきものであったが……陽の性質を得た私には、何と云うほどのこともない。くくく……幼子の翳す線香花火の方が、まだ危ないな」

アルアルパッツの皮肉に怒りを覚えるより先に、ネッコは彼の「陽の性質を得た」という言葉にひっかかった。そんなことが可能なのだろうか？——あのゼム・ロックだって、己の肉体に陰の性質である魔族の肉体を付け加えたため、拒絶反応の末に死に至った。アムリタのように魔力を完全放棄してしまわない限り、どんな生物だって耐えられるはずが無いのだ。

だが、先ほどの陽の性質に対する耐性は、まさしくアルアルパッツの言葉通り、彼が陽の性

質をも備えていると考える他無い。

「お前……本当に魔族か？」

ネッコが訊ねる。

「ああ……純粋な魔族さ。だが、我が体内に流れるのは、純粋な陰の魔力、そして、純粋な陽の魔力！ある落し物から拾った、ダイアモンドの輝き！」

「へっ！魔力はお袋の腹ン中で授かるもんだ。どっかから拾って取ってつけれるものか！」

「私の体は貴様らとは違う。百年間の時の流れによって大地に蝕まれたのだ。そして完成したのは全てを吸収する半植物半魔族の偶然の存在！私、アルアルパッツは、ドルイド、へと進化したのだ！」

アルアルパッツは両手を突き上げ、館中に響き渡る大声で怒鳴った。

「ドル……なに？」

ネッコは訝しげな表情で訊ねたが、相手は構う様子も無い。

「そう、植物！それこそが私！私の四肢に伸びた根は全てを吸収し、己の力と化し、やがては全世界、否、全宇宙をも包み込む巨大な大木となるだろう！私は神となり、全てとなる！私の存在は神の調和性と総合性を表し、セフィロトの樹として永劫の刻を生きることとなるのだ！その一人目がネッコ・ヴァンシユタイン、まったく取るに足らぬ貴様のようなゴミクズなのだから、貴様は私に感謝してしかるべきだ」

そういうアルアルパッツの目つきは、もはや常人のそれでは無かった。百年の歳月が彼の脳

まで蝕んだのか、それとも元々の狂気が彼の中に住んでいたのか……今となってはどうでもいいことであろう。

危ない奴だな、とネッコは思った。

「……ふん、やってみろ。盆栽野郎！」

「言葉に気をつけよお！」

アルアルパZZは右手を握ると、ストレート・パンチのように振りかぶった。拳の先から飛んでいく真つ黒の球体。ネッコは最初、シールドを展開してそれを防ごうとしたが、とても防ぎきれないことを感じると、反射的に地面にへばりついた。蛙のように地面にへばりつくネッコの頭上すれすれを、黒い球体が通過し、物置部屋に衝突した。

強烈な爆発が地下室に広がる。

爆風によってネッコは吹き飛ばされ、廊下の真ん中に立つアルアルパZZを追い越し、向こう側の壁に思いっきり叩きつけられた。アルアルパZZは爆風に全く動じず、己の魔力で数センチ浮遊している。ネッコはなんとか身を起こし、頭を左右に振ると、よろめきながら階段まで走り、転がるリリパットを踏みつけ、這い上がるように地下室を抜け出した。この狭い場所ではあつというまに決着がついてしまう。戦うにしろ、逃げるにしろ、ここにはいけない。地下室の向こうからぞつとするような声が響いてくる。

「逃げても無駄だぞ、ネッコ・ヴァンシユタイン！私から逃げられると思うな！貴様はエサだ！エサは捕食者に食われなければならん！獲物らしく逃げても構わんが、逃げら切れると思

うんじゃないぞ！いいか！吐くまで食ってやる！」

息も絶え絶え階段を登りきり、ネッコは玄関を目指して突っ走った。

（やばい、あのガイキチ強いぞ。作戦は？）

ネッコは考える。

（……作戦は……作戦は……作戦は……）

更に頭を捻る。

（……作戦……作戦……ダメだ、無いなあ！畜生め、クマネコのやつさえいればなあ！）

階段を登りきったところで、ネッコははっとした。そこに立っていたのはアールグレイと、

そしてどこか見覚えのある、お下げの少女。

「ネッコ・ヴァンシユタイン！」

少女……アリスは深刻な表情で彼の名を言った。

「ネッコ、隠れて！アールパツゾ様は私が説得して見せるわ」

ネッコは横に首を振ると、鉄の槍で地面にルーン文字を彫り始めた。アムリタがヴァジュラ戦で使った地雷の正体は、これである。

「文字を踏むんじゃないぞ。それと、アールグレイ。僕の杖とヌイグルミを返して欲しいな」

「わ、わかったわ！」

アールグレイは頷き、廊下を走っていく。

「ネッコ・ヴァンシユタインってば！」

ネッコはアリスの腕を引いて玄関に向かって走った。

「もう始まってんだ！いまさら後に引けるか！それにあいつはキチガイだ。人間になってしまったお前の言うことなんて、聞くわけが……」

地下室前のルーン文字が爆発する。

爆風が屋敷内をゴトゴトと揺らす。

しかし、アルアルパッツを相手にしては、それはビツクリ箱程度の役目しか果たさない。ネッコは玄関前まで来ると、アリスを離して、彼女に隠れているように指示した。

「ホワイト・ストライプ！」

アルアルパッツの掌から白と黒の縞模様の波動が発射される。ネッコは咄嗟にプロテクト・シールドを張るが、波動はシールドごとネッコの体を吹き飛ばし、玄関を突き破って森に転がっていった。

咳をし、咯血するネッコ。体中を擦りむいて、あちこちが痛む。

こちらの陽の魔法は通じず、あちらの陰の魔法は強烈で……

ネッコは久々にこう思った。「やばいかも！」

その夜、リスラン軍は山を背にした平野で野営地で休息をとっていた。数万の軍勢が一箇所に集まると、野営地もかなり大規模なものになる。何千本という篝火が闇夜を昼間のように明るく照らす。

夜遅く、リスランは一人、野営地を歩いていて、側には護衛の兵もいなかった。セリーンに呼ばれたのだ。他の人間を同行できるわけもない。

強い夜風が身を震わせる。リスランは風にはためくマントを、身に引き寄せた。リスランは小さく欠伸をした。もう日が落ちてから大分経つ。最低限の見張りの兵以外は、寝静まっている時間だ。私も寝ているところを部下に起こされた。おかげで酷く気分が悪い。だからと言って、セリーンの呼び出しを無視するなど、リスランにできるはずも無かった。しかし、こんな時間に呼び出すなど、セリーンはいったい私に何の用だというのだ。

セリーンのテントは野営地の中心にあった。野営地にポカンと空いた黒い空間。そこだけは篝火も焚かれず、護衛の兵士も立っていないかった。ただ、黒いローブを羽織った背の低い男達が数人、テントの周りをゆらりゆらりと徘徊している。リスランの配下の者ではない。いや、

ローブの奥に隠れた顔は見えないが、リスランにも感じられた。人間じゃないと。

リスランは部下達に、このテントには近づくなときつく言い渡してある。もつとも、皆気味悪がって、誰も好き好んでこのテントには近づかないだろうが。

リスランは小さく深呼吸して、テントの中に入った。入った瞬間、香木を焚いた心地良い匂いが鼻をつく。テントの中はランプで明るく照らされ、置かれてある銀の装飾品がキラキラと光を反射している。象牙や貴金属、寶石などでできた美術品が至る所に飾られている。このテントの中だけは、まるで軍の野営地とは思えない。

セリーンは椅子に腰掛けて、お茶を飲んでいた。リスランが恭しく頭を下げる。セリーンはリスランの方を見て「ああ、来ましたか。紅茶でもいかがです？」と言った。リスランは言葉を選び、慇懃に断った。こんな時間にお茶を飲むなんて馬鹿げている。それよりもさっさと用件を済ませて、私を眠らせて欲しいものだ。

「何か御用でしょうか、ご主人様」

リスランが言った。セリーンは静かにティーカップを机の上に置いた。

「ええ、別に用と言うほどの事ではないのですけど……明日の夕刻には、キャメロンに到着するようですね」

セリーンが言った。

「はい。その予定です。エレイン軍に動きは無いようですし……敵は籠城するつもりでしょう。こちらの思う壺です。キャメロン城下には、多数の工作員を潜入させてありますから……攻城

戦になれば、工作人員達が一齐に敵城内で内応するようにしております。順調にいけば、数日中にキャメロンを落とせるでしょう」

「大変結構です。よかったですね、リスラン。レオデグランスの王位に就くというあなたの夢は、もうすぐそこまで来てますよ」

セリーンは小さく笑った。

「はい。すべてはご主人様のおかげです。この御恩は一生忘れません」

リスランはセリーンに向かって頭を下げた。セリーンの持っている巨大な資金が、リスランの軍を支えているのだ。セリーンがいなければ、リスランは今の三分の一の軍勢も集める事ができなかっただろう。

「これからも忠実にわたしに仕えていけば、レオデグランス一国どころか、あなたを人間界全ての国の王にしてあげます。永遠にね」

セリーンの言葉に、リスランは体が震えた。永遠に……か。それは私も魔族に転生するということだ。人間から魔族に転生する古代の術があるとは聞いている。魔族になるなど、考えただけでもおぞましい事だが、永遠の命というものはそれを補って余りあるほど魅力的だった。

「……そうそう、あなたを呼んだ用件ですけど。レオデグランスに到着して、もし敵との戦いに苦戦しそうなら、わたしに言いなさい。わたしの部下に手伝わせ、すぐに終わらせますから」

セリーンがリスランに向かって言った。

「ありがたい御言葉ですが、ご主人様の御手は煩わせません。わたしの手の者だけで十分でしょう」

リスランが言った。これ以上、セリーンの助力など必要なかった。ただでさえ味方の軍勢はエレイン軍の倍以上いるのだ。負けるはずがなかった。それに、魔族の手など借りて、万が一にも部下にその事を知られれば、取り返しの付かない事になる。

「そう願っていますけどね……話は以上です。下がっていいですよ」

セリーンの言葉に、リスランは一礼してテントを出ていった。それと同時に、テントの隅に黒い影が浮かび上がって、やがて人の形を成した。闇に光る赤い瞳。四魔候のラモラックだ。彼のいる一角だけが、明るいテントの中で暗く陰っている。はつきりと見えるのは、彼の赤い瞳だけだ。

セリーンがラモラックを見て、少し驚いた顔をする。

「……あら、いつからいたの？それにしてもあなたは、ふらりと姿を消したと思ったら、また唐突に現われるわね……今まで何処に行ってたの？」

「……無能な小娘だ。何の力も感じない。あんな人間の女を、本当に人間界の王にするつもりか……？」

セリーンの問い掛けには答えず、闇の中からラモラックがひび割れた声が聞こえた。その言葉に、セリーンは高く笑った。

「馬鹿ね。あんなの嘘に決まってるでしょ。あの小娘なんて、王の器じゃないわ。身に不相応

な野望を持っていると身を滅ぼすって典型ね。でもまあ、無能なら無能で使い道はあるのよ。人間達の国を制定するには、例え形だけでも、人間の王がいたほうがいいから。使えるだけ使って、いらなくなったら殺せばいいのよ」

セリーンが笑って言う。

「そうか……そういうものか……わたしには、関係のない事だな……わたしの興味を引くものは、ただ強い者のみ……戦いが近いのだったな……勇者の娘……楽しみだ……」

「勇者の娘？あの馬鹿王女、エレイン・アヴァロンの事？……あなた、いったい何をしていたの？」

リスランの言葉に、ラモラックはゆっくりと闇の中から姿を現した。ランプの光が彼の全身を照らす。セリーンはあつと息を呑んだ。ラモラックの肩から先、左腕が無かった。

「……その腕……何があったの？」

セリーンが聞く。ラモラックは強い。同じ魔族でも、セリーンなどとは比べ物にならないほどに。十三使徒を含めても、おそらくは現存する最強の魔族の一人であろう。そのラモラックにこれほどの傷を負わせる相手など、まずいるとは思えない。まして、人間の中にラモラックに傷を負わせる者などいるはずもない。ないはずだが……。

「……その傷は、誰にやられたの？」

「……かつての人間達の王……最強の戦士……今はエレインと名乗っているのか……」

「まさか！あのエレインにやられたっていうの！？ありえないわ！」

セリーンが驚いて、声を荒げた。そうだ、ありえない。絶対に。セリーンも、ミアム・エルドリッチと名乗っていた頃、キャメロンの宮中でエレインとは会った事がある。セリーンには、エレインから何の力も感じなかった。ただの人間の小娘だった。勇者の血を引いているというだけの、無力な、そう弱者であるただの人間だったはずだ。

「あの女はただの人間よ！何を言ってるの！あの男とは違うわ！」

「……確かに、顔も声も違う……しかし、あの瞳、あの血……そして、あの力……間違いない……あの男だ……奴は、アトロ・アヴァロンだ……」

ラモラックはしゃがれた声で、静かに言った。

「馬鹿な！」

セリーンが言う。ありえない。しかし、それが本当なら、厄介な事になる。

セリーンは震える手で机の上のティーカップを取り、冷めたお茶を飲み干した。

落ち着けばいい。こっちは敵の倍はある兵力を有しているのだ。例え、勇者アトロが生き返ったとしても、この差を覆す事などできはしない。まして、あの馬鹿王女に何ができるといふのだ。

「……問題ないわ。何が起ころうと、我々の勝ちは動かない」

セリーンが微笑して、言った。

ラモラックはテントの低い天井を見上げた。

「傷が疼く……嵐が来ている……」

そのラモラックの言葉に呼応するかのようになり、突如、雷鳴が轟き、ポツポツと雨の音が聞こえ始めた。

テイグレインは手綱を強く握り締め、振り落とされないように必死に馬を走らせていた。闇夜に雷鳴は轟き、天をひっくり返したように大粒の雨が降り注いでいる。どしゃ降りの雨に視界を遮られて、前を走っているはずのエレインもライオネルの姿も見えなかった。

もう何時間、馬を走らせているのか。エレインを先頭とする僅か二千ばかりの軍勢は、夜の中、ずっと道なき道を走り続けていた。テイグレインは、今自分がどの辺りを走っているのか、それすらわからない。全身の筋肉は強張り、酷く痛みを感じた。疲労のため、意識は朦朧とする。このままでは馬から振り落とされてしまいそうだ。いや、それ以前にこのまま走り続けられれば、遠からず馬の方が先に潰れてしまうだろう。

それでも、一団の先頭を走るエレインはいつこうに立ち止まる気配はない。エレインは言う、「時間との勝負よ。夜明けまでに全ての決着をつける」。テイグレインは馬を走らせながら、地平線を見た。うっすらと光が見える。確かに、奇襲をするなら闇夜の方が有利だ。しかし、もうすぐ夜は明ける。だいたい、キャメロンから今のリスラン軍の野営地まで、本来なら馬を走らせても丸一日は掛かる距離だ。それを夜中から夜明けまでの僅か四、五時間ほどでたどり着こうという事事態、無理な話だった。

ティグレインは後ろを振り返った。雨の中に味方の黒い騎馬の影が無数に見える。今回の奇襲部隊には、ティグレインの旗下、トリストラル家の中でも精鋭中の精鋭を選りすぐったつもりだ。それでもこの嵐の中の強行軍にはついて来れるか……おそらく、三分の一ほどははぐれてしまっているのではないかと、ティグレインは心配した。

いや、例えば誰一人脱落していなかったとしても、ティグレインの部下とエレイン、ライオネルの率いるプリンセスガードを合わせて二千ほどの数だ。いくらリスラン勢の大軍は分散して野営していると言っても、リスランが本陣の守りを疎かにしているとは思えない。どんなに少なく見積もっても二万や三万はいるだろう。奇襲とはいえ、そんな中にたかだが二千足らずの寡兵が突撃していった、勝ち目があるとは到底思えなかった。おまけにこの強行軍だ。味方の兵は疲れきって、まともに戦えるはずがない。

完全に無謀な、勝ち目は無いと悟ったの暴挙、自暴自棄の作戦だ。ティグレインには、エレインが自棄を起こしたとしか思えなかった。こんな事なら、如何なる手を使ってもエレインを説得し、リスランとの和睦の道を探すべきだった。そうすれば、例えばエレインとティグレインの命は助からなかったとしても、アヴァロン家の血筋だけは細々と残せたかもしれない。だが、今さらどうする事もできなかった。これでアヴァロン家もトリストラル家も、リスランの手にかかって、この世界から一人残らず消え去る事になるだろう。あのリスランなら平気でやる。だが、トリストラル家に不忠などという文字はない。こうなれば主君に従って、潔く最後の戦いを飾るだけだ。そうすれば家と血は途絶えても、トリストラルの名は永遠に残る。

突如、前にいるエレインが馬を止めた。ティグレインも慌てて手綱を引き、馬を止める。その先は大きな崖だった。なぜ突然、行軍を止めるのか、ティグレインはいぶかしんでエレインの顔を見た。白い馬の背に跨ったエレインは、額を雨と汗で濡らし、小さく息を弾ませ、じつと前方の崖の下を睨んでいる。その時、ようやくティグレインは自分達が今どこにいるかを理解した。崖の下の広大な平野には、おびただしい数のテントが、遠くに見える。リスラン軍本陣の野営地、霧の山脈の麓の平野だった。まだ地平線から太陽は顔を出しておらず、あたりはまだ暗い。

たどり着かせてしまった。本当に夜明け前に。ティグレインは驚きの目でエレインを見た。まったく、信じられない。

ティグレインは身が震えた。そうだ。これなんだ。私がリスランではなく、自分でもなく、エレインこそがレオデグランスの女王に相応しいと思ったわけは。誰もが不可能だと思ふ事を実行に移す行動力。常識に捕らわれない、型破りの彼女の想像力。幼い頃からその行動を、奇行、馬鹿、じゃじゃ馬、非行だのと言われ続けたエレイン。その女王に相応しくない彼女の行動こそが、ティグレインを惹き付ける魅力だったのだ。

ティグレインは急いで鞍に括り付けてある袋から銀の望遠鏡を取り出すと、リスラン勢の野営地を見た。見張りの兵以外、動いている人影はほとんど見えない。まだ敵は眠っている。これなら、それでも万が一にも満たない確率かもしれないが、なんとかなるかもしれない。

エレインは腰から聖剣を引き抜くと、崖に向かって馬を進めた。

「降りるわよ。ここを」

エレインが崖を見下ろして言った。

「この崖を？それは無茶です。ここは崖を迂回して進みましょう」

ティグレインが驚いて、崖を見下ろして言った。この崖を馬に乗ったまま降りるのは不可能だ。崖を降りると言うより、落下と言う方が近いだろう。馬が足を折る程度なら運がいい。下手をすれば馬の背から振り落とされて、岩場に頭を打って、死ぬ事だってありうる。

「ここが最短距離よ。もうすぐ敵の兵士達も目を覚まし始める。迂回している時間なんてない。それに迂回なんてすれば、それだけ敵の見張りに見つかる可能性が増す」

エレインが言った。たしかに、ここまで敵の斥候に見つからなかったと言う事事態、奇跡的なことなのだ。

エレインは後ろに振り返って、味方の兵士達を見た。

「恐れるな。わたしには正義の神の加護がついている。わたしを信じろ。そうすれば必ず勝てる」

エレインはそれだけ言うと、正面に向き直り、聖剣を天にかざした。

「わたしに続け！」

エレインが声を上げ、愛馬の鬼百合を走らせ、険しい崖に飛び込んだ。ライオネルも躊躇せず、エレインの後に続いて崖を駆け下りていく。

「我々も続け！エレイン様をお守りせよ！トリストラルの名に懸けて、エレイン様を討たせる

な！」

ティグレインも味方にそう叫んで、崖を駆け下りていった。

ただ事ではない騒音に、リスランは目を覚ました。テントの外で、叫び声、悲鳴、馬が駆ける音、鋼がぶつかる音、さまざまな音が交じり合っている。リスランは慌ててベットから飛び降りた。そこに、リスランに断りもせず、兵士がテントの中に駆け込んでくる。

「大変です！敵襲です！」

兵士が言う。

「敵襲ですって？敵はどここの軍勢です？」

「わかりません。敵の数も不明で……」

兵士の言葉にリスランは舌打ちした。いったい何処の軍勢だ。昨日の夜には、キャメロンからエレイン軍が出陣したなんて報告は無かった。それからたかが数時間で、この場所まで降り着けるはずはない……ないはずだ。

「急いで迎撃の体勢を整えなさい！キャメロンは目の前なのですよ。こんなところでつまらない躓きをたくはありません！」

リスランが苛立たしげに言った。

「それが……命令系統が混乱していて……各部隊長にも連絡も取れない状況で……」

兵士の言葉に、リスランは近くにあった水差しを兵士に向かって投げつけた。ガラスの水差しは、兵士の兜に当たって粉々に砕ける。

「なんてざまです！ まったく……まさかとは思いますが、ここまで敵が来るなんて事はないでしょうね？」

「もちろんです。もちろんですが……敵も味方も全くわからない状況で……万が一と言う事もあります。近衛隊が守りたしますので、どうぞ御用意を」

リスランは苛立たしげに簡単な身支度を始めた。まったく馬鹿げている。せっかくここまで気分良く進軍できていたのに。こんなところで何処の軍勢かもわからぬ雑魚相手にここまで陣内を引っ掻き回されるとは……さっさと片付けてしまわないと、味方の士気にも関わる。

「相手が誰だか知らないけど、必ず殲滅しなさい。一人も生きて返すな。そうしないと、わたしの気が収まらないわ。三十分以内に敵の将の首をわたしの前に持ってきたさい。でないと、ただじゃ済まないわよ」

リスランが兵士に向かって怒鳴った。

その騒音に、セリーンは眉をしかめて、飲んでいたワインを放り出した。その側にはラムラックが立っている。

「驚いたわ……敵襲のようね。まさかとは思うけど……」

セリーンが呟く。

「……ああ。いる……奴だ……エレイン・アヴァロン……」

ラモラックがぐもった声で言った。

「そう……この距離で奇襲してくるとは、さすがのわたしも想像しなかったわ。驚かせてくれるわね」

そう言って、セリーンは小さく笑った。

「……でも、ここまでこちらの斥候に見つからずに来れたって事は、かなり少数の軍勢でしょう。いくら夜襲とはいえ、そんな数で突撃してくるなんて、勇者の小娘も命知らずね」

「……」

「まあ、リスランが負けることは考えられないわね。あの娘が救いようのない無能でないかぎり……とはいえ、エレインって小娘が危険な人物だって事はよくわかったわ。今回の事でも十分ね。生かしておくと、将来、我々魔族にとって仇をなす者になるかもしれない。ここで確実に殺しておくべきね」

セリーンはそう言って、ちらりとラモラックを見た。ラモラックの赤い瞳が強く光る。

「……奴は、わたしが……殺す……今、ここで……誰にも、邪魔はさせん……」

「お願いするわ。念のために聞いておくけど、あなた、エレインに勝つ自信はあるのよね？」

セリーンが聞く。この言葉を自分が口に行っている事が、セリーン自身信じられない。普通に考えれば、四魔候の一人に選ばれるほどの魔族であるラモラックが、ただの人間に負けるなど

ありえない。だが、あのエレインという娘は、なぜかセリーンの心を不安にさせる。いや、セリーンの心ではない。セリーンの中に流れる魔族の血が、妙な胸騒ぎを覚えるのだ。かつて、あの勇者アトロと出合った時と同じように。

「……当然だ……一度戦ったのだから……間違いなく殺せる……奴は強い……だが、勝つのはわたしだ……」

ラモラックはそう言って、テントの外に歩いていく。そして、闇に溶けるように消えてしまった。

セリーンはその様子を見送って、静かに椅子に腰掛けた。セリーンは、この戦いが負けるなどとは微塵も思っていなかった。

ティグレインは手持ちの槍を振るい、目の前の敵兵を突き殺した。兵士は声も出せず、地面に倒れる。息を荒く付くティグレイン。槍を持つ手が重かった。女性とはいえ、トリストラル家の娘として、ティグレインも槍や剣の訓練は受けてはいるが、実戦に出るのはこれが初めてだった。それも今回は後方で兵を指揮しての戦いではなく、最前線で槍を振るう戦いだ。

ティグレインは、はっとして辺りを見回した。エレインの姿が見えない。聖剣を振り上げ、敵陣に切り込んでいったエレインの姿は、まさしく鬼神の如くで、敵兵をばたばたと切り倒し、雷光のように突き進み、とてもティグレインには追いついていけなかった。それでも、先ほど

までは遠くに姿が見えていたのだが……。

とっさに気配を感じて、ティグレインは振り返った。しかし、遅かった。後ろから突然敵兵に組み付かれ、馬上から落とされる。そのまま兵士はティグレインの体の上に馬乗りになる。逃れようと必死に身を動かすティグレイン。しかし、女性の力では相手を弾き飛ばす事もできなかった。上に乗りがかった兵士が、腰から短剣を引きぬく。ティグレインは自分の死を感じて、目を瞑った。

ぎゃつと悲鳴が上がって、ティグレインの上に乗っていた兵士の首が斬り飛ばされた。ティグレンが目を開けると、そこには馬上から自分を見下ろすライオネルの姿があった。

「ライオネル様……」

「立ち止まるな。時間が経てば経つほど、目を覚まして、敵兵は増えていく。勝つためには、一気に本陣まで突き進み、リスランを討ち取るしかない」

ティグレインに手を貸して立ち上がらせ、ライオネルが言う。

「ライオネル様。エレイン様のお姿が見えませんか！わたしの事は大丈夫ですから、あなた様はエレイン様のお側においてあげてください。エレイン様には、まだあなた様が必要です」

立ち上がったティグレインが言う。本当は、初めての戦場で、一人では不安だった。ライオネルに側において欲しかった。ライオネルが側にくれる事ほど、ティグレインにとって心強い事はない。なによりも。

「心配はいらぬ。エレイン様はもう、わたしの手を離れられた。あのお方はお一人で大丈夫

だ

ライオネルが少し寂しそうに、笑う。

「でも……」

「さあ、早く馬に乗れ。また敵が集まってくる。ぐずぐずはしておれぬ」

ライオネルが言った。

エレインが馬上で聖剣エクスカリバーを振るう。一振りするごとに、真っ赤に敵の血飛沫が舞った。返り血が鬼百合の白い馬体を赤く染める。

エレインの前に鋼の鎧に身を包んだ兵士達が群がる。だが、誰もエレインを止められなかった。エレインが通れば、まるで台風が通り過ぎたように、後に残るは敵兵の死体の山だ。

もう何百人の敵兵を殺したかわからない。剣を振るいながら、まるでそれが自分の身体ではないようにエレインには感じた。何も考えなくても、勝手に体が動く。疲労も死の恐怖も、何も感じなかった。

どれくらい敵陣を突き進んできたか。

気付けば、エレインの後ろに味方の姿は無かった。

前からは敵の騎馬兵数騎が、エレインに向かって突撃してきた。エレインも立ち止まることなく、敵兵に向かっていく。だが、黒い影が視界をよぎったと思った瞬間、エレインの目の前

にいる敵兵の頭は、一瞬にして鉄の兜ごと無惨に潰され、エレイン自身も馬上から弾き飛ばされていた。とっさに身を捻って、雨でぬかるんだ地面に膝を付く。そのエレインの目の前に黒い胴着のようなものを着た、片腕の男が立っている。純白の肌に、額にある小さな四つの角、そして異様に目を引く真紅の瞳。この魔族は……。

「……たしか、ラモラックって言ったかしら……やはり、リスランと魔族は繋がっていたのね。あなた達、リスランなんかに手を貸して何を企んでいるの？」

エレインがゆっくり立ち上がって、言う。

ラモラックが、赤い目を光らせ、ゆっくりと口を開いた。

「……わたしには関係ない……リスランもセリーンも……人間も魔族も……わたしが興味を持つものは一つ、ただ強き者だ……絶対の強者……それだけがわたしを満たしてくれる……さあ、勇者の娘よ。わたしを楽しませてくれ」

ラモラックが錆付いた声で言う。

そして、ゆっくりと片手を掲げると、何か人間には聞き取れぬ言葉を発した。大きな赤い光の輪が現われ、ラモラックとエレインの周りを囲む。エレインは眉を傾げ、その輪を見つめる。突然、その赤い輪が強い光を発し、弾けた。その強烈な閃光に、エレインは自分の目を覆った。

ゆっくりと、エレインは目を開ける。彼女の半径百mほどの円状は、まるで巨大な炎で焼き払われたかのように、全てが黒い炭と化していた。戦う兵達も、駆ける馬も、剣や盾も。全て

がそのままの姿で。

「……これで、しばらくは、邪魔が入らん……」

ラモラックがエレインに向かって、笑って言う。

「エレインも、にやりと笑い返した。」

「……なるほど。魔族にも色々いるみたいね。でも、片腕でわたしの相手をするつもり？わたしは魔族相手に手加減なんてしないわよ」

「いらぬ氣遣いだ……その事をすぐに証明してみせよう……」

その言葉が終わらぬうちに、ラモラックの姿がエレインの前から消えた。いや、消えたように見えた。それほど素早い動きで、ラモラックはエレインの背後に移動していた。

後ろからエレインの頭部にめがけて振り下ろされるラモラックの拳。エレインはとっさに振り返り、剣の腹でその拳を受け止めていた。拳とは思えぬ固い金属音が鳴った。剣を持つエレインの手が痺れる。まるで巨大な槌でも叩きつけられたような衝撃だった。

「ほう……よく受け止めた……それでいい……わたしの拳は、君の頭蓋骨ぐらい、簡単に砕いてしまふからな」

ラモラックが身を躍らせ、空中で、エレインの斬撃をかわしながら、そう呟く。

「ちっ！」

ラモラックの異常な怪力に、受けに回れば不利だと悟ったエレインは、素早く剣を振るう。だが、ラモラックはまるで踊りでも踊るかのようには、エレインの剣を紙一重でかわしていく。

その動きはまるで風に揺れる柳のように柔らかく、無駄がない。

エレインの剣がラモラックの頬を掠めていく。流れるようにラモラックが身体を回転させた。はっとエレインが身を固くした時にはすでに遅く、大木でも薙ぎ倒しそうなラモラックの強烈な蹴りは、エレインの頭部に直撃した。

エレインの細い体が錐揉み状に宙に舞い、どさりと地に落ちる。

ぴくりとも、動かない。

ラモックは、地に倒れて動かないエレインを静かに見下ろす。

「……あつけない……やはり、人間とは脆いものだ……」

そう言つて、寂しそうにエレインに背を向け、歩き出すラモラック。

二十歩ほどいった時、その動きが、ぴたりと止まる。

ゆっくりと、その赤い瞳で、後ろを振り向いた。

「……まだ、帰るには早いわよ。あの程度で私が死んだとでも？　——まあ、数秒は気絶して

たみたいだけど」

エレインが立ち上がりながら、ラモラックに向かって、言う。

ラモラックが赤い瞳を大きく見開いた。

「……ありえない……わたしの蹴りを、頭部に直撃して……死なない人間など……」

「直撃じゃないわよ。首を捻って、衝撃を和らげたから」

「……わたしの蹴りは……その程度で緩和できる、衝撃じゃない……たしかに、首の骨を、

折った……その手応えは、あった……」

「折れてなんかいないわよ。首の骨が折れて、生きていられる人間なんているわけないじゃない」

エレインが軽く首を振って、言う。

「……だから、ありえないと……言っているのだ……やはり、人間ではないな……おまえは……」

「……失礼ね。人を化け物みたいに言わないで欲しいわ」

怒ったようにそう言ったエレインだが、自分でも生きている事が信じられなかった。首を捻ったなど、気休めに過ぎない事は、自分が一番よくわかっている。ラモラックのあの蹴りをくらう直前、エレインは死を覚悟したのだ。それが、数秒意識を失っただけで済むとは、奇跡だ。

本当に？

本当に、意識を失っただけだったのだろうか？

わたしは、やはりあの時、死んだのではないだろうか。

それが生き返った。

いや、生き返されたのだ。

この力に――。

エレインは自分の手のひらを見つめた。体の奥から白く輝くエネルギーが湧き出て、体中を

巡っていくのを感じる。身体が熱い。全身が焼き尽くされそうなほど、熱かった。エレインは歯を食いしばり、精神を集中し、必死にそのエネルギーを抑え付けようとした。少しでも気を弛めれば、溢れ出した力に飲み込まれてしまいそうだ。

ラモラックは、そのエレインの力を感じていた。彼の表情に、みるみる笑みが広がる。

「……素晴らしい……わたしには、見えるよ……おまえの身体の中で、巨大な力が、眩しく光り輝いているのが……まるで、太陽だ……その光の前では、モートもアトロも……霞んで見える……」

エレインは己の中の力と必死に戦いながら、ラモラックを睨んだ。

「……モートですって？」

「そうだ……おまえの力は、わたしの記憶の中にいるモートを、超えている……あの男の力も、眩いばかりに輝いていたが……おまえの力の輝きは、それ以上だ……素晴らしいぞ……わたしは最高の敵に、出会えた」

ラモラックの嬉しそうな言葉に、エレインが怒鳴った。

「わたしのこの力は、勇者の血。邪悪なる者を滅ぼすために神から授かった聖なる力だ！魔王モートの力などと比べるな！」

ラモラックはエレインの言葉を聞き、理解しがたいように、首を捻った。

「……わからんな……力は力だ……どうして、おまえ達人間はそこに、光だの闇だの……色や意味を付けたがる……そんなものは、己を正当化するだけの……言葉遊びにすぎない……モ―

トとアトロ、何が違う……モートの力とおまえの力、何が違う……」

「違うに決まっている！」

「……おまえがモートの何を知っている……アトロの何を知っている……わたしは、二人を知っている……二人は、何度も……戦い……互いに、理解しあった……」

「理解しあった？アトロとモートが？ありえないわ！」

エレインが怒鳴った。彼女の手の中で輝く聖剣を、強く握り締めて。

エレインにとって、勇者と魔王は対極にある者。磁石の正と負。絶対に相容れない存在だった。勇者は絶対の正義。魔王は絶対の悪。その二つが繋がるといふ事は、それは勇者といふ存在の否定であり。そして、それはエレイン自身の血と自己認識と、彼女の全てを否定する事である。そんな事、認める事ができようはずもなかった。

「もちろん……二人は敵同士だった……だが、戦いの中でしか得られぬものもある……戦っている者同士しか、わからぬ事もある……」

「うるさいッ！もう貴様の詭弁は沢山だ！魔族は滅ぼす。一匹残らず。それが神から与えられたわたしの使命だ！それが神の意思だ！」

エレインはそう言って、聖剣を構える。聖剣がエレインの言葉に呼応するかのようになり、いつも強く光り輝いた。

「……おまえは、強き者かと思っていたが……違ったようだ……いくら巨大な力を、その内に宿しているとしても……所詮、そのような濁った心では……モートを、アトロを、超えること

はできぬ……もちろん、わたしに勝つこともできぬ……」

そう眩くと、ラモラックはゆっくりと構えをとった。

対峙する二人。

じり、じりっと間合いを詰めていく。

互いに、間合いの探り合いであった。両者とも、相手がおそらく二度と出会うことはできぬであろう強敵であることはわかっていた。一瞬の間を見れば、それが即、死に繋がる。

先を取ったのはエレインであった。

エレインが駆ける。そして、大きく伸び上がるように剣を上段に振りかぶった。ラモラックが後方へ跳ぶと同時に、振り下ろされた剣先は、ぱつと鼻先をかすめていく。

——取った。ラモラックはそう思った。完璧とも言える『見切り』だった。剣を全力で振り下ろしたエレインには、大きな隙ができていく。

無防備になったエレインの胸元に、素早く、ラモラックが拳を突き出した。

——が。

エレインの動きは、ラモラックの予想を超えて遙かに速かった。エレインは振り下ろした剣を、間をおかず、上へ斬り上げる。

ラモラックの拳とエレインの剣が交差する。

「……」

「……」

ばつと、もつれた一瞬の後は、互いに間合いの結界とも呼べる目に見えぬ力で、再び対峙し合っていた。

ラモラックの胸には一筋の刀傷。

エレインの銀の胸当てには拳の跡。

互いに致命傷ではない。

だが、このほんの一瞬の動きで、ラモラックは既に直感していた。この目の前にいる二十にも満たぬ小娘が、『武』を探求し続ける事だけに千年以上もの時を費やしてきた自分の身体能力を、遥かに凌駕していると。

先ほどの動き——完全にラモラックが優勢な体位に合った。エレインは身動きもできず、胸を拳で貫かれているはずだった。それが信じられぬ動きで、直撃を避け、それどころか反撃の剣を繰り出してきた。へたをすれば、ラモラックの方が胴を真つ二つにされていただろう。技がどうこうというレベルではない。

圧倒的な身体能力。

天分の凜。

選ばれたものだけが与えられる、才能の輝き。

ラモラックは身震いした。微かに笑みをたたえて。

この勇者の小娘は、間違いなく、今まで自分が拳を交えてきた者の中で、最強の相手だ——幾多の人間の英雄達、十三使徒、そして、アトロやモートよりも。

だが、勝つのはわたしだ。

ただ『力』を持っただけの、未熟な小娘に負けるわけがない。

『弱』をもって『強』を倒すのが、『武』の本質である。幾多の技はそのために生み出され、そして改良されていったのだ。技を持って力を制する事ができず、なにが『武』か。

ラモラックには、長年積み上げ、研鑽を重ねてきた己の『武』に絶対の自信がある。そして、勝利への執念。

エレインがじりじりと間合いを詰めてくる。剣を構え、そして同時に相手の隙を見逃すまいと、慎重な足元で。

ところが、ラモラックはぶらりと力を抜いて、構えていた腕を下げた。そして突然、背を大きく反らして、胸からエレインに向かって跳びかかった。

エレインの向ける剣先に胸を差し出し、まったく無防備に、飛びかかっていったのだ。その無造作に、エレインは反射的に、ラモラックに向かって剣を突き出した。

聖剣がラモラックの胸を深く貫く。
骨を断ち、肉を貫く感触。

噴出す血。

その手応えに、勝負は付いたと、エレインは力を抜きかけたが——
はっと、エレインがラモラックの表情を見る。

それは苦痛に歪んだ、満面の笑みだった。赤い口が三日月形に吊りあがる。

「……取ったぞ……」

ラモラックが一本しかない腕を振り上げた。

エレインの唯一の武器である聖剣は、ラモラックの胸の中に封じられ、この体勢では、エレインは受ける事も避ける事もできない。

肉を切らせて骨を断つ。いや、骨を断たれても相手の命を取る。たとえ、命を捨てても、勝ちを取る。ラモラックの凄まじいまでの戦いに関する執念だった。

ラモラックは口から血を滴らせながら、笑った。この小娘が、首の骨をへし折っても生きているというのなら、今度は確実に頭を砕く。跡形も残らないように。

ラモラックは、固く握り締めた鋼のような拳、その死神の一撃を、エレインの頭めがけて振り下ろした。

——静寂が辺りを包んだ。

そして、ラモラックの大きく見開いた赤眼には、その信じられない光景が映し出されていた。彼の全身全霊を込めた必殺の一撃が、エレインの顔の寸前で、彼女の小さな手のひらに、易々と受け止められているのを。

「……自分の死を覚悟してすら、この程度なの？」

エレインはそう言って、平然と、そのガラスのような青い瞳で、ラモラックの赤眼を見つめる。

ラモラックの額から、一粒の汗の雫が、ぽたりと落ちた。

地に落ちて、滲んで消える。

「弱いわね——がっかりしたわ」

エレインが剣を持つ手に力を込める。

声を上げる事もできなかった。

ラモラックの胸に突立てられた聖剣エクスカリバーが強い光を放ち、ラモラックの五体は、無惨に、はじめて千切れた。

飛び散った血が、エレインの全身を真っ赤に染める。

どざりと地に落ちる、ラモラックの首。

冷たい目で、エレインはその首を見下ろした。首だけの姿になっても、まだラモラックは生きていた。驚くべき魔族の生命力。血を吐き続ける口を動かして、何かを喋っている。しかし、その言葉はくぐもって、何を言っているのかは、聞き取れなかった。

それは苦悶の声か、驚きの声か——あるいは呪詛の言葉、またはエレインへの健闘を讃えた賞賛の言葉だったのかもしれない。

しかし、エレインにとってそれは、憎むべき魔族の、卑しい生命力の最後のあがきにしか見えなかった。

「……塵は塵に。灰は灰に……邪悪なる者よ。暗く冷たい場所で、裁きの時を待ちなさい」
感情のこもらぬ声。

エレインが剣を振り下ろす。

ラモラックの肉体は、黒い塵となって、風に流れた。

セリーンは自分のテントの中で、静かにお茶を飲んでいた。

外からは、戦いの音がひっきりなしに聞こえてくる。

このテントの中だけは、戦場とは思えないほどに平穏だった。まだここまでは敵兵が来っていないにしても、セリーンのこの落ち着きは何だろう。

勝ちを確信しての安心か。それとも――

突然、セリーンの持つカップにひびが入った。そのひび割れたカップを見つめるセリーン。

「……ラモラックが死んだか……これまでね……」

そう呟くと、カップを持つ手を離れた。カップはテーブルの上に落ち、綺麗に二つに割れる。戦闘の声は、どんどん近づいてくる。セリーンには信じ難い事だったが、エレインの軍勢が圧してきているのだ。遠からず、ここまでくるだろう。

「ふん……何処で間違ったのかしら……戦略を立てれば百戦百勝のわたしが、こんな勝って当然の戦いに、敗れるなんて……」

割れたカップを見て、自嘲気味に笑う。

そうだ。勝てて当然の戦いだっただけだ。

こちらは敵の倍以上の兵数。

それに、手元には最強の魔戦士、ラモラックまでいた。

負ける要素など一つとして無かったはず。いや、今考えても、なぜ負けているのかわからない。わかる事はただ一つ。

馬鹿げた事だか、たった一人の娘が、全てをぶち壊したということだ。

セリーンの戦略も、策略も、野望も。

夢までも――。

かつての魔族と呼ばれる者達が栄華を誇った、黄金時代。セリーンの周りには、全てが満ち溢れていた。喜びも、美しさも、幸せも。無いものなんて、一つも無かった。

だが、三百年にすべては失われた。人間達の時代は夜明けを迎え、魔族達の時代は深い闇に飲み込まれていった。魔族は不毛の北の大地に追い込まれ、辛苦と苦渋に満ちた暮らしが始まった。

黄金の時代を取り戻そうと、セリーンは戦ってきた。いや、彼女だけじゃない。幾多の魔族が、立場は違えどモードレッドもトウオンも、失われた栄光を夢見て、再び魔族の時代を取り戻そうと戦ってきたのだ。しかし、――。

すべては過ぎ去った過去の夢なのか。

あの幸せな日々は、もう二度と戻ってはこないのか。

セリーンは首を振った。

時代の流れには、逆らえない。わたし達の時代は、もう遠い昔に過ぎ去ってしまった。不思議と、憎しみよりも諦めの方が勝って、むしろ清々しさすら感じる。

古く懐かしい二人の男の記憶が、脳裏に浮んだ。

まったく立場は違えど、それぞれ英雄と呼ばれた二人。かつて、わたしが恋した男達だ。だが、彼等はわたしを見てはくれなかった。

全ての慣習と常識を無視して、彼等は自分の道突き進んでいく。女をあとに残して。けっして、振り返らない。

セリーンは笑った。

いつの時代も、男とはそんなものか。

セリーンが指笛を鳴らす。巨大なカラスがテントの外から飛んできて、セリーンの目の前にとまった。

「これをモードレッドの元まで届けてちょうだい。彼の副官としての、わたしにできる最後の事よ」

そう言って、カラスの嘴に一つの封筒を啜えさせた。カラスはその大きな羽を羽ばたかせ、テントの外に飛び立っていった。

その様子を静かに見守って、セリーンはゆっくりと椅子から立ち上がった。

ライオネルとティグレインは戦場の中を進んでいった。雑兵には目もくれない。目的はただ一つ、リスランのいる本陣だけだ。雨でぬかるんだ泥の中を、二人助け合って進んでいく。乱戦の中、とつくに馬は失ってしまった。

ティグレインは走りながら、横にいるライオネルを見た。ティグレインの身体には傷らしい傷も負っていない。だが、ライオネルの全身は大小さまざまな傷を受け、血だらけだった。全て、ティグレインをかばって負った傷だ。

それでも、ライオネルの動きに乱れはない。剣を振るい、敵陣を掻き分けて進んでいく。ティグレインも遅れまいと、必死に槍を振り回してライオネルの後について行く。

やがて、戦場の中を突き進んでいたティグレイン達に、異様な光景が目に入り込んできた。それは一面に築かれた死体の山だった。エレイン軍の兵士も、リスラン軍の兵士も、何百という無惨な死体が地面に転がっている。

そして、その死体の山の中央に、一人の女性が笑って立っている。血に真っ赤に染まったドレスを着て。

戦場とは言え、目の前に広がるあまりの惨劇にティグレインは吐き気がした。しかし、ライオネルはじつとその女性を見つめる。

「……ミリアム・エルドリッチ……」

ライオネルがその女性を見て、眩いた。

「セリーンよ。本物のミルチア貴族、ミアム・エルドリッチはもう死んでる。わたしの名前はセリーン・。十三使徒モードレッドの副官」

セリーンが微笑んで言った。

「この度の事、全ておぬしが——」

「ええ、そうよ。アヴァロン王暗殺を命じたのもわたし。リスランをけしかけたのもわたし。全てはわたしの仕業。でも——」

セリーンの周りの空気が歪みだす。魔族としての彼女の魔力だった。

「——あなた達のお姫様にはしてやられたわ……わたしもこれで最後でしょうけど……せめて最後は——」

そう言って微笑しながら、ゆっくりと歩み寄ってくるセリーン。セリーンの体から発せられる魔力の波動を浴び、ティグレインの肌はびりびりと痛んだ。

セリーンは上位の魔族の中ではけっして力のある方ではない。むしろ、かなり弱い部類に入る。それでも、これだけの魔力を出せるのだ。人間と魔族の力の差だった。

その力の差を感じて、ティグレインは槍を強く握り締め、構えた。下級魔族などとはレベルが違う。目の前にいるのは、ティグレインにとって初めて対峙する上位の魔族だ。

ティグレインは槍を構え、一歩、前へ踏み出そうとした。

だが、そのティグレインを、ライオネルは片手で制した。

「——必要ない」

ライオネルが一步踏み出す。

セリーンは近づいてくる。ゆっくりと——まるで、最後に自分の命を燃やし尽くそうとするかのように、その身に巨大な魔力を宿して。

そのセリーンの姿を見た時、ティグレインは何故か突然、胸が痛くなった。

なぜ、こんな気持ちになるのか——わからない。

なぜ、こんなに切ないのか——。

ライオネルはじっとセリーンの瞳を見つめている。

そして、——剣を振るった。

「……ありがとう」

口の端から血を流しながら、セリーンは言った。その身は泥の中に横たわって。

ライオネルは剣を鞘に収め、そのセリーンを見下ろす。

「……礼を言われる理由はない。わたしは一人の敵を倒しただけの事」

ライオネルは感情を込めぬ声で、そう言った。

「……それもそうね……でも、どうせここで死ぬなら、わたしは英雄と呼ばれる男の手によって死にたかったのよ……」

セリーンが消え入りそうなほど力の無い笑み浮かべて、言う。

「わたしは英雄ではない」

真顔でそう言うライオネルに、セリーンはまた笑った。

「……モートにこの血を与えられて六百年……なかなか刺激のある人生だったけど、少々長く生き過ぎたのかもしれない……モートが死んで、アトロが一人の男から人間達の王に変わってしまった時、わたしも死ぬべきだった……」

「……」

「……これでようやく、またあの二人に会える……」

そう言うと、セリーンはゆっくりと瞳を閉じた。

　　瞼の奥に、かつての幸福な時代を夢見て。

そして、二度とその瞳は開く事はなかった。

ティグレインは、セリーンの死顔を見た。まるで、まだ生きているように、白い肌はほんのりと赤く染まっている。それがかえって、とても悲しく見えた。

不老不死と言われる魔族。六百年もの時を生きてきた彼女。

それなのに、今、こうして死んだ。

命の火は、ふっと消えてしまった。

あっけないほど、簡単に。

まるで六百年なんて時が嘘のように。

彼女の全ては消えてしまった。

「……ライオネル様——どうして、命というものはこんなに儂いのでしょうか……」

ティグレインが呟いた。

「ここは戦場だからな」

ライオネルはもうセリーンから目を離し、一言、そう言った。

「……」

「……人は死ぬ。だが、その身は土に返っても、名は永遠に残る。人の価値は、その短い生のうちに、何を為したかで決まる」

ライオネルは何処か遠くを見つめて、言った。

「我々は、今我々にできる事を為そう——ティグレイン、そなたは隊の者を集めて指揮を取れ」

「ライオネル様は？」

「わたしはエレイン様を探す。何か、嫌な予感がするのだ」

ライオネルはそう言って、この凄惨に続く死体だらけの戦場を見つめた。

戦場を一人、光り輝く聖剣を手に提げ、歩いていくエレイン。

辺りでは、怒声、戦馬の嘶き、悲鳴、敵も味方も入り乱れて、戦っている。

足元には、リスラン派の兵士の死体が転がっている。

少し離れた場所で、エレイン派の将校が、胸に槍を突立てられて、馬から落ちた。だが、エレインはそんなものに目も向けなかった。

ただ、黙って、ゆっくりと歩いている。

不思議と、誰もエレインの前に立ちはだかろうとはしなかった。

飛んでくる矢も、魔法の炎も、エレインの身体を傷つけることはできなかった。

彼女一人、まるで戦争劇に紛れ込んだ観客のように、荒々しく悲惨な戦場を無造作に進んでいった。

——リスラン軍本陣。

幾人もの屈強な兵士に囲まれて、リスランはそこにいた。

ただ、退屈そうに、ある時は苛立たしげに、座っている。リスラン派の総大将と言っても、貴族の令嬢である彼女に、戦争の事などわからない。彼女がわかる事と言えば、宮廷での作法と、社交界での踊りと、装飾品に使われる宝石の名前ぐらいのものだ。戦闘における実際の指揮は、部下に全て任せてあった。

彼女は苛立っていた。

その苛立ちの原因は、戦況のためなどではない。ただ、自分がレオデグランスの女王になるのが少しでも遅れる事が、リスランの神経を荒立たせた。

彼女は今、戦況が危ういなんて知らなかったし、ましてや、自分達が負けるなどと考えてもいなかった。当然だろう。リスランの部下は、自分達はエレイン派を遥かに越える兵力を有している。と彼女に言っているし、軍がリスランの領内を出陣して以来、入ってくる報告は全て自軍の優勢を報じるものばかりだったのだから。

テントの外で、と言ってもだいたいぶ遠くでだが、未だに戦いの怒声が絶えない。その音が、両軍の戦いの激しさを物語っていた。

リスランは我慢ができず、椅子から勢い良く立ち上がった。

「ええいッ！ 僅かばかりの敵兵の殲滅に、いつまで時間を掛けているの！」

テント内を苛立たしげに歩き回り、周りの近衛隊に向かって怒鳴る。

まったくーどいつもこいつも無能揃いだ。キャメロンはもう目の前だというのに。

その時、テントの近くで悲鳴が聞こえた。それも一つではない。連鎖的に上がる数々の悲鳴。リスランがびくりと身体を振るわせる。そして、ーしばらくして、悲鳴は止んだ。

近衛兵達も、何があったのかと顔を合わせる。

「なんなの！ 今の声は！ ほさつとしてないで、見てきなさい！」

リスランが怒鳴った。慌てて、近衛兵達はテントの外へ走り出て行く。

一人、テントの中に残される、リスラン。

舌打ちして、不安気に、手に持った扇で手のひらをポンポンと叩いている。

「ギャアッ！」

突然、凄まじい悲鳴が聞こえた。それも、テントのすぐ近くで。

リスランは、今度こそ本当に恐怖を感じ、その悲鳴の恐ろしさに身を振るわせた。やがて、悲鳴が止んで、静寂が訪れた。先ほどまでの阿鼻叫喚の声が嘘のよう。

「……………どうしたの？何があったの？誰か、……………誰か、返事をしなさい！」

リスランが震える声で、テントの出口に向かって叫ぶ。

返事はなかった。

気味の悪いほどの、静けさ。

やがて、耳に、ゆっくりと近づいてくる一つの足音。

リスランが震え、テントの出口を見つめる。

出口の垂れ幕が、ゆらりと動いた。

「……………え、エレイン・アヴァロン……………」

片手に聖剣を握り、全身血に塗れた修羅のようなエレインの姿を見て、リスランが震える声で、信じられない事のように呟く。

「……………守備隊は？……………近衛兵は？……………」

リスランの言葉に、エレインは答えない。テントの中に入り、ただ、黙って中を見回す。

そして、ぴたりと視線を止めると、凍りつきそうな冷たい瞳で、リスランの瞳を射抜いた。その視線に、まるで蛇に睨まれた蛙のように、リスランの体が硬直する。

こんな冷たい目をするエレインを、リスランは知らなかった。

いや、それだけじゃない――
違う。

何もかもが違う。

誰？

こいつは、いったい誰なの？

押し潰されそうな恐怖が、リスランの中でどっと溢れた。

「……誰か！誰かいないの！」

リスランが叫ぶ。

エレインは一步、踏み出した。

血の滴る聖剣を手に、ゆっくりと、リスランに近づいてくる。

脅えた表情であとずさる、リスラン。

背中に、テントの柱が当たった。

とっさに、リスランは柱に飾られていた小剣を手に取り、エレインに向けた。

ぱっと、剣が閃いた。

飛沫を上げる、赤い霧。

ぎゃーッという凄まじい悲鳴。

リスランの両の腕は、小剣を固く握ったまま、肘の先から切り飛ばされていた。

「ヒイヒイヒイ……わたしの、……わたしの腕……」

地面に落ちた自分の腕を、必死に拾おうと、膝を屈めて地に這い蹲るリスラン。ただ、腕がないので拾う事などできず、ほとんど半狂乱になって血が噴出す肘を、切り落とされた腕に擦り付けている。

エレインはそんなリスランの狂態を、冷たく見下ろす。

びたりと、相手の額に、剣先を突きつけた。

リスランが視線を上げる。

突きつけられた剣先を――そして、エレインの目を見た。

涙と、血、脂汗。ぐしょぐしょになった顔で。

「……ヒツ……お願い……助けて……助けて……」

「……」

「王位継承権は放棄する……十二大貴族としての特権も、全て放棄するから……お願いよ」

「……なぜ、魔族となんか手を組んだの？」

エレインが冷たく言った。

まるで硝子のような、冷酷な瞳。

「……あの、セリーンって魔族の方から言い出してきたのよ……断れなかった……脅されたの……仕方なかったのよ。わたしみたいなひ弱な人間が、どうやって魔族の要求を断れたって言うの……」

リスランが涙を流して、言う。

「……」

「……もう二度と政治には携わらないと約束する……あなたの前にも二度と姿を現さない……だから、お願い。……助けて……昔はよく一緒に遊んだじゃない……あんなに、仲がよかったじゃない……だから、殺さないで……もう十分でしょ……」

「……」

じっと、リスランを見つめるエレイン。その瞳に、ゆっくりと温度が戻ってくる。

突きつけていた聖剣をおろした。

「……そうね。もう十分だわ……勝負はついた」

まるで自分に言い聞かすかのように、エレインが言った。

リスランの表情に安堵と、そしてその安堵から急に切断された腕が痛み出したのか、酷い苦痛の色が見える。

エレインがリスランを見る。それは両の腕を失い、また全ての権力を失った、若い女性の惨めな姿だった。

そうだ。もう決着はついた。

何も殺す必要などない。

彼女は敵ではあるが、わたしと同じ人間じゃないか。魔族ではないのだ。

それに、ここで彼女を殺せば、敵の残存兵力との戦いは激化するだけだ。敵も味方も、さらに大勢死ぬだろう。

どちらも同じレオデグランスの民。同じ、人間なのに。

すでに余りにも多くの血が流れた。

これ以上は、もう……たくさんだ。

「……人を呼んで来るから、すぐに降伏の命令を伝えて。これ以上、同じ国の仲間同士で殺し合うのは、見るに耐えませんか……やってくれるわね？」

エレインが言った。

「……ええ、もちろん」

リスランは力なく頷く。

エレインは自分の服の裾を剣で引き裂くと、リスランの側にしゃがみ込み、その布で彼女の腕の傷口をきつく縛った。

「これで少しは出血も止まるわ。もう少しの間、我慢していて。すぐに誰かに手当てさせるから」

「……ありがとう、レディ・エレイン……いや、クイーン・エレイン」

リスランが、涙を湛えて、言った。

彼女の口から、クイーンと。

おそらく、ほんの数分前まで、それはリスランの最も口にしたくない言葉であったであろう。だが、今は違った。

リスランが、苦痛の下で、うっすらと微笑む。

エレインも微笑んだ。

「ありがとう……じゃあ、誰か呼んでくるから、少し待っててね」

エレインはそう言って、立ち上がると、テントの出口に向かって走り出した。
だが、

——声が、聞こえた。

エレインは出口の手前で、突如、がくりと膝を折って、柱に寄り掛かった。

「——どうしたの？」

リスランが驚いて声をかける。エレインがどこかに怪我でもしていたのかと、心配したのだ。
エレインは答えなかった。ただ、その身体は酷く震え、片手で頭を抑えていた。

「……頭が……声が、する……」

震える声で、そう呟くエレイン。

しかし、聞き取れたのそこまでで、そこから先はリスランにはエレインが何を呟いているのか、聞き取る事はできなかった。崩れるように、柱に身体を預けて、一人で何かを喋っていた。
エレインは自分の頭部に爪を食い込ませた。

また、この声だ。

どこから、聞こえてくるのか。

遥か天空からだろうか。わたしの心の深遠からだろうか。

それとも、わたしの中に流れるこの血が、わたしに語りかけてくるのか。

頭が割れそうに痛かった。

天を仰いだ。

光が降ってくる。

溢れるほどの言葉が、記憶が、感情が、色が、情報が、意思が、光と共に頭に流れ込んでくる。

これはわたしの言葉なのか？

それとも、誰かの意思なのか？

全てが混ざりこんで、塗り替えられて。書き換えられて。大切なものが、消えていく。消えていく。

わたしの、わたしの心はどこにあるの？

わたしは、何処だ？

何処だ？

何処

何

わたしは——。

ライオネルはテントの中に駆け込んだ。

テントの中では、ただ一人、エレインが背を向けて立っていた。

ライオネルが険しい表情で、エレインを見る。

剣を片手に、何人敵を殺したのか想像もつかないほどに真っ赤に返り血を浴びている。

そして、その足元に転がる、リスランの体。その身体には、無惨にも首が無かった。切り落

とされた首は、体の側に転がり落ちていいる。その死顔は、驚愕と恐怖で醜く歪んでいた。

「エレイン様——」

ライオネルが呼びかけた。低く、強い口調で。

だが、エレインは振り返らなかった。

「ライオネル——あなたは兵を収集して、味方の主力であるヴァーシア隊に合流しなさい」

背を向けたまま、エレインは言う。

「——なぜ、このような事を？」

「——合流したら、味方の全兵力を持って、リスラン軍の残党に攻撃しなさい」

「エレイン様！」

「敵が降伏するまで、攻撃の手を緩めるな。あくまで抵抗するようなら、敵の最後の一兵まで

皆殺しにしてしまえ」

「……」

もう、ライオネルは何も言わなかった。

エレインがゆっくりと振り返った。

そして、ライオネルにもリスランの死体にも目をくれず、テントの外に歩み出た。

昨晩から降り続いた雨は嘘のように止み、霧を纏った山脈の裾からは輝く美しい日の出が見える。戦場となった平野は、朝焼けに真っ赤に色付いていた。

兵士達の流した血で、染め上げられたように。

一人、朝日を見つめるエレイン。その瞳は凜とした輝きを燈し、肌はまるで一滴の血も通っていないかのように白く透き通っていた。

遙か遠く、けっして人の辿りつけぬ世界。

そこに彼はいた。

その瞳に映る一人の女性の姿に、彼は満足した笑みを浮かべた。

六百年の時を経て、ついに完成したのだ。

モートによって破られた運命の輪。

その綻びを修正し、この世界に、安定と平穩、そして絶対の秩序をもたらす事のできるの者。かつて、アトロは成し遂げる事のできなかった。

だが彼女は、アトロのように不完全ではない。

彼女は、完全だ。

「……いかなる邪悪をも打ち払い、すべての闇を照らす者——真の『光』か——ようやく、我が悲願が成就する時がきた……」

「墮天使ごときが、私に、十三使徒の私に何の用かと思えば……死を与えるですって？」
ネヴィーナが静かにそう告げる。内心では汗が一筋といったところであった。

ジョルジュは遙か昔その力を十三使徒に次ぐと言われていた。

その頃の力量からも自分といひ勝負をするだろうという予想は立っていた。

しかし、問題となるのは彼はこう名乗りを上げたのだ。新生魔王軍四魔候が一角、と以前の「墮天使」では無く。コレが示すのは……

「ええ、華麗に死を差し上げます……それがモードレット様、我が主の望みですからね」
黒き翼を一度はためかせ、ジョルジュは部屋に降り立った。

「この無礼者が！！」

ドウガンが拳を握り締め声を上げる。

「これは失礼しましたね。私としたことが……」

そよいいながら前髪を掻き揚げる。

「このリリスの眼前でその様な態度……墮天使とはその程度なの？」

ドウガンとは対照的に静かな口調で、しかし明らかに侮蔑の音色を混ぜた声でリリスは告げる。

「これはこれは」

一方ジョルジュは平然とそれを受け入れ、

「親愛なるリリス・コワンクトウ様、以後お見知りおきを」

そう言いながら右手を前に左手を後ろに組み、恭しく頭を垂れる。

「白々しい！」

その態度に、ドウガンはさらなる怒りを感じたようだ。

強く握った拳は青白くなっている。

「さて、戯曲もコレぐらいにして、本題に入らせていただきます。ネヴィーナ嬢、華麗なる夢

への、安らかなる死への舞を舞っていただけませんか？」

ジョルジュはネヴィーナを見据え、そう穏やかに言い放つ。

「……つまりは、私に、死ね、とそういうことかしら？」

「ええ、初めからそう申しております。それで、お返事のほどは？」

ネヴィーナの返答。しかし、幾分焦れたようにジョルジュが即答する。

「フフフ、答え？分かりきっているわ」

左手の甲を口元に当て、可笑しそうに言うネヴィーナ。

リリス、ドウガンも微笑を浮かべている。

「……そうですね、私と戦うとおっしゃるのですね……いいでしょう。私が、この美しい私が貴方を、いえあなた方を華麗に崩壊へと誘ってあげましょう！」

そう宣言し、黒き羽は空を舞う。

「返り討ちにしてくれる！」

そう言つてドウガンは両手を胸の前で合わせる。

「貴方の力、久しぶりに見せてもらうわよ」

「……ええ、十三使徒ネヴィーナの力見せてあげるわ！」

リリースとネヴィーナもお互い構えながら声を交わす。

「別れはすみましたか？では、死を与えましょう！」

そんなジョルジュの声と共に、最初に城の壁を破壊した魔力の本流のようなものが壊された壁の外から飛んでくる。

着弾、それと同時に凄まじい音の本流が城を埋める。そのジョルジュの攻撃で、まさに城の半分が崩壊し、自身の瓦礫に埋まっていた。

「さあ、これで終曲ということはないでしょう？」

笑みを浮かべながらのジョルジュ。

「ええ、もちろんよ」

その声は上から聞こえた。

「ほお、あの一瞬で上を取られましたか……」

軽く上に顔を向けるジョルジュ。

「開幕の花火よ」

ネヴィーナの声が辺りに木霊すると共に、三方から魔力の弾が無数に飛来する。それはまさに花火のようにジョルジュがいた地点でその華を咲かせた。

——カーマ屋敷前——

「ここから反応がありますわ、微弱ですけれど……」

水晶を覗いたメルフィナがそう皆に話す。

「大分前から急に微弱になったしな……」

「ええ、おそらく結界にでも入れられた可能性があるわね」

アッドの言葉にアムリタが返答する。

「とにかくいくしかないだろ」

ロアの楽観的とも言える言葉を聞き、三人は苦笑する。

「ロアの言うとおりだな、行かなければ話しにならない」

「そうね、早くあの人を救出して説教しないといけないわ」

「ほどほどにしてあげてくださいいねアムリタさん」

三人はそう言いあう。

「よっし、堂々と正面突破といきますか」

ロアが腕まくりをしながら意気揚々とそう宣言する。

「いや、その必要は無いみたいだな」

アッドが正面を見つめながらそういう。

その視線の先には、屋敷の扉の中からトロロークが続々と出てくる様子があった。

「お出迎えというやつね」

「そうみたいですわね」

各々構えながらその言葉を交わす。

「こんなところで止まってはいられない。ロア、さっさと突破するぞ」

「了解、そうこなきゃな」

「グオオオオオ」

対峙する者の余裕ぶりに腹が立ったのか、雄たけびを上げ、こちらに群がってくるトロローク達。

「雑魚は引っ込んでろってね」

そう笑みを浮かべつつ、向かってくるトロロークに向かって掛け始めるロア。

「オラ！」

素早く懐に潜り込み、ボディに強烈な一撃を叩き込む。

その衝撃で後方へ吹っ飛ばすトロローク。

「足腰が鈍ってんじゃねえの？」

そう軽口を叩き、次の獲物へと掛けるロア。

鋭い金属音が響き、一体のトロロークが膝を着く。

切り結んだトロロークをあっさり切り捨てるアッド。

すでに視線は次のトロロークへと向かっている。

「次だ」

静かな声のアッドから漏れる。

破竹の勢いと勢いでも言おうか、あっさりと撃破数を重ねるアッドとロア。

「あらあら、これでは私達の出番はありませんわね」

のんびりとしたメルフィナの声が戦いの場に響く。

その様子はかなり場違いと言えよう。

「トロロークごとき二人で充分ね」

アムリタも警戒は緩めていないが構えを解いている。

ロアが初めのトロロークを倒してから数分後、十数体いたトロロークは全て地に伏せていた。

「んじゃ、改めて突入ってな」

ロアの言葉に頷く三人。

アッドを先頭にして、アムリタ、メルフィナ、ロアの順で駆け込んでいく。

「細かい位置はわかりませんが、虱潰しに探すしかありませんわ」

メルフィナの声が先頭のアッドに届く。

「とりあえず、奥に行くとしよう。親玉を叩く！」

「賛成！」

アッドの発現に嬉しそうに肯定の意を示すロア。

「大きな廊下を行けば大丈夫なはずよ」

アムリタの助言が飛ぶ。

「わかった」

時折現われるトロロークを切り伏せながら掛ける四人。

——カーマ屋敷最奥——

「侵入者ですって？」

明らかに機嫌の悪そうな声をあげるカーマ。

「はっはい……向かわせたトロロークを悉く打ち倒してこちらに向かって進んでいるようですよ」

恐る恐る答えるチビの部下。

「気に入らないわね……反応は四つ、強いのは三つで、一つは弱い。おや、この波長は……あのネッコ・ヴァンシユタインに似ている？」

そこまで言つてカーマは自分の幸運に歓喜の声を上げた。

「ほーっほっほっほ、ついでるわ、今私は最高についている！この四人をひっ捕らえて私の前に連れて来なさい。いいわね？」

カーマは気がついたのだ、先ほど考え付いてクマネコ王子の利用。それを実現できそうな存在がこんなに早く自分の前に現われたのだ。

「捕らえればよろしいのですか？」

カーマがなぜそんなことを言い出すのか分かっていないチビの部下。

「そうよ、さっさとおいき！いいこと、一番弱そうなのさえ殺さなければいいわ。万が一この一番弱そうなのを殺したら……一生苦しめてやるから心しておきなさい！」

そうヒステリックに叫び、部下を蹴り出すかの如く、屋敷で一番広い部屋から出て行かせる。

「早く私の元へいらっしやい、愛しの奴隷よ」

妖艶とも狂気とも言える微笑を顔に浮かべて、カーマはそう呟いたのだった。

屋敷を駆ける四人、すべてに屋敷内に入ってからトロロクを数十体は倒していた。

「まだつかねえのか？」

ロアがだるそうに声を上げる。

「わからん」

アッドがあっさりと両断する。

その時、四人の前方に始めて扉が現われた。

「到着かしら？」

「判断はしかねるわね」

「突入あるのみ！」

女性陣の言葉を聞き、走り続けることから抜け出せると思ったロアは元氣良くそう答える。

「罨の可能性も無くはないが……行くしかない」

アッドも渋々ではあるがロアの意見に賛成する。

「いくぞ！」

そう声をかけ、罨のときの咄嗟の反応を促しつつ、扉を蹴り破る。

そこには少し広めの部屋があり、奥にまた扉がある。

そして、アッドたち四人と扉の間に一人の男が立っていた。

「そのの娘を渡せ、そうすれば命だけは助けてやる」

その男の第一声。

「断れば？」

ロアが軽く問いかける。

「殺す」

男の発する殺気が大きくなる。

「結論から言う。彼女は渡せない。俺達も死ぬわけにはいかない。そして……ここは通しても

らう」

アッドが静かにそう答える。

「下等な生物が！思い知らせてやる！」

アッドの言葉に怒りを露にする男。

「そうそう、俺達はそう簡単にはやれないぜ？」

構えながらロアが言う。

「戯言を！」

そう言つて四人に向かつて駆ける男。

両手の爪が鋭く伸び、剣呑に光沢を発している。

「死ね！」

ロアに向かつてその爪を振る。

「おっと」

危なげなく避けるロア。

そのまま逆の手を振るう男、ロアの肩口を正確に狙っている。

「相手は一人ではない」

男の横手から鋭い剣戟が襲う。

「くっ」

爪で剣を受け後ろに飛びのく男。

「そこです」

そこにメルフィナの魔法が襲い掛かる。

「小ざかしい！」

手に魔力を生み出し、相殺する。

距離を取って対峙する男と四人。

（思ったよりできる）

男はそう思った。そして、

（カーマ様……こいつらを生け捕りって無理です）

泣き言を自分の主に向かって心の中で呟いていた。

首の骨を鳴らしながら構え直す男。

「……」

男の右爪に宿っていた魔力が増加し出す。

「本気でくるかな？」

「そのようだ」

メルフィナ、アムリタの前に互いに立ち塞がりながらやり取りするロアとアッド。

男が右の五指に力を入れる。

「じゃああ」

声を上げながらさらに早い速度で駆ける男。

狙いはまたもロア。

渾身の爪撃をロアの左胸に目掛けて繰り出す。
構えていたロア。

(これはかわせまい！まずは一人！)

男はそう確信していた。

次の瞬間、その確信はあっさりと覆された。

「はっ」

その爪撃を右手でいなすロア。

そして、がら空きになったボディで、三連撃を放つ。

「ぐぶう」

さすがに耐え切れず吹き飛ぶ男。

「終わりだ」

その男に空中で追いついたアッドが剣を一閃させる。

(カーマ様……やっぱり無理でした)

そう心の中で呟きながら、男は、チビの部下はその身を滅された。

「近いみたいね」

アムリタが男の最後と同時に周りに声を掛ける。

「そうですね」

「いくか」

ロアの言葉に頷く三人。

そのまま眼前にあった扉を再びぶち破り奥に向けて走り出すのだった。

——リリス・コワンクトウの城——

朗々たる煙が晴れたとき、そこには傷一つないジョルジュが佇んでいた。

彼を中心に薄い青色の壁のようなものが覆っている。

「なかなか素晴らしい攻撃でした。しかし、私の美しい盾は破れなかったようですね」
そう言って前髪を掻き揚げる。

「酔狂に一人で乗り込んできたわけではなさそうですね」

ドウガンはその様子を見てそう判断を下した。

「そのようね」

リリスも同意する。

「さて、舞を続けましょう。フィナーレはあなた方の死ですがね」

そう笑みを浮かべ、手にした剣を振るうジョルジュ。

まるでカマイタチのように三人に向かって半月状の剣閃が飛来する。

瞬時に飛び退く三人。

「まずは……貴方です」

そう宣言し、避けたドウガンの前に現われるジョルジュ。

「老いた兵は潔く散りなさい。それが美ですよ」

そうのたまいながら剣を振るうジョルジュ。

「まだまだ、若い者には易々とやられたりせんよ」

そう返しながら剣を魔力の籠った手で受けるドウガン。

二度、三度の応酬の後、背後から二つの影がジョルジュに飛び掛る。

絶妙なコンビネーションのリリースとネヴィーナの乱撃。

瞬時に込めた力を大きくした一撃でドウガンを弾き、二人と対峙するジョルジュ。

「くっ」

さすがに受けに回る。

ネヴィーナの蹴りを右腕で受ける。

その瞬間に少し浮いたネヴィーナの下をリリースがすり抜けジョルジュの懐に潜り込み、四連撃を繰り出す。

それをなんとか剣と左腕で防ぐジョルジュ。

少し後方へ飛ばされる。

その場で空中に飛ぶリリース。

リリースが消えた場所からジョルジュに襲い掛かる魔力の弾。

リリスの後方でネヴィーナが放ったものだ。

「かあ！」

それを一閃することで掻き消す。

そこに跳躍から下りてきたリリスが襲い掛かる。

両手から時間差をつけて魔力の弾が打ち出される。

後方に飛ぶことで避けるジョルジュ。

着地と同時に、背後に気配が生まれる。

「喝っ」

ドウガンの突きがジョルジュの背を襲う。

「むん！」

その腕を上半身を倒し、振り上げた足で方向を逸らすジョルジュ。

そのまま一回転し、翼を広げ宙へ舞い上がる。

「甘い！」

そのジョルジュの上を取ったリリスが両手を組み、ジョルジュを上から打ちつける。

両腕を交差させ、防ぐジョルジュ。

そのわき腹へ、ネヴィーナの蹴りが炸裂する。

さすがにその威力を打ち消すことができずに地面に叩きつけられるジョルジュ。

リリスとネヴィーナがドウガンの傍へ降り立つ。

それと同時に、なんにも無かったような様子で立ち上がるジョルジュ。

「素晴らしい！真に素晴らしい！なんと美しい連携！まるで舞踏！そう戦いとはこうあるべきなのですよ。何度も言いますが、素晴らしい！エクセレント！ブラボオーです」

両手を広げ、大きな笑みを浮かべながら声高々に言うジョルジュ。

「打ち所が悪かったのかしら？」

「お嬢様が蹴られたのはわき腹でしょう？」

「叩きつけられたときに打ったのではなくて？」

そんなジョルジュの様子に呆れている三人。

「美しいもの、素晴らしいものを見つけたとき心が打ち震えませんか？」

心底以外といった顔をするジョルジュ。

「お前のような歪な感嘆はせぬ」

ドウガンはそう返答する。

「そうですか……まあ私としても見つけたときよりも、その美を蹂躪したときこそ無類の快感が走るのですけどね」

そう言って口の端を軽く持ち上げる。

三人の警戒が強くなる。

それを尻目に、

「では、次は少々力を入れますよ？これくらいで壊れないでくださいね」

そう言った刹那、ジョルジュの姿が掻き消える。

「ごふっ」

次の瞬間、腹に肘撃ちを食らうドウガン。

そのドウガンにすかさず蹴りを見舞い吹き飛ばす。

「このっ！」

その速度に驚愕しつつ、ジョルジュへ向かうネヴィーナ。

リリスとジョルジュを挟みこみ、複数の拳打を繰り出す。

その拳打を上半身の動きだけで避けるジョルジュ。

「遅いですね、この程度ですか？」

そう口にし、リリスの腕を掴みながら、ネヴィーナに蹴りを放つ。

繰り出す拳の隙間、そこに入れられた蹴りに反応ができないネヴィーナ。後方へ弾き飛ばされる。

そして、力任せに掴んでいたリリスの腕を引っ張り上げ、地面に叩きつける。

「かはっ！」

ネヴィーナへの蹴りから瞬時の留まりものなく、流れるような投げ。

リリスは受身を取るので精一杯であったが、純粋な衝撃だけで背骨が軋む音を聞いた気がした。

その時、飛ばされたドウガンが魔力を放つ。それはカードのような形状をしており、それが

数枚ジョルジュに向かって飛来する。

その一枚に、剣を合わせる。

剣とカードが接した瞬間、小気味のよい音と共に、カードが爆発する。

「器用なものですね」

「そう評価し、全てを回避するジョルジュ。爆発での傷らしいものはない。」

「黒き顎！」

回避仕切った瞬間、先ほど地面に叩き付けたリリスが片手を地に付けてそう咆える。

その手元から、まさに高速といった速さで黒い影が伸びる。

その影は、龍の頭のような形をとり、ジョルジュに喰らい付こうとする。

「はっ！」

気合と共に、手にした剣で地面を貫くジョルジュ。

その剣から魔力が迸り、影の龍を地面ごと吹き飛ばす。

「次はネヴィーナ嬢ですかな！」

そう言って後方に振り返る。

「スプリット！」

その視線の先に、そう叫びながら駆けるネヴィーナがいた。

前にかざした両手を組み、それを突き出したまま突進する。

そのまま、大きな魔力の弾丸となって相手を吹き飛ばす技だ。

「甘い！」

握った剣に力を込め、赤い剣閃を放つ。

「くっ」

その剣閃を打ち破れないネヴィーナ。

「ローゼス・クロス！」

そう叫び、今一度剣閃を走らせる。

それはネヴィーナと迫り合っていた剣閃と十字の形に交わる。

交わった瞬間に恐ろしい量の魔力が放出される。

「ぎゃあああ」

纏った魔力を破られ、吹っ飛ぶネヴィーナ。

瞬時に向かってこようとしていたリリスとドウガンに対して、

「エクストリーム」

片腕から魔力の弾を放つ。

地面が爆ぜる音が響き、大地に穴が穿たれる。

朗々たる煙が晴れたとき、地に横たわる二人が現われた。

ジョルジュを挟んで反対側にはネヴィーナが倒れ伏している。

「おや？この程度ですか？まだ六割といったところなんですがね？」

意外そうな表情、態度を取り、三人を交互に見やるジョルジュ。

「しかし、美しいものを壊す快感はやめられない」

自己の満足を多少満たしたのか、その顔には改めてすっきりとした表情が浮かんでいた。

——カーマ屋敷最奥の部屋——

「全く、使えない男だこと……」

部屋の奥にして、チビの部下が絶命したこと悟ったカーマ。

「さて、それにしても面倒なことになったわ、私が相手をしないとイケないじゃない」

少し考え込み、懐から水晶を一つ取り出す。

「これがあればどうとでもなりそうね」

そう眩きながら床に向かつて水晶を投げつける。

その瞬間、けたたましい音を立てて破られる扉。

その音は、理不尽な来訪者に対して扉が抗議をあげるかのようであった。

「ようこそ」

佇まいを正し、来訪者に言葉を放つカーマ。

「あんたが親玉かい？」

ロアの軽薄な声が部屋に響く。

「親玉とは品の無い」

ロアの様子を意にも関せずといった風体で返答するカーマ。

「聞きたいことがある」

「アッドが静かに声を上げる。」

「なにかしら？」

「ここに人間はいるかしら？ ネットコ・ヴァンシュタインという名の
アムリタが要点だけを告げる。」

「人間なら、貴方がそうね。ここには貴方しかないわ」
カーマは本当のことを告げる。

「……しかし反応は間違いないくここから」
メルフィナが声を潜めて皆に言う。

油断無くカーマを見つめる四人、いや三人。

ロアは落ち着きなくそこいらに視線を送っていた。
しかし、それが功を奏したようだ。

「おい、アレ見ろよ。椅子のところ」
玉座を顎で指し示す。

「あれは！」

「クマネコ王子！」

メルフィナも気がつき、アムリタが声を上げる。

「やはり、ここにいる……もしくは手がかりがありそうだな」
アッドが剣を構えながらそう言う。

「あら、物騒なお方ね」

カーマがそれを見ながらまだ気楽そうに言葉を発し続ける。

「とりあえず、あいつを倒してゆっくり探すとしようぜ」

うずうずするのか、身を打ち震わせながら言うロア。

「いくぞ」

アッドの言葉と共に、二人でカーマに飛び掛る。

「発動」

ニヤリと笑ってカーマが短くその言葉を流す。

それと同時に、

「なんだ!？」

「……」

「こっこれは!」

三人から声上がる。

アッド、ロア、メルフィナである。

「フフフ、ここには結界が張ってあるの。私以外の力が抑えられる結界がね」
楽しくてたまらないといった表情で説明するカーマ。

アムリタは力のほとんどを以前に使い切っており、その結界の範疇から抜けていたようだ。

「ここでは私には余程のことが無い限り勝てないわよ……甚振ってあげるわ」
カーマの瞳にサディスティックな光が宿る。

「そうはいくかよ！」

ロアが叫びながらカーマに殴りかかる。

目に見えてその速度が遅い。

「無駄よ、無駄無駄」

ロアをひよいっと避け、側面に蹴りを叩き込む。

「ぐあ！」

壁まで吹き飛び、衝突する。

「次は貴方かしら？」

アッドに無造作に近寄るカーマ。

一閃、上段から斬りつけるがこちらもいつもの速度がでない。

「フッフ」

二本の指だけでそれを止め、腹に拳を叩き込むカーマ。

「ゴフツ」

後方に吹き飛ばされ、仰向けに倒れるアッド。

「これなら!?!」

メルフィナが神聖魔法を唱える。

しかし、その効果はやはり薄い。

「そんな神聖魔法までも!？」

「ええ、この結界は特別製のよ」

そんなメルフィナの背後に回りこみ、掌底を放つ。

「キヤア」

そのまま前方へ倒れこむメルフィナ。

この部屋に張られた結界は、三人の防御の力までも奪うのか、なかなか起き上がれない三人。そんな三人を尻目に、アムリタの右手を掴み上げるカーマ。

「貴方ね、あれと同期を果たせそうなサンプルわ」

アムリタを見つめながらそう言う。

「くっ」

身を振るが、魔族の力に普通の少女となっているアムリタは抵抗ができない。

「大人しくなさいな、貴方は丁寧に扱ってあげるわ。モルモットとしてだけどね」

狂ったような光が瞳に宿る。

アムリタはその瞳に恐怖を感じざるを得なかった。

エフラム撤退により、一人の兵士がモリスンの下へと駆けつけていた。

「そうか……エフラムは撤退したか。コーデリアがやってくれたようだな」

「はい。ですからユング王に帰城を……」

「うむ、そのようにしよう」

そう言い終え、モリスンはゆっくりとユングの下へと歩む。

「ユング様、お迎えが来ましたぞ」

「モリスン、サンダルク城に帰れるの？」

「はい、帰れますぞ。ささ、こちらへ……」

モリスンに招かれ、ユングは駆けつけた兵士の下へと歩む。

「では、ユング様を頼むぞ」

「わかりました」

兵士はそう言い、ユングを馬に乗せ走り出した。

（これでサンダルクの危機は去ったが……この不安感は何なんだ？）

モリスンの心中は穏やかではなかった。アルテオムを撃ち破ったが、コーデリアが無事とは限らない。メルフィナ達も、今どうなっているかわからない。

(やはり……あの地に向かおう。あれの封印を解かねばなるまい)

そう決心したモリスンは、すぐさまその場を後にした。

モリスンの向かった先は、精霊の樹海であった。入り口より右沿いに進み、そこから複雑に別れている道を、迷わず進み続けるモリスン。延々と続く同じような道。その先に、小さな洞穴が姿を現す。モリスンがその洞穴の手前で停止する。すると、しばらくして赤い髪の男が一人、ゆっくりと姿を現した。

「なんでえ……モリスンの旦那かよと」

モリスンの姿を見て、拍子抜けしたように話す男。

「久しぶりだな、レン」

「チツ……久々に暴れられると思ったのによと」

「あれは無事か？」

「俺が、ここにこうしていることが証拠だぞと」

そう言いながら、レンは自らが元気だと示すような動作をとる。

「そうだな……オルフェはどうした？」

「ああ、あの馬鹿は偵察に行くとか言っておかけたよと」

「誰が馬鹿だ？」

レンが言い終えると同時に、二人の脇から男の声がした。そこには、スキンヘッドで長身の男が一人立っていた。

「よう、相棒。今日もイカしてるぞと」

「フン……」

そんなレンを無視して、オルフェはモリスンの近くへと歩み寄る。

「お久しぶりです、モリスン殿」

「二人とも元気そうだな。オルフェ、変わった事はなかったか？」

「相変わらず、この中にある物の魔力に惹かれて、雑魚どもがチヨロチヨロよってきますがね。それ以外には何もありません」

「で、モリスンの旦那。何か用かよと」

レンの問いに、しばらく黙り込むモリスン。やがて口を開く。

「近々、これの封印を解く時がくるかもしれんと思ってな」

「ほう……」

モリスンの言葉に、オルフェが興味深そうに呟く。

「いよいよ、魔王モート復活かよと」

「これは推測なんだが……モートの復活はないような気がするのだ。だが、それ以上にもっと恐ろしい事が起こるのではないかと思ってな」

「もっと恐ろしい事……一体なんですか？」

「わからん。だが、今この世界で起こっている出来事が影響しているのは確かだ。それが正しいか間違いかはわからんが、用心に越した事はないと思ってな」

モリスンはいたって真剣に、ゆっくりと言葉を発した。

「ま、なんにしてもこれの封印を解くなら俺達は用済みってことだぞと」

「そうだな……だが、その前にお客さんだ」

オルフェの言葉に、モリスンとレノが気配がする方へと瞬時に向き直る。そこには二人の間……の姿をした魔族が立っていた。

「なんだか魔力に惹かれてやって来てみれば……ドラゴンが三匹もいるじゃあないか」

一人の男が、にやりとしてそう言い放つ。

「噂に聞く『双対剣』とやらか。ドラゴン族に纏わる、光と闇を司る剣……興味深い存在だ」
「てめえ、何者だよと」

レンが腰に収めている剣を抜きながら尋ねる。

「名乗っても仕方あるまい？リーフ、その若い二人を相手してやれ。私はじじいから封印の解き方を聞き出す」

「兄さん、あれは使わないの？」

「あれは所詮人間……ドラゴン相手に敵うまいて」

「そっか。じゃあ、僕が相手するよ」

リーフは言いながら、三人の下へと歩み出す。

「モリスン殿、下がっててください」

オルフェは拳にグローブをはめながら言い放つ。

「オルフェ、援護しろよと！」

叫び、地を蹴るレン。リーフに向かって、剣を一閃させる。しかし、その一撃をリーフは空中へと飛びかわす。

「ふーん……レッドドラゴンか。なかなか速いじゃないか」

「てめえ、なめんなよと！」

そのリーフを追い、レンも空中へと飛ぶ。

「甘いよ」

リーフは空中で体位を反し、その反動でレンを蹴り飛ばす。蹴りをもろに受け。地面に叩きつけられるレン。

「ボーっとしてるからだよ」

「それはお前だ……!!」

いつの間にか、リーフの背後にいたオルフェが叫ぶ。間髪いれず、リーフに正拳突きを見舞うオルフェ。

「おっと、危ないなあ」

オルフェの正拳突きを左腕でガードするリーフ。

「へえ……このパワー、ウォータードラゴンか」

「黙れ……!!」

その体制から蹴りを見舞うオルフェ。だが、その脚をリーフに捕まれ、地面へと投げ飛ばされる。そして、ゆっくりと自分も地面へと降り立つ。

「やれやれ……この程度じゃないよね？」

リーフが呆れた声で言う。起き上がったレンは、再度リーフに向かって駆ける。剣と蹴りのコンビネーションで攻め立てるが、すべてリーフにかわされてしまう。そして、リーフの反撃であっさり吹っ飛ばされてしまうレン。

「まあ、十三使徒の候補にもなった僕に勝とうっていう発想が間違いなんだけどね」

リーフは二人に向かって皮肉たっぷりにそう言った。

「何が十三使徒候補だ。所詮なれなかった下等魔族じゃねえのかよと」

レンが自分の服に付いた砂埃を払いながら言う。

「タフさだけは目を見張るものがあるね……」

レンの言葉に、少し怒りを覚えながらリーフは静かにそう言った。

「で、相棒。このままだとまずいけど、どうするよと」

「だが、ここでは……やるしかあるまい」

「やっぱりそうだなあ。やれやれだぞと」

レンとオルフェは一度顔を見合わせ、再びリーフに向かって駆け出した。

一方、カリオンはモリスンの前へと降り立っていた。

「ふむ……封印というよりも、何か強い結界が張ってあるようだな。力づくで破れんこともないが、一応解き方を聞いておくとしよう」

「創刊単に喋ると思ってるのか？」

「思わんよ。貴様らドラゴン族というのは、そういう面に関してはまったくもって厄介な存在だな」

カリオンが右腕を真上に掲げる。短い呪文の後、その手に炎の球が姿を現す。

「少し痛めつけてさせてもらうぞ」

叫び、その炎の球をモリスンに向かって放つ。モリスンは左手を前方に出し、シールドを展開する。そのシールドによって、炎の球は彼方へと弾き飛ばされる。

「ちっ……アースドラゴンか。これは厄介だな」

カリオンは腕を組みながら少しの間考え込む。

「仕方ない。やはり力づくで解くとしよう。貴様にも死んでもらうとする」

カリオンが両手を自らの前で合わせる。そこに、黒いもやが周囲から集まってきた。

（すごい魔力だ……防ぎきれるか？）

シールドを展開したまま、モリスンは自分で自分に問い質す。だが、そのカリオンの横手から、人影が飛び出してくる。その人影は、カリオンを簡単に蹴り飛ばしてしまう。

「お、お前は……コーデリア!？」

モリスンが驚愕の声をあげる。そこには、あのコーデリアの姿があった。コーデリアはモリスンの方をチラッと見ただけで、そのままリーフの方へと歩みを進める。

「兄さん！貴様あ！」

叫び、コーデリアとの間合いを詰めるリーフ。そのリーフを見ながら、ゆっくりと剣を抜くコーデリア。リーフとの間合いが詰まるその刹那、仕掛けたのはコーデリアの方だった。もの凄く速さで斬撃を繰り出し続けるコーデリア。それを必死でかわすリーフ。だが、コーデリアのあまりの速さに、リーフの体は少しずつ傷を付けられていく。

「くっ……速い！」

たまらずコーデリアとの距離を取るリーフ。

「お前、一体何……」

言いかげ、コーデリアの瞳を見て言葉を切ってしまうリーフ。そこには、黄金に光るコーデリアの瞳が、リーフを睨み続けていた。

「くっ……リーフ、こいつは只者ではない。ここは一旦退くことにするぞ」

「わ、わかったよ兄さん」

カリオンの言葉に同意するリーフ。二人は個々に姿を消した。

「コーデリア……？お前、どうしてここに……」

コーデリアに駆け寄るモリスン。そのモリスンの言葉を聞き、その方向へと向き返るコーデリア。

「コーデリア……お前……」

モリスンは、コーデリアから発せられる気配を感じ取った。それは、間違いなく魔族の持つ独特の雰囲気であった。

「……」

コーデリアは黙ったまま、洞穴の方へと近づいていく。

「お、おい！お前何してんだよと！」

「やめる、レン」

コーデリアを止めに入ろうとしたレンを、オルフェが制止する。コーデリアは黙ったまま、洞穴に張られている結界の前へと立つ。そして、おもむろにその結果いを殴った。その一撃で、結界は簡単に破れてしまう。結界が破れたその先には、二本の剣が鞘に収められいた。その二本の剣を手に取り、洞穴から出てくるコーデリア。その剣を持っていられないかのように、片方の剣をモリスンへと手渡す。

「ここにいれば奴等はまた来るでしょう。これを持って、早くここから出なさい」

「しかし、コーデリア……」

「モリスン、早く行って。私の理性がまだ少しでも残っている間に……」

言いながら、コーデリアはモリスンの目を見つめる。

「コーデリア……」

「この剣は預かっておくわ。取り返したかったら……誰か、私を殺せる人をよこしなさい」

そう言い終え、コーデリアはモリスン達に背を向け、森の奥へと歩いて行く。

「旦那……どうするんだよと」

「どうするもこうするも、今の我々にはコーデリアを殺す事はできなさそうだな」

「モリスン殿の知り合いのようだが、あれは魔族……一体どうなってるんです？」

「私にも判らん。だが、彼女は元々人間だったのだ。一体何があったんだ……」

「吸血鬼のようだが……単なる吸血鬼じゃないって感じだったぞと。あの雰囲気、十三使徒に似た感じだったぞと」

「そうだな。もし、彼女を殺せる者がいるとすれば……」

そう言って、メルフィナの顔を頭の中に描くモリスン。

「とにかく、ここから出よう。ここにいっても仕方ないからな」

モリスンの言葉に、二人は同意した。

ドアの吹き飛んだ巨大な穴を玄関と呼べるのかどうかは別として、アルアルパZZは悠然と玄関へと歩を進めると、ゆっくりと重々しい足取りで屋敷の外へと出て行った。その瞳は圧倒的な狩獵者としての残虐性に満ちている。

アルアルパZZの魔法によって吹き飛ばされ、樹海に叩きつけられたネッコは、まだ思うように立ち上がれないでいた。体が言うことを聞かず、折れた木に寄りかかって、震える足を頼りなげに踏ん張ろうとするが、その度にずるずると滑ってまた木に倒れこむ。

(木にぶつかつた怪我は治ってるんだ。回復魔法で)

ネッコは考えた。

げほん、と一度咳き込む。

(問題は魔法のダメージさ。陰の属性が絡んでくるとなると……畜生、傷の癒えもよくない！……アルアル野郎が歩いてくる……二十m、十五m、十m……ええい、立て、立て、立つんだよ！どうしたんだ僕の足！言うことを聞かないのは勝手だが、日曜礼拝をサボるのは訳が違(うぞ！)

そうこうしているうちにアルアルパッツは彼の五mほど手前で立ち止まり、両手の人差し指と親指を使って正三角形の印を結ぶ。ネッコはぎくりとして、必死に木にしがみ付き、なんとか立ち上がってはみるものの、息を荒げるばかりでそれっきり身動き一つ取れない。

「慌てずとも、もう少し寝ていて構わんぞ」

アルアルパッツは言った。

「どうせこの魔法を食らったら、もっと長く眠ることになる」

やってみろよ！

とでも言い返したいネッコだが、今度ばかりはそんな余裕も無かった。痛む胸を抑えて、どうやってこの魔法を凌ぐか、どうやってこの窮地を抜け出すか、そればかりを考えている。避け回るには体力が無い。魔法を防ぐシールドはあつさり貫かれるだろう。息も尽かさぬ連続攻撃に転じたいが、そんな体力的・魔力的余裕も無い。

アルアルパッツの結んだ印に、紫色の煙が立ち込める。

毒々しい彼の魔力が指先に集まり、ネッコは背筋に冷や汗を感じる。

げほん、と一度咳き込む。

「……もう少し遊べれば良かったのだが、残念だよ」

印に集まった魔力が輝きを増し、暗い森にどす黒い輝きが迸る。

禍々しい、邪悪なオーラに嫌悪感を募らせ、ネッコは苦々しい顔をした。アルアルパッツの魔法を阻止するには彼は彼は消耗しすぎているのだった。ネッコは思った。それにしても、消耗

が早すぎやしないだろうか？魔界の瘴気が悪影響を及ぼしているのだろうか？

「お待ちください！」

屋敷の中から現れたのは、アリス・ルービンシュタイン。その傍らには不安に汗するメンフィスの姿があった。

アリスの声にアルアルパッツが振り向くと、彼は己の視界に飛び込んだ人間の少女の姿に驚き、思わず目を見開いた。その際、手元の印に溜めていた例の魔力も放棄してしまう。ネッコは思わずホッと胸を撫で下ろした。目先の窮地に変わりは無いが……それでも、時間さえ稼げれば体力も戻るのではないかという細い期待に縋る。絶対にいつもは、こうまで酷くは無いのだから。

「お前は……！」

「私はアリス。この屋敷の主であり、あなた様の忠実なる僕でございます。訳あってこのような姿でお目見えすることをお許し下さいませ」

「ガリバーの娘だと……この人間が……？」

驚きを隠せないアルアルパッツ。

げほん、と一度咳き込むネッコ。

「お恥ずかしながら、カーマ・カメレオンという魔女の呪術にかかってしまい、魔族の血を失って、こうして人間としての生を強制させられております……ですが、魔族への、アルアルパッツ様への忠誠は今でも変わりません！」

「忠誠？忠誠だと？ふん、よくも恥ずかしげも無くそんなことが言えるものだ。忠誠を誓う前に、己の力を取り戻すのが先だろう。どうしてカーマを討たない？奴を討てば貴様にかかった呪術は消えるだろうに」

「それはご尤も。ですが……」

「いや、そもそも！どうして魔族の誇りを失って自ら命を絶たんだ？よくもおめおめと人間の姿で生き恥を晒せるものだ」

「そのことについては、稚拙ながら私にも考えがございます」

アリスは言った。

「私は卑しくもかの魔王十三使徒の使い魔、ブラッディ・アリス。こうして人間の姿になってしまっても、幸か不幸かその誇りは失われず、もう二度と魔族に戻れないことが分かった時には、落胆し、眩暈し、絶望のどん底に叩き落されました。延々と続く人生の暗い影を眺め、心がバラバラになってしまいそうな苦痛と救いの無い将来に死すらも考えて……しかし、そんな私でも忠誠を誓ってくれるメンフィスや、私のことを思ってくれているメイドたちが居ることを知り、歓喜に心打たれ、浅はかな自裁を思いとどまると、次なる苦悩が私の眼前に現れました」

げほん、げほん、と咳き込むネッコ。

アリスは一瞬、怪訝そうな顔でネッコの方を見たが、すぐにアルアルパツゾに向き直って、己の口述を続ける。

「そう。新たなる、まったく思いがけない苦惱!……私は、ネツコ・ヴァンシユタインに多大なる迷惑をかけました。それこそ、償っても償いきれない多大な迷惑を。そのことで私は、私が彼と同じ人間になったその時、始めて自分の身勝手さを恥じると同時に、一人の人としての過ちをひしひしと感じたものでございます。それは人間だろうが魔族だろうが関係無い、『私という個人』の問題、自尊心、そして責任。アルアルパツゾ様、私の言うことがお分かりになりますでしょうか?」

アリスはアルアルパツゾに何うように尋ねるが、彼は答える素振りを見せない。

アリスはアルアルパツゾをじっと見つめながら、言葉が続けた。

「つまり……『私』というたった一人の存在における責任でございます」

と、アリスは言った。

げほん、と咳き込むネツコ・ヴァンシユタイン。

「そして、その責任は自分への戒めや束縛ではなく、全人類に対しての愛情にも似たものだと気づいたのです!私はいまや、魔族や人間族という言葉による住み分けやより分けに少しの意義も感じられず、そればかりか、とてもちっぽけな枠組みに捕らわれていた自分に気づき、魔族も、人間も、等しくこの世に生を分けた存在として、本来は手を取り合うべきなのだ大きいに感ぜられたのです。そして憎むべきは、己の利欲ばかりしか眼中に無い、共存という言葉を忘れた、愚かな利己主義者、権力主義者、出世主義者、支配主義者!相手を蹴落とし、飽食することしかしない、責任知らずの、恩知らず!」

「恩知らず？」

そこで始めてアルアルパッツは口を開いた。

「恩とはなんだ？誰に対しての恩だと言うのだ」

「全人類、あるいは宇宙や世界、あるいはそれらを創った創造主に対してです」

「はっはっは！馬鹿馬鹿しい！」

アルアルパッツが高らかに嘲笑をあげると、アリスは眉を潜めた。

「すっかり人間の血に毒されてしまったようだな、アリス・ルービンシュタイン。共存などという発想は弱者が強者と対等に立とうとする言い訳にしか過ぎない。この世は弱肉強食！叩き潰されなかったために、叩き潰す！捕食されなかったために、食い殺す！それが真理であり、この世の原理だ！」

「いけません、それでは魔族は滅ぶのです！古びた意識に囚われた思想の囚人は、いずれ時の死刑台に首を吊る運命にあります！」

「違う！魔族を滅ぼすのは、それこそそういう軟弱で穿ったものの考え方だと……むっ！？」
はっとするアリスの顔を見て、アルアルパッツは言葉を切る。

「いけない、ネッコ！やめなさい！」

刹那、アルアルパッツの背中目掛けて飛んでくる一本の槍。

槍が宙を裂いて飛んでくる気配に気づいたアルアルパッツは、慌てて後ろを振り返る。しかし、槍は既に目下寸前のところまで迫っていて、彼が身を翻そうとした瞬間には時遅し、切っ

先が彼の青白い皮膚を貫いて、その腹部に深々と食い込んだ。二、三步後ろによるめき、苦痛に顔を歪めるアルアルパツゾ。刺さった槍はまるで注射器の針のように、中の空洞に鮮血を走らせて、真っ赤に噴出す。

「がああ！」

もちろんそれは、ネッコが鉄格子を加工して持ってきた例の武器であった。彼はアリスが話していた間にやっとのことで体の調子を整え、手にもっていた槍に魔力を加えて力一杯投げたのである。

「ネッコ・ヴァンシユタイン！なんということを！」

アリスの悲鳴が響き渡る。

「叩き潰される前に叩き潰すか。アルアルパツゾ！」

槍を投げたままの姿勢で言うネッコだが、それでもその呼吸は荒々しい。

「お前を叩き潰して、肯定の意を表する。ってもんさ！」

ネッコはそう言って、アルアルパツゾに指をさす。

げほん、と一回咳をする。

「凶に乗るなア！」

アルアルパツゾの右手から小さな火炎弾が発射される。一発、二発、三発、四発、五発……ネッコは慌てて森の木を盾にしてそれらを回避しようとする。火炎弾は簡単に木を破壊し貫通してしまうので、目くらまし程度の役にしか立たなかったが、それでも直撃を避けることには

成功した。

「ちっ！」

腹から槍を引き抜くアルアルパZZ。槍は音を立てて地面に落ちた。彼の右手が輝くと、彼の腹にぽっかりと空いた穴は瞬く間に塞がった。思うように魔力の揮えないネッコなど遥かに凌駕する回復能力。その様子を見る限り、ネッコの放った槍は無駄弾だったと言わざるを得ない。

「あの小僧……やはり、もう少し遊んでやらなければ気がすまない……どこだ、どこへ隠れた！」

アルアルパZZは滅茶苦茶な景観の森を眺める。

一方、息を潜ませ木の裏に隠れるネッコ。

途端に、子悪魔の悪戯のように、肺に例の緊張感がこみ上げる。

そして、

「げほん」

と、咳を漏らす。

「そこか！」

ネッコの咳の音に反応してアルアルパZZが放った火炎弾は、見事ネッコの隠れていた木を粉屑のように破壊し、彼の居場所を露見させた。しゃがんでいたから直撃こそ免れたものの、衝撃波に吹きとばされたネッコは森の更に奥へと吹き飛ばされ、体中に傷を作りながら数m転

がった後、またはげしい咳をした。

げほん、げほん、げほん。

ネッコの咳は止まらない。

(ちっ……なんだってさつきからこんなに咳がでるんだ。クソ！おまけに精神も集中できないし……アルアルパZZが強いのは分かる。魔界の瘴気が影響して力が出ないのも分かる。だが、こっちにも何か別の問題があるんじゃないのか？何かが原因で僕の魔力は格段に落ちてしまっているのでは？地下牢での生活が思いのほか体に障っているのか？そんな風にも思えないけど……)

「アルアルパZZ様、おやめ下さいませ！」

アリスの悲鳴が聞こえるが、ネッコは体の痛みから立ち上がることが出来ない。

(ちっ、アリスの奴。いつまで邪魔するつもりだ。個人の責任とかなんとか。魔族や人類を超えた、全人類への責任だって？クドクドクドクドこの期に及んで何を言ってるんだ？あいつはバカだ！そういう考えはあくまで、戦闘を予防させる、もんであって、既に始まったドンパチを前にして、くっだら無い屁理屈捏ねても仕方ないだろうに！そんな暇があったら、さっさと割り切ってどっちかの味方につきやいいんだよ！……と言っても、命が惜しいなら僕の味方はやめておいたほうが良いけどな)

自信家の彼ならぬ思いに、ネッコは自分自身が哀れになった。

(こんな不調で十三使徒と戦うって方が無茶だ……特に、長期戦、持久戦は自殺行為と言って

いい。決めるなら一瞬……)

頭から血を流し、肩口に深い切り傷を残したまま、折れた木によりかかってなんとか立ち上がるネッコ。やはり魔力が上手く練れず、回復魔法を唱えている暇は無い。

(油断させて誘い込んだところを一気にやるっきゃないか……)

ネッコはそう決意する。

ボロボロのネッコの様子を見て、アルアルパZZは力なく笑った。

「……もうダウンか？ 威勢の割には随分と呆気ない」

「ふん、僕は……げほん、げほん、げほん！」

何かを言い返そうとしたネッコだが、途端にまたむせ返る。

「げほん、げほん、げほん……ちっ！」

ネッコは一瞬苛立たしげなため息をついて、諦めた顔つきでその場にどかっと胡座をかいた。ぼさぼさに乱れた髪から額を伝って流れる血を拭うことすらせず、じっとアルアルパZZを睨みつける。

「ふん、畜生！ 運が良かったな、どういう訳か今日はちっとも調子が出ない。これじゃもう何やったって無理だ。殺すならさっさと殺せ！」

「……」

アルアルパZZは訝しげな顔つきでネッコの顔を睨む。

「こんな擦り傷も治療できないんだ。俺に何が出来るっていうんだよ。野ウサギちゃんみたい

に逃げろってのか？ どうせ逃がしちゃうれないだろうし……げほん、げほん！……さ、一思いにやってくれよ！ただ、やるなら狙いを誤らんでくれよ」

アルアルパッツはしばらくネッコの目から視線を外さなかったが、彼の体内に本当に健康な魔力の循環らしいものを感じ得ないと分かると、口元に軽く嘲笑を湛えて足を出した。

「……ふん。思ったより詰まらん奴だ。では望みどおりにしてやる！」

今度はゆっくり追い詰めるようなことはせず、アルアルパッツは悠然とした歩調でネッコの元へ近づく。

ネッコは魔石を握りしめる掌に、じつとりと汗の感触を感じた。これでダメなら本当にダメだ……でも、こんな一握りの石ころ程度の魔石で、果たして十三使徒にどれほどのダメージが与えられるというのだろうか？ ネッコは拭いきれない不安をなんとか押し退けようとするが、アルアルパッツの姿が近づいてくるその毎歩ごとに不安は倍化して、恐怖にまで至り、遂には震えを起こす。

（上手くいきますように、上手くいきますように、上手くいきますように……！）

友人のそんな姿を見たアリスは、もう居ても立っても居られなかった。

「ネッコ・ヴァンシユタイン！」

アリスが戦いの場に飛び出そうとしたのを予感して、メンフィスが強引に彼女の腕を掴む。

「いけません、お嬢様！」 そんな言葉が聞こえたかどうか、何かを必死に叫んだメンフィスの腕を思いっきり振り払い、アリスは今度こそ駆け出す。アリスはネッコに近づきつつあるアル

アルパッツの腰に思いつき飛びつくと、そのまま逆タツクルの形でアルアルパッツを突き倒した。どさっ、という音と共に、折り重なって地面に倒れこむ二人。

「ネッコ、逃げて！」

アリスの突発的な行動に、ネッコは驚き、慌てて肩膝を立てた。

「よせ、アリス！」

「逃げなきゃダメ！」

「お嬢様！」

ふと、アルアルパッツの掌がアリスの眼前に現れる。

途端に遮られる視界。

指と指の間から、憤怒にかられるアルアルパッツの顔が見える。

アリスの背中にぞっとするものが走った。

「あ、アルアルパッツ様！どうか、話を……」

「アリ……」

言葉が早いのか、炎が早いのか。その場にいたアルアルパッツ以外の三人が何かを叫ぼうとしたその瞬間、魔界の大木ですら軽々と弾けとばす火炎弾が、アリスの顔面で吹き荒れた。

ぽかん、と口を開けるネッコとメンフィスの二人。

健康的な柔肌を溶かし、その下の肉を爆ぜさせ、顔面を真っ赤な化粧に彩ったアリスの体は、叫び声もなく、ばたん、と横たわった。綺麗に結んだお下げをばら撒いて、まるでポロ箒

のような姿で転がると、アリスはうつ伏せになったまま微動だにしなくなった。そのあまりの呆気なさに、ネッコは、メンフィスは、まるで時間がカチカチに固まったような錯覚を覚えた。

「お……お嬢……さま」

メンフィスがふらふらとアリスに近づく。

「ふん。人間になったとは言え、父ガリバーのことを思えば命ぐらいは助けてやってもよかつたが……邪魔するなら焼き殺すまでだ」

アリスを抱き起こそうとしているメンフィスの背中を見ながら、アルアルパッツはそう言った。その言葉には感情など籠っておらず、ただ自分が起こした行動と理由を説明しただけの、とても無機質なものだった。

アリスが邪魔をした、だから殺した。

原因、作用、結果。

「ちっ！」

そんな無感情な言葉がネッコの脳裏を掠めると、彼はまた舌打ちをした。

不意に煮えたぎっていく感情と、そして魔力。

カチカチに固まっていた時が、熱い血流に溶かされていく感じがする。

真っ暗闇の魔界の森林に、淡いグリーンの輝きが集まり、見る見るうちにネッコの体中の傷が癒えていく。アリスの死をスイッチに、不可解に散漫だった彼の魔力がようやく集中されはじめたのだった。

『全ての感情が、命と言う発動機にかけられて生まれ出るエナジー……それが魔力！』

いつかのアムリタの言葉を思い出す。

感情か。

別段、義理を感じていたわけじゃない。

魔族を好きになつたわけでもない。

ネッコという個人。

アリスという個人。

個人が個人に対して持つ感情というのは、魔族や人間と言つた垣根を優に飛び越え、心を揺るがし、魂を揺さぶる。

その先にあるのが共存という名の理想だと言うのなら……

（その先にあるのが共存という名の理想だと言うのなら、アリス！お前の言つてたことも、僕は少しぐらい分かつてやらんでもないぞ！）

「アルアルパッツ！」

ネッコは悠然と立ち上がった。さっきまでの不安や恐怖は、怒りという名の更なる高波に覆い隠され、見出すことが出来ない。

敵はネッコの姿を見るなり、戦闘という名の美酒が彼の眼前に差し出されたことを知ると、狂気さえ思わせる破顔に表情を崩す。

睨み合う二人。

沈黙と殺意の間を一陣の風が走る。

二人の魔法使いの間に相容れない魔力の陽炎が渦巻き、

その傍らでアリスを抱きかかえながら背中を振るわせるメンフィス。

もう一度風が吹いて、ざわざわざわと枝葉が囁く。

ちぎれかけた枝が振り子のように揺られ、そしてぷつりと切れた。

——サンダルク市内。

「だからさ、私は言っちゃったんだよ。アンタ、それでも男なのかい！？ ってね」

サンダルク市五番街にある上水路を跨いだ石橋の向こうに、町で一番大きな教会がある。その前で、ナターシアは数人の同年代の友人たちと立ち話に夢中になっていた。使いの途中の下女にとって、まずあるまじき行為である。

ネッコはともかく、リジョに対しては比較的従順な下女であるナターシアだったが、いくら注意を促されようともこの悪癖だけは止めようとしなかった。と言っても彼女も全く意に介さないのではなく、リジョやリタに叱られている最中は確かに反省し、事態の改善を心がけようと努力するのだが、その決意も一日、二日と経つにつれ穿き古したパンツのゴムのように緩んでしまい、三日目、四日目には、気が付けば日が暮れるまで話し込んでしまっているのが常である。今ではリジョもそれほど口喧しく言わない。諦めているし、自分が思うよりもっと重

大な何か、彼女と彼女の友人たちとの間に交わされる会話の間に潜んでいるのではないかと、ナターシアの熱心振りをみてそう思うのだった。真相はさておき、ナターシアにとってはもちろん都合なことであった。

そんなわけでナターシアは、今日も西日が茜色に染まっていることに気づいてか気づかずか、延々と友人達の前で己が熱弁を振るっているのであった。

「もしたらあのバカ旦那、すぐすぐ自分の部屋に戻ったかと思ったら、また訳の分からないこと抜かして家を飛び出して……あの二、三日はホントに気がどうかしちやったのかと疑ったわ！もちろん、今でも十分オカシな人だけど」

けたけた、という数人の少女たちの笑い声が、教会の前で起こる。

「そういえばさナターシア、アルフォンソ君とはどうしてるの？」

黒髪のお下げの少女がナターシアに訊ねた。

「あの小説バカがどうかしたのかい？」

「どうもこうも、付き合ってるんでしょ？あなたたち。なんでも毎日のようにアルフォンソ君がヴァンシユタイン家に向くのは、ナターシアに会いに行くからどうとか」

きよとん、とした顔のナターシア。

「はあ？……ナニ？あのね……そんなわけないでしょ？アルフォンソはウチに来ると決まって旦那様と難しい顔をして詰まんない話ばかりして、ほっときやニワトリが鳴くまでごちやごちややってるわよ」

「へえー。それじゃあの噂はやっぱりウソなのかしら」

ブロンドのシヨートカットの少女が言った。

「噂ってなにさ」

ナターシアが不思議そうな顔をする。

「アルフォンソ君はナターシアのことが好きなんでしょ？」

シヨートカットの少女の言葉に、ナターシアは一瞬、ぼかん、と口をあけて反応しなかったが、突然堰を切ったように笑い出すと、腹を抱えて苦しそうによろよろと橋の方へよろめいて、倒れこむように手すりにもたれかかり、危うく上水路に落ちそうになった。慌てて駆け寄った少女達に引つ張り戻されたが、それでもなお彼女の笑い声は止まらなかった。道行く人々や教会から出てきた人々の奇異な視線がナターシアに注がれる。

「ひー、ひー……どっから出てきたのよそのガセネタ！あんまり笑わせないでっば……いい？あいつはね、あの男はね、肉の付いた普通の生娘よりも、何とかって言う小説に出てくる空想の美女が好きな男なんだから！まあ、それでも魔法にしか興味がないネッコみたいな奴よりはマシかもしれないけど、かしなんだね、ひひひ、誰が考えたんだかそんな大ボラ！」

まだ笑いが収まらないナターシアは意地の悪そうな目の端に涙すら浮かべていた。

「でもさ……」

シヨートカットの少女が何かを言いかけたその時、教会の中から一人の青年がひょっこりと現れたことに、少女たちは気がつかなかった。

「よっ。みんな揃って楽しそうだな。なんかいい事でもあったかい？」

そこに現れたのは、かのアルフォンソ本人である。片手に数冊の本を抱え込んでいるところを見ると、古本屋の帰りに教会によったものと見える。

あまりのタイミングの良さに、少女達は気まずい顔をする。ただナターシアだけはニヤニヤと表情を崩したままだ。

「ひっひっひ。アルフォンソ、聞いてくれ。私あアンタの恋人なんだってさ」

「え？」

「アンタがね、私のことを好いてるもんだから毎日ヴァンシュタイン家に通っているって、この子達がさも真剣にそう言うもんだから、私あ可笑しくってさ……くくく」

「どうなの？アルフォンソ君」

おさげの少女が興味に目を爛々と輝かせて、アルフォンソに訊ねた。あんまりナターシアが気兼ねなくアルフォンソに打ち明けるものだから、他の少女たちの顔つきからも気まずさは損なわれ、興味に目を輝かせていた。

臆する様子も無くアルフォンソは答える。

「俺がヴァンシュタイン家に通っているのは、リジヨ先生に学ぶことがあるからさ」
ほれみなさいな、とナターシアは少女達に言う。

少女達は次々にアルフォンソに訊ねる。

「じゃあアルフォンソ君は誰のことが好きなの？」

「この中にいたりして！」

「やっぱりあの一番街のお嬢様？」

「あ、私、あそこの八百屋の娘と仲が良いの知ってる」

アルフォンソは答える。

「八百屋？ああ、マリーかい？あの子は確かに気立てのいい子だけだね。今年新兵に志願したクレイヴとか言う奴と付き合ってるんじゃないかな？え、残念かって？俺が？んー、さあね！あえてコメントは控えさせてもらうよ、へへへ。ところで、一番街のお嬢様って言うと、あのジョゼフィーヌとか言うくるくる巻き毛の女の子だろ？ここだけの話、悪いけど、俺はああいう手合いは好きじゃないんだな。高飛車で、話してるとどうもやり切れない気持ちになってくるよ。なんて言っちゃって、あの子が好きなのは自分自身だからね！あ、くれぐれもここだけの話だから……って、ん？」

一人の少女が教会の方を見てぼんやりしているのにアルフォンソが気が付くと、彼はつられて後ろを振り返った。そこには、教会から出てきたばかりであろう一人の老神父と少女の姿があった。神父は歳の割には厳めしい顔つきの、いかにも生真面目そうな信徒だったが、アルフォンソはむしろその隣にいる少女に注意を引かれた。

少女はあまり裕福そうな出で立ちをしておらず、亜麻色の三つ編みがその素朴さを際立たせていたが、自分の命より大事そうに抱える聖書と言い、眼鏡の向こうに潜むどこか浮世離れした二つの眼と言い、相当に熱狂的なイーリアス教信者であることが伺える。アルフォンソはそ

の鋭い輝きを持つ瞳に、ゾクゾクと皮膚の粟立ちを感じた。

神父と少女は何事かを熱心に話しながら、段々と橋の方へ近づいてくる。まるでナターシアたちには気づかぬようだ。

「こんばんわ！カルヴァーン先生。それにジャンヌ」

二人の教徒が自分たちの前を通ろうとした時、ナターシアから声をかける。

「おや、こんばんわナターシア。それに皆さん」

カルヴァーンはいささか無表情ではあるが、気の優しそうな声で挨拶を返した。隣のジャンヌという少女は挨拶を返さず、口元に笑みを浮かべ、くりくりと瞳を開いてナターシアを見返しただけである。傍から見ていると白痴にすら見間違われそうな態度だったが、その瞳には列記とした知性が宿っている。夕日に染まって橙色に輝く彼女の瞳は、一層不気味であった。

こんばんわ、と少女たちが神父に挨拶を返す。

アルフォンソはカルヴァーンとジャンヌの顔を興味深げに交互に見つめていた。

「立ち話も結構だが、そろそろお帰りなさい。とうに日は暮れ始めていますよ」

やはり優しいカルヴァーンの言葉。

はい、と返事を返す少女たち。

別れの挨拶を交わすと、カルヴァーンとジャンヌは少女たちの脇を通って橋を渡り、直ぐに何事かを熱心に話し始めた。その様子は少女たちに挨拶をしたときの溫柔な態度とは程遠い、まさしく熱狂的な信者同士の意見交換、あるいは討論と呼んでも差し支えの無いものにさえ見

える。

二人が過ぎ去ってもアルフォンソはその後ろ姿をじっと見つめていた。

「……あの人が有名なあのカルヴァーン？」

アルフォンソは誰ともなく訊ねる。

「どのカルヴァーンさ」

「神学者カルヴァーンって言うと、今サンダルークで密かに盛り上がってるカルヴァーン派を打ち出した有名人さ。知らないのか？」

知らない、とナターシアは言った。おさげの少女が代わりに答える。

「『神絶対中心主義』のでしょ？」

「そう。全ての物事は神の予定調和によって既に決められていて、神の救済に与る（あずかる）者と、滅びに至る者が予め決められている。って言うね。ちっぽけな善行や寄進ぐらいで神の意思をどうこうすることは出来ないんだと」

「それじゃ、イーリアス教なんていらんないじゃないのさ」

「ところがどっこい、カルヴァーン派は自分たちの宗派に属する者たちこそ、さつき述べた神の救済に与る者たちであって、それ以外の信仰心の無い輩、古い宗派に捕われたままの輩までもが皆、滅びに至る者たちであると言いつちやってるんだ。言い換えれば、カルヴァーン派に属している、ということが、救済を与る者である証になるんだな」

「なにそれ。神様使った脅しじゃない」

「だが信憑性はある。特に神の前じゃ人はとことん無力だつてのは、いかにもそれらしいしね。こう魔族や他国との戦争ばかりだと、神様にも縋りたくなくなるってもんさ。しかし、カルヴァーンと一緒に居たあのジャンヌって子も、カルヴァーン派の信者なのかな……変な子だったな」

アルフォンソは、あのジャンヌという少女の、明らかに狂信の境界に足を踏み入れた瞳の輝きを思い出して、思わず身震いを感じた。危ういまでの純真さと、妙に惹きつけられる毒々しいなにか……

「アルフォンソ君はジャンヌみたいな子が好きなの？」

少女の一人がそう言うと、がっくりと肩を落とすアルフォンソは、なにかエサを持って山羊の集団に囲まれているような気分だった。しつこく狙われ放してもらえない。

「またそれか……まったく、何が楽しいんだか！」

アルフォンソの嘆き声に、少女たちはクスクス笑う。

「ふん。ま、隠したって無駄だけどね。あんたが誰のことを好きかぐらい、私は分かってるんだから」

ナターシアがそう言うと、全員の視線が彼女に注がれる。

その中でも、今までの余裕はどこへやら、突然に凍りついたアルフォンソの表情は見ものだったであろう。ナターシアは我知らずとニヤつくのを抑えきれなかった。

「……それは、本気で言ってるのか？」

アルフォンソが言う。

「もちろん！あんたが好きなのはマリーでもジョゼフィーヌでも、もちろんジャンヌなんかでもない」

「……」

「もちろん私でもない。ひひひ」

ナターシアの思い出し笑い。

アルフォンソの顔つきが強張る。

「……」

「あんたが好きなのはね、ずばり、なんとかって小説の……リ、リ、リンダ……」

途端に、呆れ顔になったアルフォンソ。大きなため息をつく。

「……月の処刑台^{レキザン}のリディア・フリクシンかい」

「そうそう。それよそれ。だってさ、あんたとネツコだけは生の人間を愛することなんて無いもんね」

けたけた、と、また笑い声が橋の上に響いた。

アルフォンソは顔を真っ赤にして叫んだ。

「ああ、そうさ、そうだと。ハン！リディアは君なんかには比べるとつても魅力的だよナターシア。それがなんだってんだ。お前達だってイーリアス教の信者だろ？神への絶対の愛を誓うのは良くて、小説の中の下女を愛するのはいけないのか？ええ！？どっちも人の頭ん中の空想じゃないか！ええ！？」

笑い声が黄色い悲鳴に変わる。少女たちは口々にアルフォンソに批難を浴びせつつも、決して嫌がっている様子は無い。冗談と本気のギリギリの境界線で、見事に少女達を楽しませてみせるアルフォンソ。――彼はこういうことに關してはたまに天才的なセンスを見せる。あるいは、そんな暴言が許される彼の人格の成せる業あろうか。

「とにかく、これから俺はリジヨ先生のところへ行くんだ。いつまでも立ち話なんてしてないで、さっさと帰るんだぞ。な、ナターシア。今日にもお前の敬愛する若旦那が帰ってるかもしれないぜ？へっへっへ」

敬愛する若旦那（ネッコ）、という言葉聞いて、ナターシアが一瞬まごついたのを、アルフォンソは見逃さなかった。が、彼の方はさもなんでも無さそうに少女達に別れを告げ、踵を返して橋を渡ってしまふ。

「だ、だ、誰があんなバカを敬愛するもんですか！あんなこそタダ飯ばかり当てにしてないで真っ直ぐウチに帰んなさい！バーカ！アホ！」

ナターシアの言葉にアルフォンソは、振り向かないで片手を挙げただけだった。余裕を見せる仕草とは裏腹に、彼の胸中には落胆が嵐のように渦巻いている。

（だ、だ、誰があんなバカを敬愛するもんですか！だ、だ、だ。君はどうしてそんなにウソをつくのがヘタクソなんだ、畜生！お前の本心は、例え他の誰かにバラしたとしても……頼むから俺にだけはバラさないでくれよ！リディア・フリクシン？バカな奴！あんなナターシア。あれはな、リディアはな、ほかでもない、お前にまるつきりそっくりなんだぜ！）

かつん、と石ころを蹴飛ばすアルフォンソ。石ころはコロコロと転がって、道行く馬車の大きな車輪にぶつかった。御者がむっとした顔をアルフォンソに向けた。

（ネツコ、お前はどこで何をしてるんだ？ さっさと帰ってきてやりな。でなきや……でなきや俺は、何の踏ん切りもつかないまんまだろ、馬鹿野郎！）

魔界の中心にそびえ建つ巨大な王城——魔王城。かつて魔王モートの居城として造られた、おそらく人類史上もつとも偉大な建築物であるこの城も、長い年月と幾多の戦乱によつて傷付き、そして今は王が不在の居城であつた。

その玉座の間、本来ならこの城の主人が座るべきその玉座に、モードレッドは悠然と座り、その灰色の瞳で、手に持った手紙をじつと見つめていた。セリーンの使い間が運んできた手紙だつた。

玉座の間に、一人の男が入ってきて、恭しくモードレッドに頭を下げた。

「サルトか……」

モードレッドが呟いた。暗く沈んだ声だ。

「……いかがなされました？モードレッド様」

モードレッドの声に、何か普段とは違うものを感じたサルトが、言う。

「——セリーンが死んだ。付けておいたラモラックの奴もな……」

「セリーン様とラモラック殿が？まさか！」

サルトが声を上げる。

ありえない。

セリーンがモードレッドの命を受けて、人間界で工作を行なっていた事は、サルトも知っている。四魔侯のラモラックがセリーンの片腕として一緒に行動していた事も。

ラモラックは魔界でも屈指の強さを持つ魔族だ。いや、魔王モートが生まれ、魔族という新たな人種がこの世に生み出される遥か以前から、ラモラックは優れた戦士だった。サルトが知るかぎり、魔族も含めた全ての生物の中で最も古く強力な戦士だ。

そのラモラックも一時はモートの軍門に降り、魔族として転生する事となった。だが、彼は強さだけを求め、モート政権にほとんど参加することはなかった。十三使徒就任の要請も断り、そのまま消息を絶ち、六百年もの間生きているのか死んでいるかさえわからなかったラモラックの存在は、魔族の中でも一種の伝説にまでなっていたほどだ。

そのラモラックが死んだ。それも人間界の戦乱で。

モードレッドにとっても予想外の痛手であっただろう。彼に敵対する最大の敵は、十三使徒トウオンとメラアガンスだ。この二人の最強クラスの魔族にぶつけるために、四魔侯は組織された。しかし、その肝心の戦いも始まらぬ間に、四魔侯のうち、すでにラモラックとヘカテの両名を失い、そしてまた彼の片腕であった副官のセリーンまで失う事になったのだから。

さぞ落胆しているであろうと思い、サルトは窺うようにモードレッドに目をやる。しかし、サルトの予想に反し、モードレッドは暗い笑みを浮かべたかと思うと、大声で笑い出した。

「……フハハハ。セリーンめ、何をとち狂ったのか、エレインには気を付けろと書いてある。あんな人間の小娘を——死ぬ間際の狂言としか思えんな」

「しかし、セリーン様の策略が破られ、あのラモラック殿が倒されたとなれば……エレインとかいう者、けっして侮れぬのでは」

サルトが言う。

「ふん。セリーンの鬼謀はわたしも認めるところだが、智あるものほど己の知に溺れると言う。セリーンもその程度の女だったということだ。知だけに頼って、力を伴わん——まして、ラモラックやヘカテなど蛮勇の徒に過ぎん。所詮、わたしの覇業についてくることのできる器ではなかったのだ」

モードレッドが笑う。サルトは怪訝な様子で、モードレッドを見つめた。

「しかし、四魔候の内、すでに二人を失った事は大きな損失ではないかと……」

「案ずるな。すでにヘカテの代わりは見つけてある——人間だが、馬鹿にできぬほどの素質を秘めた者をな——」

「人間ですか……」

「——それに、四魔候の四などという数字はただの飾り。本来なら、あの男一人で十分事は足りるのだ」

「あの男？」

「——そうだ。その男なら、間違いなくトゥオンもメレアガンスも殺せる。二人まとめてな。」

もちろん、エレインとかいう小娘など問題にならん。正真正銘、わたしの最後の切り札だよ」

モードレッドが笑う。

そんな男の事など、サルトは知らない。四魔候最後の一人だろうか。

「――まだ心配しているようだな。何を心配する事があるのだ？ トウオンとメラアガンスの力は想定内。エレインが仮にわたしの予想を超える――ありえないが、あのアトロと同等の力を持っていたとしても、今のわたしはかつてのモートに匹敵する力がある――トウオンとメラアガンスはわたしの切り札で十分片付けられるし、エレインはわたしがこの手で殺そう。どうだ？ まだジョルジュの奴もヘカテの代わりも余っている。それでもまだ心配か？」

その自信に満ちた笑みに、サルトも安心したように笑う。

「陛下の御神謀は臣の及ぶところではございません」

深々と頭を下げたサルトに、モードレッドは満足気に頷く。

「――それで、探し出すように申し付けておいたレイナという吸血鬼の事だが、見つかったか？」

「はい。この城まで連れて来ております。しかし、今さらなぜ、あのような者をお呼びに？」

「レイナとかいう吸血鬼、ポールの副官だったというではないか。実力もそれ相応のものをもっているはず。何よりポールの――いや、何でもない。とにかく、使えるものは使っておかんと――敵はトウオン達やそのエレインとやらだけではいけないのだ――」

「はあ？」

わからないと、サルトの様子。トゥオン勢と人間の他にどんな敵がいるというのだ。

「――よい。そのレイナとやらをつれて来い」

「はっ」

モードレッドの言葉に、サルトは一礼して、下がっていった。

一人、部屋に残ったモードレッド。手にあるセリーンの手紙を一瞥したかと思うと、手のひらから青白い炎が上がり、手紙はモードレッドの手の上で黒い炭へと変わっていった。

「――エレインか……それにジョルジュの奴では今のネヴィーナは仕留め切れまい。ようやく役者が揃ってきた。――さて、クロートーよ、手のひらの上で踊らされているのは俺かおまえのどちらかな」

ポールスが低く笑った。

レオデグランスの内乱は終結した。

大将を失ったリスラン派には、これ以上抗戦する力も理由も無く、あっけないほど簡単にエレインに降伏を申し出た。

エレインは敵対した十二大貴族の現当主達を死刑に処し、代わりの新しい当主を立てる事に条件に、この降伏を受け入れた。

こうして、戦いは終わった。

しかし、ただ一つ、エレイン派の首脳陣には気掛かりな事があった。今回の内乱の首謀者の一人、オクト・バルリットの行方が知れないのだ。エレインは部下達に命じ、レオデグランスの町という町を厳しく搜索させたが、何故かまったく見つからなかった。先の戦場で雑兵まぎれて死んだのではという噂がキャメロン宮中には流れたが、エレインは搜索の手を緩めることなく、オクトの首に多額の懸賞金まで掛けた。

エステルはキャメロンの宮中を走り回っていた。
まったく、大忙しだ。

戦いが終結し、エレインが正式にレオデグランスの王位継承者と決まった。国は一日たりとも主人を不在にするべきではないとのエレインの言葉に、大急ぎでエレインの戴冠式を執り行う事が決まったのだ。本来ならば半年はかけて準備するこの一大式典を、僅か二週間で準備しろというのだから無茶を言ってくれるものだ、と、エステルはため息をついた。各国の貴族に送る招待状だけでも数千枚に達するのだ。祐筆の者達は総動員で徹夜で手紙を書いているが、それでも追いつかない。

他にも、各地の珍味は取り寄せなければならぬし、エレインの頭にあう新しい王冠は新調しなければならぬし……宮中の女官達の指揮を取っているエステルは、休んでいる暇どころか、まともに眠る暇もない。

「エステルさん、あの……」

若い女中が、走っているエステルに声を掛けた。若いといっても、エステルも同い年ぐらいだが。

「なんででしょうか？」

エステルが立ち止まって、聞く。

「姫様が戴冠式でお召しになるドレスの事なんです……」

「それがどうしたんです？レオデグランス一って言われてる職人に、もう発注したんじゃないか？」

もう数日前に注文したはずだ。それでも、当日までに間に合うかどうか……。

「あの……それが……あちらから、素材となる『エルフの白布』がどうしても手に入らないと……」

「はあ？」

『エルフの白布』とは、精霊の森にだけ生える希少植物の繊維を、エルフ族が手織りした反物だ。非常に貴重な品で、各国の王家の者でも手に入れる事は難しい。その反物一つで、小さな城一つ買えるほどだ。

しかし、この土壇場に来て、無いとは……。

「……あの……あちらは、サンダルク産の魔法合成繊維ではどうかと……最近魔法技術の進歩で、見た目も手触りも純正の『エルフの白布』とほとんど変わりが無いそうですから……」

……

「駄目に決まっています！レオデグランスの女王は、戴冠式にその素材を使ったドレスを着ると代々決まっています。幾ら掛かってもいいから、何としても手に入れてください！」

エステルがきつく言う。若い女中は泣き出しそうな顔になった。

「……でも、今から探して、間に合うでしょうか……？」

女中が沈んだ声で言う。

そう、それなんだ。いくら希少な物といっても、手に入れる事事態はそう難しい事ではない。問題は、時間が無いという事だ。

エステルは頭を抱え込んだ。

ああ、どうすればいいの？

「あれ？エステルちゃん、なに悩んでるの？」

声が出たので、顔を上げてみれば、目の前にナナがいた。周りのみんなは忙しく働いているのに、ナナだけははたきを持って、のんびりとした動作で、廊下の美術品をポンポンと叩いて埃を払っている。やけにのん気だ。

「……ナナさん。廊下の掃除なんて後でいいでしょう。他にやる事が山ほどあるんですから……」

エステルが言った。

「そうは言ってもねえ……これがわたしの仕事であり、日課ですから」

ナナが笑って、はたきを振る。

本当にマイペースな人だ。

「それより、どうしたんです？なにか問題でも？」

ナナが若い女中に聞く。

「……それが、『エルフの白布』が手に入らなくて……」

「ああ、そんな事ですか」

ナナは簡単に言った。

「そんな事って……」

「簡単ですよ。ほら、今、この城にエルフの人が滞在しているじゃないですか。ええっと、な

んて名前でしたっけ……？」

「エリック様の事ですか？」

エステルが言う。

「ああ、そう、そのエリックさん。あの人、エルフ族の中ではかなりの有名人なんですよ。英雄って呼ばれるくらいに。たぶんエルフの偉いさん達にも、かなり顔は聞くはずですよ。彼に頼めば、布の一枚や二枚ぐらい、すぐに手に入れてくれますよ」

ナナの言葉に、若い女中の表情はぱっと明るくなった。

「すぐに、お願いしてみます」

若い女中はそう言って、全力で走り去っていった。

「さすがナナさん。よく頭が働きますね」

エステルが言った。

「そう？——しかし、別にドレスなんてどうでもいい事なのに——よくあんなに一生懸命になれるわね」

「どうでもいい事じゃないですよ……」

「別にわざわざ新調しなくたって、『エルフの白布』製のドレスの二、三枚ぐらい、エレイン様はもう持つてるじゃない」

「大事な戴冠式に、お古を使うわけにはいきませんよ」

「そういうもんですかねえ」

そう言つてまた、はたきをパタパタと叩くナナ。

「ナナさん。そんな事しないで、少しは手伝ってください。わたし、今から式場の設営の指揮を取らなきゃいけないです」

「へえー、それは大変……」

「人事みたいに言わないでください。城の者は一人残らず、忙しく働いているんですから。みんな、寝る暇もないんですよ」

「はいはい、わかりました。手伝いますよ」

しぶしぶながら、ようやくはたきを放り出して、同意するナナ。

二人は式場となる城の大広間に向かって走り出した。

ところが、二人はすぐに足を止めた。

エレインの私室の前。

中から、激しい言い争いの声が聞こえてきたのだ。

一人はエレインの声。もう一つはライオネルの声だ。

「――ケンカでしょうか？」

「みたいねえ……あのお二方、最近多いわね……何かあったのかしら……まあ、放っておけばいいでしょ――」

ナナがそう言った時、部屋の中で陶器が碎ける音がした。相当、もめているらしい。

「――と、言いたいところだけど、放っておける様子でもなさそうね」

ノックもせず、エレインの部屋のドアを開けるナナ。エステルも続いて中に入った。

部屋の中には、肩を怒らせて立つエレインと、真顔のライオネルが向き合って立っていた。ライオネルの額からは血が流れ、足元には、碎けた陶器の皿の破片が散らばっていた。部屋に飾ってあった美術品を、エレインがライオネルに向かって投げつけたらしい。

鬼のような形相で、ライオネルを睨みつけるエレイン。

「もう一度言ってみなさい！ライオネル！」

「何度でも言いましょう。今のあなた様は、気が狂われたとしか思えません――王位に就かれる事で浮かれているのか。それとも他に理由があるのか――どちらにしても、わたしは育て方を間違えたようだ。地下にいらっしやる国王陛下も、さぞ嘆き悲しんでおられるだろう」

額から流れる血も拭わず、冷静に言い放つライオネル。

エレインの表情が、さっと青ざめた。辺りの空気が凍りつく。

次の瞬間、エレインは聖剣の柄を掴み、ライオネルに向かって、一歩、踏み出していった。ライオネルは微動だにしない。

とっさに、ナナとエステルが二人の間に割って入らなければ、エレインは本当にライオネルを斬り殺していたかもしれない。そう思えるほどの、エレインの殺気だった。

「いけませんねえ——姫様もおふざけが過ぎますよ。本気で斬るつもりではないにしろ、たかがケンカで剣を抜くなんて」

ナナが笑顔で、エレインに向かって言う。エステルは真顔でエレインを見つめている。

エレインは怒りに満ちた瞳で、ナナを睨んだ。

「……邪魔するなら、あなた達も殺すわよ」

「またまたあ、御冗談を——わたし達二人はともかく、ライオネル様は先代以来の御功臣。まして、教育係として、姫様も実の兄のように慕われたお方——それを一時のお怒りで、殺してしまうおつもりで？」

ナナが笑顔のまま、言う。

ライオネルは黙ったままだ。

エステルは、万が一のために備えて、身を固く構えている。

三人の瞳に見つめられて、エレインはゆっくりと剣を鞘に収めた。だが、その瞳はライオネルを睨みつけたままだ。

「さすがは姫様。御堪忍こそ、王たるものの最も大事な資質です」

ナナが深々と頭を下げた。

「さあ、姫様も一歩譲られたのですから、ライオネル様も姫様に謝ってください」

「——でんな」

ナナに、ライオネルがぶつきらぼうに言い放った。ナナの表情が、笑顔のまま引きつる。せっかくナナがうまく収めようとしたのに、ライオネルの強情にも困ったものだ。

ライオネルの言葉に、剣を抜きこそしなかったが、エレインの瞳に再び怒りの色が浮ぶ。

「——あくまでも、わたしに逆らうつもりね」

「エレイン様の個人的な執念のために、大勢の国民を死なせるわけにはいきません」

「そう——わたしの命令が聞けないというのなら、あなたは必要ありません。この城から出て行きなさい。いや、あなたに国外追放を命じます——二度と、わたしの前に顔を見せないで」

「そうさせて貰いましょう。長らく、お世話になりました」

ライオネルは短くそう言うと、表情も変えず、静かに部屋を出て行った。

「ちよっと、ライオネル様！——エレイン様、本気ですか！ライオネル様が行ってしまいます

よー！」

エステルが慌てたように、エレインに向かって言う。

エレインは答えない。

エステルは助けを求めるように、ナナを見た。だが、ナナはどうしようもないといったよう

に、首を横に振った。

「わたし、ライオネル様をお止めしてきます」

エステルは非難するようにエレインを見ると、急いで部屋を出ていった。

エレインとナナだけが部屋に残った。

エレインは一言も発しない。ただじっと、ライオネルの出て行った部屋の扉を見つめている。

ナナは疲れたようにため息をつくとき、部屋のソファに腰掛けた。

「――それで、どうしてケンカになったんです？」

ナナが聞いた。

エレインは黙ったまま、机の上に置いてあった筒を取ると、ナナに投げてよこした。

ナナが筒を開けると、そこには一枚の羊皮紙、手紙があった。その手紙に眼を通したナナの

表情が強張る。

これは――。

「――本気ですか？」

エレインは答えない。

ナナがもう一度、その手紙を見る。その内容は激烈な文章を用いた、魔族の王に対する宣戦

布告だった。

ライオネルは自室に戻ると、荷造りを始めた。荷造りといっても簡単なものだ。簡素な生活のライオネルの所有品など、数えるほどしかない。

必要最低限のものだけ揃えると、ライオネルは部屋を出た。

二十年近く過ごしたこのキャメロン城を、立ち去るために、ライオネルはゆっくりと歩いていく。長い廊下に敷かれた赤い絨毯。永延と連なる石柱。中庭に建てられた、歴代王の石像。どれもライオネルには見慣れたものだ。ライオネルの表情は変わらない。だが、その心中は如何なるものだろう。

城の巨大な城門まで来た時、ライオネルは立ち止まった。

城門の前に、ティグレインが立っていたからだ。

「……どうして、ここに？」

ライオネルが言った。

「エステルが、あなたを止めてくれと」

「そうか」

「本当に行ってしまうのですか？」

「……」

「レディ・エレインが心配ではないのですか？ 彼女はまだ十七歳の少女。そして、この国の女王になったばかり。側に頼れる臣下は数えるほどしかおらず、まだまだ内外に敵も多い。本当にあなたの力が必要なのは、これからだというのに――」

「……前にも言ったが、あの方はもうお一人で大丈夫だ。わたしの力など無くても、立派にやっつけていける。きっと、偉大な女王として歴史に名を残すだろう——レディ・ティグレイン、あなたが側で支えてあげてくれ」

ライオネルの言葉に、ティグレインは首を横に振った。

「わたくしでは駄目なのです。いや、他の誰であろうと——彼女を支える事のできる者は、ライオネル様、あなただけなのです。ライオネル様も気付いていらっしやるはず。近頃の彼女はどこかおかしい。以前のレディ・エレインとはまるで別人のよう——無理もないことです。あの小さな肩に、この国の、いや世界の命運がのしかかっているのですから——」

ティグレインが心配そうに言った。彼女の目から見ても、ここ最近のエレインは普通じゃなかった。まるで、見えない何かに急かされているかのよう——。

「——世界は混乱して、この国も蚊帳の外ではいられない。いや、このレオデグラランスの動向が、世界の情勢を大きく左右するでしょう——いくら強くても、彼女はまだ子供です。とてもこの責務に、一人で耐えることはできません」

「あの方がご自分で選ばれた道だ——そして、あの方なら、きっとうまくやるだろう」

「しかし——」

「これ以上何を話しても無駄なこと——もう、決めた事だ」

ライオネルはそれだけ言うと、黙って歩き出した。その背中を見つめるティグレイン。

「またあなたは、わたしを置いていってしまうのですね——でも今度は——もう二度と、会え

ないのでしょうか？」

ティグレインの言葉。ライオネルは答えない。

側を通り過ぎ、振り返る事も無く歩いて行ってしまふライオネルに、ティグレインはもう何も言う事ができなかった。

ただ瞳に涙を湛え、じっと俯いていた。

「——無理です。我が国は内戦を終えたばかり。まして、姫様はまだ王位にすら就かれていないというのに——そのような不安定な政権状態で魔王軍相手に戦争を仕掛けるなど——」

ナナが目の前のエレインに向かって言う。

ライオネルが意地になつてでも反対するはずだ——エレインの魔界侵攻論はどう考えても正気じゃない。こんな無謀な戦争に突入すれば、間違いなくレオデグランスは滅びる——いや、それだけじゃない。人間界最大の国家であるレオデグランスの滅亡は、そのまま、この三百年間、ぎりぎりのところで保たれてきた人間と魔族の間の勢力バランスの崩壊を意味する——そうなれば人間に勝ち目は無い。人間が魔族に支配される——六百年前の暗黒時代の再来となる——。

——それだけは何としても避けなければならぬ。

だが、そんなナナの不安もよそに、エレインは躊躇無く口を開いて話し出した。

「——戦争ではない。完全な殲滅だ。浄化だ——邪悪な魔族など一匹残らずこの世から消してやる——この戦いで魔族との確執に最後の決着を付ける——勇者アトロクが三百年前にやり残した事の後始末だ——」

エレインが冷たく言った。

「なおさら無理です。我が国ばかりでなく、他の国も魔界へ目を向ける余裕などありません。ペルセンは先の魔界侵攻で大敗し、その軍勢の大半を失い、ミルチアも内乱状態で国王不在のまま。我が国の最大の同盟国であるサンダルクでさえ、ミルチアと魔族相手の局地的な戦闘により国力を疲弊させていて、魔界侵攻など行なえる状態ではありません——今は我が国も内政に力を注ぎ、不安定になった政権をまずは安定させる事が先決です」

「他の国に頼るつもりは無い」

「魔王軍は、我々人間がバラバラになって戦ったところで勝てる相手ではありません。各国の強固な連携が、今は何よりも——」

エレインは片手を上げてナナの言葉を制した。

「世界中の他の誰に無理であっても、関係ない——わたしならできる」

エレインの言葉。

「しかし——」

そこまで言っただけでナナは言葉に詰まった。——無理だ。エレインが最も信頼し、実の兄のように慕っていたあのライオネルですら説得できなかったのだ。そればかりか逆に怒りを買ひ、国

外追放とまで言い渡されてしまった——わたしなんか、エレインの意思を変えさせる事ができると思わない。

ナナは諦めて、疲れたかのように椅子に座ると、ちらりとエレインの顔を見た。

氷のように冷たい表情、それと対比するかのよう異様に力強い意思の光を放つ瞳。その瞳の奥にあるのは、岩石でも城でも吹き飛ばしてしまいそうな強固な自信だ。

このエレインの絶対的な自信はどこから来るのか——。

本当に、勝てる気なのか？魔王と呼ばれるほどに力を持った魔族と、その百万の軍勢に——。その時、部屋の扉が突然開き、ティグレインが入ってきた。ノックの音は聞こえなかった。

ティグレインは厳しい表情で部屋に入ってくると、他には目も向けず、エレインだけを見据え、その目の前に立った。

エレインもティグレインの目を見据える。レオデグランスで最も権力を持つ女性二人が、部屋の中央で睨みあった。

「——何か？」

「——ライオネル様が行ってしまいました」

「——そう」

何の感情も感じられぬエレインの言葉。

「——なぜです？」

「なぜ？——結局、ライオネルもわたしの覇業ついて来る事ができなかったというだけの事で

す——正誤の判断もできぬ愚かな凡夫——わたしに言う通りにしていさえすれば、それでいいのに——」

「……」

「わたしに従えない者は、わたしの造る新たな時代には必要ありません——新たな世界の夜明けを見る事のできるのは、選ばれた者だけ——ライオネルにはその器がなかったのです」

「——言いたい事はそれだけですか」

テイグレインが静かに言う。

「なんですって？」

いつものテイグレインらしからぬ無礼な言葉に、エレインはきつと視線を鋭くさせたが、その瞬間、部屋に激しい音が響いた。どざりと床に腰を付き、あつ氣にとられた表情で、赤くなった頬を押さえるエレイン。傍で見ていたナナも目を丸くしている。テイグレインが平手でエレインの頬を打ったのだ。

「——あなたは……あなたは一人で歩いて、歩き続けて、——どこに行こうと言うのです？——それはそんなに価値のある事なのですか——あなたを思ってくれている人達を裏切つてまで、やらなければならぬほどの——」

そこまで言った時、テイグレインの瞳から大粒の涙が零れ落ちた。

「——ライオネル様は行ってしまった——わたしの言葉では、わたしの愛では、立ち止まってくれなかった——なぜ、あなたはライオネル様を行かせてしまったの——あの方を止められる

のは、世界中でただ一人、あなたただけだというのに——なぜ、一言「いかないで」と——その一言、たった一言でよかったのに——」

ティグレインはそう言つて、床に膝を付き、泣き崩れてしまった。ナナは声を掛ける事もできず、ただその様子を辛そうな表情で見つめる。

だが、エレインにはそのティグレインの言葉など耳に入っていない。ゆっくりと立ち上がる。——自分でもなぜだかわからないが、胸の中に怒りと憎悪が溢れ出してくる。目の前にいるのは、わたしの道を遮る敵だ。わたしの正義を汚す邪魔者——。

ナナは心配そうにティグレインを見つめていて、エレインには注意を向けていない。

エレインはゆっくりと腰の剣の柄に手を掛けた。

——殺せ。——二人とも。

それが正しい選択だ。

エレインが剣を鞘から抜いた——。

子供の声が聞こえた。

はっと、まるで夢から覚めたように、エレインは天上を仰ぐ。

今の声は——。

「——ティアなの？」

エレインが天上を仰いだまま呟いた。答えはない——。

突然、眩暈を感じたかと思うと、エレインの視界は反転し、意識は深く暗い奈落に落ちて

いった。

内乱の終結を知ってだろうか、キャメロンの町はいつもより活気だっていた。エレインが近々、女王の座に着くという事も民衆は噂話などで聞き知っているのだろう。街路に溢れる人々の顔もどこか華やかだった。

そんな人々の様子もどこ吹く風、ライオネルは一人静かに、キャメロンの町の出口に向かい、歩いていった。

道端で店を開く行商人、酒屋の前で酔いつぶれている労働者、色取り取りの花の入った網籠を抱えて通行人に声を掛ける花売りの少女、誰も彼が笑っている。誰も彼もが自分達の国の新たな王を祝福し、新たな時代の幕開けに希望を抱いている。訪れた平和を喜んでい。

だが、彼等は知らない。すぐに今の平和は無くなってしまうのだ。それも、この三百年無かったような大きな戦争が——エレインはそれを始めようとしている。その時、この罪のない民衆達の笑顔は、どうなってしまうだろう。

ライオネルは小さく頭を振った。——自分にはもう関係無い事だ。自分はもう、この国の民ではないのだから。

ライオネルが歩いていると、人ごみの先で歓声が上がった。人ごみが二つに分かれていく。

前方から、大勢の兵士達に囲まれ、馬に引かれた鉄の檻、囚人の護送車が進んできたのだ。民衆達は護送車の中の囚人に罵声を浴びせ、ある者は囚人めがけ石や果物を投げ付けていた。鋼の鎧に身を包んだ兵士達が叱咤して、近付こうとする民衆を押し分けていく。ライオネルは道の端によって、人ごみにまぎれてその護送車を眺めた。

鋼鉄の檻の中でじっと座り込んでいる囚人。ライオネルには始め、それが誰だかわからなかった。それほどの変わり様だった。それは今回の内乱の首謀者、オクト・ヴァルリットの惨めな姿だった。髪はボサボサで皮膚は薄汚れ、元は絹製の立派な服だったのだろうが今は、ぼろ切れにしか見えない布をまとっている。レオデグランスの十二大貴族の一人であり、中央政權で大臣まで務めたかつての威厳はもう何処にも無かった。

ライオネルは人ごみを押し分け、護送車に近付こうとした。一人の兵士が警棒でライオネルの身体を群集の中に押し戻そうとしたが、ライオネルの顔を見てとっさに直立不動の体勢をとって敬礼した。

「こ、これはライオネル様、失礼いたしました！まさかこのような場所におられるとは思っていませんでしたので……」

「オクトを捕まえたのか？」

「はっ！ レノン村の山に潜伏しているのを、近くの農民が発見して通報したそうです。すぐに我等が現場に向かい、捕らえる事ができました——おい、護送車を止める！ライオネル様が御覧なさる！」

兵士が護送車を引いている馬の卸者に向かって叫ぶ。護送車は止まった。ライオネルが檻に近付いて、オクトの姿を覗き込む。

オクトは濁った瞳でライオネルを一瞬見つめたが、すぐに何もない空間に視線を向け、一人でも何やらぶつぶつと呟き始めた。

「——これはどうしたことだ？オクトに何があった？」

オクトを見たライオネルが兵士に向かって言う。オクトの様子はとても正気とは思えない。あるいは気でも狂ってしまったのだろうか。

「それが、我等がオクトを発見した時にはすでにこの様子でした——おかげでたいした抵抗も無く、捕まえる事ができましたが——」

「神だ！」

兵士の言葉を、その言葉がかき消した。ライオネルと兵士がオクトを見る。オクトが薄笑いを浮かべ、ライオネル達を睨んでいた。

「神だ！わたしは神だ！貴様ら、下郎の分際で頭が高いぞ！わたしを誰だと思ってる！」

オクトがそう言って、鉄格子を掴む。鉄格子に顔を張りつけ、ニヤニヤと笑う。

「わたしは誰だ！さあ、言ってみろ！——答えられんのか？この無知蒙昧の猿ども！英知も理性も欠片も持たぬ便所虫どもめ！いいか、わたしはあの絶対かつ偉大な全知全能の主、クロトーから——ぎゃあっ！」

悲鳴を上げて、オクトが鉄格子から顔を放す。鉄格子を掴んでいたオクトの手を、兵士が警

棒で打ちつけたのだ。

「うるさいぞ！静かにしている！——どうもすみません、ライオネル様。普段はおとなしいのですが、この通り、時折わけのわからぬことを叫びだすのです」

兵士が言う。

オクトは檻の中央に戻って座り込むと、また聞き取れぬ声で何やら独り言を呟きだした。そんなオクトの挙動を真剣な表情でじっと見つめ続けるライオネルに、兵士は怪訝な表情を見せる。

「——あの、ライオネル様、どうかなさいましたか？」

「クロートー……その名前は確か……いや、まさかな——」

「——？」

「いや、なんでもない——もう行ってよい。時間をとらせたな」

「はっ！ではわたしはこれで」

ライオネルに向かって敬礼すると、兵士は部下に護送車を進めるように命じ、また群がる民衆達を押し退けて先へ進んでいった。

護送車が民衆の陰に隠れて見えなくなるまで、ライオネルは見つめ続けていたが、やがて背を向けて歩き出した。だが、その表情は先ほどまでの静かなものではない。眉の間に深いしわを寄せ、厳しい表情で何かを考え込んでいた。

黙々と、早足で歩いていくライオネル。そうしていつの間にか、キャメロンの町の北出口、

関所の前まで来ていた。ここを越えればキャメロンの町の外だ。一步外に出れば、もう二度と戻ってくる事はないだろう——だが、ライオネルは躊躇もせずに関所に向かって歩みだした。何の感慨も無いかのように——しかし、数歩も行ったところで、急にふと立ち止まった。そして隙のない視線で、注意深く、辺りを見ました。ライオネルの耳に何か、聞こえたのだ。子供の声が——微かに——だが、いくら辺りを見回しても子供の姿など見当たらない。気のせいかな——いや、確かに聞こえた。自分に限って、聞き間違えるはずなど無い——だが、いったい何なんだ。

ライオネルがそうこうして立ち止まっていると、一人の男が関所からのんびりと歩きよって来た。関所の番をしている兵士、マセマという名前の赤ら顔の男だが、彼がライオネルの姿を見て、生真面目な顔で敬礼をした。

「これはライオネル殿、町の外にお出かけですか？」

マセマが言う。この平民出身のマセマという男はレオデグランスの軍に入隊してもう三十年以上、歳も五十を超えている、当然ライオネルもこの男の事はよく知っていたし、いわば軍の中でも古参といえる男だが、酒癖が悪いのとその生活態度の不真面目さのせいで軍内でまったくうだつが上がりならず、この歳で未だに町の関所の番人なんて仕事をやらされている男だった。

ライオネルが立ち止まり、そのマセマの顔をじろりと睨む。

「……マセマ、おまえまた酒を飲んでるな」

「へへへ、すいません。でもこう平和で退屈じゃあ酒の一杯でもやりたくなるもんで……ライ

オネル殿も一杯いかがですか？」

そう言つて物陰から青銅製のカップを持ち出してくるマセマ。勤務中に酒など飲むな、とどやしつけようとしたライオネルだが、自分はもうこの男の上司でもなんでもないのだと思ひ、ただ「いらぬ」とだけ言つた。

「へえ、それじゃあ、わたしだけ頂きます」

とマセマはカップに口を付け、中の葡萄酒を一気に飲み干すと、酒臭い息を吐き出した。赤い顔がさらに赤くなる。マセマは毎日酒ばかり飲んでるせいか、顔、特に鼻の頭が真っ赤で、鼻の事を言われると酷く怒つた。

「——しかしねえ、ライオネル殿、こんな事が許されるのでしょうか？何十年も国のために尽くし、若い頃は先代陛下にお供して幾多の戦場を掛けてきたこの老兵のわたしを、未だにこんな一兵卒として遇しておるなんて。老人を敬わぬ国は滅びますよ。わたしはこんなにこの国を愛し、尽くしてきているというのに——ほんとに、馬鹿げている」

とマセマの言葉。またいつもの愚痴が始まったと思つたライオネル。おまえがさっぱり出世しないのは誰のせいでもなくおまえ自身のせいだと、いつもなら一喝して話を終わらせてやるところだが、自分はどうせ行く当てもなければさしあたって急がなければならぬ用も無い、話の一つぐらい聞いてやろうとライオネルは番所に置かれてあつた椅子に腰掛けた。

「——でもね、わたしは悲観などしておりませんよ、ライオネル様。近々、エレイン様が戴冠されるようですが、エレイン様ならわたしを正当に評価してくださる。あのお方はわたしに

とって女神です。エレイン様にイーリアスの祝福を——あのお方ほど公明で慈愛に溢れたお人はいないですな——これは十年ぐらい前の話ですが、ライオネル殿もご存知の通りあの頃はペルセンとの戦争の真っ最中でしてね、わたしも雑兵の一人として戦場に出ていましたよ——もっとも何の手柄も立てられず、すぐに足に傷を負ってしまい、キャメロンの国立病院に運ばれる事になってしまいましたかね——当時のわたしはすでに四十半ば。もう一兵卒として戦場に出て働ける歳じゃありませんでした。それを小隊長殿に無理を言っけて付いて行かせて貰ったのに、その体たらく——病院のベットで動けないわたしを見て、若い同僚達は笑いましたよ、役立たずの老いぼれだよね——そんな時、エレイン様が戦傷兵の見舞いに国立病院に訪れられて、確かあの時のエレイン様はまだ七つか八つ。ものものしいプリンセスガードに囲まれて、怪我人で溢れている病院の中を歩き回り、傷付いた兵士達一人一人に声を掛けていられた。わたしは一国のお姫様なんて高貴なお方をそんな間近で見るのは始めてで、それだけで感動して涙が出そうでしたよ——エレイン様は、わたしを見て『おじさん、鼻が赤いのね。絵本に出てくるピエロみたいでかわいらしい鼻』と仰られた——このわたしの鼻をかわいいなんて言ってくれたのは後にも先にもエレイン様だけです——そればかりか、プリンセスガード達が止めるのも聞かず、そんなわたしの足の包帯を御手自らで換えてくださった。わたしは泣きましたよ——肝腦地にまみるとも、この御恩は報じ難し——このお方のためになら死んでもいいとね」

そう言いながら、酒を口にし、泣き出すマセマ。酔って涙脆くなっているようだった。

ライオネルはそんなマセマの様子を見て、少し口元を緩ました。——単純な男だ。だが、悪い人間じゃない。少し酒癖が悪く、涙脆い、良くも悪くも善良な『普通』の人間なのだ。

病院を見舞ったりマセマの足の包帯を自ら換えたりしたのは、幼いエレインにとって深い意味があった行動ではないだろう。七歳の子供に、いくらなんでも戦争の意味や影など理解できるはずもない。幼い子供にとっては、死という事さえよくわかっていないだろう。幼いエレインが特別他の子供に比べて慈愛に満ちていたわけでもなんでもなく、それは幼い子供特有の好奇心からくる行動だったのだろう。だが、そのエレインの何でもない行動が、マセマに深い感動を与え、エレインのためなら死んでもよいとまで言わせた——その事がライオネルには可笑しく思えた。

「ライオネル殿？何を見ているのです？」

マセマが言った。ライオネルはじっと番所の窓から見える巨大なキャメロン城を見つめていた。

「城を——もう、わたしの人生には意味の無くなってしまった場所を——」

「意味の無くなった？」

マセマが怪訝な顔をして聞く。

「わたしは城をクビになった——国外追放だ。わたしは二度と、この城を見ることはできない」

ライオネルが静かに言った。——笑いたくなるような何でもない事が、マセマをエレインと

強く結びつけた——マセマの一方的な結び付きだとしても——それなら、自分とエレインを結び付けていたものはなんなのだろう——。

「国外追放！レオデグランスの守護神であられるあなた様ですか！？」

マセマが驚きで叫んだ。

「馬鹿げている！まったく馬鹿げている！国家の柱石であられるライオネル殿を国外追放など——大方、エレイン様のご信頼も厚いライオネル殿の地位を嫉んだ奸臣どもが策略を弄してあなた様を陥れたのでしようが——ええい！どうして、わたしやあなた様のような忠君の臣ばかりがこのような憂き目に！」

大声でそう言うと、マセマは椅子を蹴って立ち上がった。

「おい、どこへ行く？」

番所を出て行くこうとするマセマに、ライオネルが言った。

「決まっております。エレイン様の元へ諫言を申し上げに——ライオネル様がいなくなって、きつとエレイン様もお心を痛めているはず——わたしが命を掛けて諫言すれば、公明正大なエレイン様、きつと奸臣どもを排し、礼を尽くしてライオネル殿を再び迎え入れてくれるでしょう」

マセマの真剣な言葉に、ライオネルは苦笑した。自分に国外追放を命じたのは奸臣でも他の誰でもない、エレインだ。それに、一兵卒にすぎないマセマが会わせてくれと行ったところで、エレインに会えるわけもないだろうに。

だが、マセマは信じている。自分が行けばエレインに会えると。話せばエレインにわかってもらえると。——一方通行で盲目的なまでとあの思い。しかし、その思いが届く事はない。エレインはおそらく、マセマという男の存在すら知らないのだろうから。

傍から見れば酷く滑稽だ。だが、マセマにとっては幸せなことなのだろう。人を思うという事、人を信じる事、

片側通行の思い。酷く、滑稽だ。

ライオネルは思う。では、自分とエレインを結び付けていたものとは何だったのだろうか。プリンセスガードの隊長としての立場か。

二十年近く一緒に過ごしてきた年月の惰性か。

それとも、騎士道という名の忠誠心なのか。

自分にはわからない。

全ては、ライオネルの片思いだったのだろうか——それはない。過ごしてきた年月が、そう確かに確信させた。だが——。

その繋がりが何だったのか、もう思い出すこともできない。

ライオネルは首を振った。

「やめておけ。城門で門前払いをくらうのがおちだ。へたをすれば、おまえまで国外追放になるぞ」

「しかし……」

「よいのだ。この国を出て行くのは、わたし自身がもう決めた事なのだから——誰も恨んでいない」

ライオネルの言葉に、マセマはしぶしぶと席へ戻った。そして、納得のいかないのか、自棄になって、黙って酒を浴びるほど飲みだした。

ライオネルは酔い潰れていくマセマを見つめながら、自分はこれから何処へ行くのかと考えた。——サンダルークか、ミルチアか、それともペルセンか……いや、もう決まっている。考えるまでも無い事だった。魔界へ——魔族と戦い、死んで、そして土に返るだけだ。もう自分には、帰るべき祖国も、忠節を尽くす相手も、愛してくれた人も、何一つとして残ってはいないのだから——。

完全に酔い潰れ、木製の机の上に上半身をうつ伏せに寝てしまったマセマが、古い童謡を歌いだした。

「あの子は眠っている

あの子は夜の花

目を覚ましたらもういない

あの子は眠っている

ぼくの心の中

夜空に輝く月の中に」

片思いのマセマの思い。それは他人にとっては滑稽だが、マセマにとってはそれはそれは滑稽でも

何でもない、生きる希望そのものなのだろう。理想も希望も無い生に、死に、何の意味があるというのか。

決して手の届かぬ月の輝き。届かぬとわかっていても、人は少しでもそれに近づこうと歩み、努力し、挫折し、それでも歩み、いつかは自分も輝けると信じている。

ライオネルはふと、初めてエレインと出会った時の事を思い出した。まだ生まれただばかりの赤ん坊だったエレイン、その彼女を抱き上げた時、手のひらに感じた温もりを。彼女の額に輝いていた眩いばかりの未来を。

自分とエレインを結び付けていたものが何だったのか、それはわからない。だが、たとえそれが何であろうと、エレインもライオネル自身もこうして今存在しているのだ。そして、生きている以上、己の心の中にある希望の光を消してはならない。諦めてはならない。その結果、如何なる結末を迎えようと。

未来の希望が消えた時、人は緩慢な死を迎えていくのだから。

ライオネルはそっと瞳を閉じた。

今ならはつきりと聞こえる。頭の中に浮んでくる、子供の声が。

——エレインを助けて、と。

ライオネルは、机の上で寝そべっているマセマを揺り起こした。

「おい、マセマ。おまえはクロートーという言葉聞いた事があるか？」

「……クロートー？……クロートーですと！——はい、知っております！知っておりますと

も！このマセマ、ご承知の通り無学な男ですが、歴史の話だけは大好きなのです」

酔っ払ったマセマが、勢いよく言った。

「詳しく聞かせてくれ」

「はい。——と言っても、クロートーに関する伝説はほんの僅かで、本当に実在した人物であるかどうかもわかっていません——クロートーと言うのは伝説の預言者で、大きな歴史の変動時に姿を現したと言われています。その名前が書かれてある現存する最古の書物は『エーテリアム事記』でして——これはライオネル殿もご存知のとおり、あの千五百年前の偉大な王、高潔王エーテリアムの生涯を後年の歴史家バルヴァーが書き記したのですが——それはともかくとして、その『エーテリアム事記』に僅か数行ですが、クロートーの名前が出てきます。

『老爺ありて、若きエーテリアムを評する。世の王たる子なりと。その老爺、クロートーといいて、世を觀、導くものなり』。——クロートーの名は、この後の歴史にも何度か登場し、幾つかの歴史書にその名が記されています。また、いちばん最近のものでは歴史家テルラムントの書いた我が国の国書『レオデグランス建国記』でして——その記述によると魔王モートの時代にも、勇者アトロの時代にもクロートーは姿を現し、彼等のその後の運命を預言したとあります——わたしが知っているのはこれくらいなのですが。しかし、なぜ急にクロートーの事など聞くのです？」

自分の知識を自慢気にひけらかした後、マセマが聞いたが、ライオネルはただじっと考え込んでまますま答えなかった。

クロートー——歴史の折り目に姿を現し、古き王の破滅を予言し、新たな王の出現を預言する者か——なるほど預言者などと言えば聞こえは良いが、少し方向を変えればまったく別の見方ができるのではないか——彼の言葉が世界を動きを言い当てているのではなく、彼の言葉どおりに世界が動かされているとしたら——。

もしそうなら、それは預言者ではなく、支配者だ——このアトラスという名の世界の。運命の支配者——それは神と同義だ。

ライオネルは自分でも気付かぬうちに、腰に差ししてある剣の柄を強く握り締めていた。

——最近のエレインの奇妙な言動。神という言葉。オクトが口にしたクロートーと言う名。「——マセマ、もう一つだけ聞かせてくれ。——もし、おまえの最も大切なものを守る事が、神に弓ひく行為になるとしたら、どうする？」

ライオネルが言った。

マセマは眠たげな目を起こし、酔っ払った、しかし力強い口調で答えた。

「わたしの最も大事なものはこの祖国、そしてエレイン様です。それをお守りするためなら、たとえ創造主イーリアスに唾を吐き、地獄に落ちる事になろうと後悔はありません！」

その言葉を聞いて、ライオネルは立ち上がった。無言で番所を出て、キャメロンの町の中心に向かって歩いていく。

「ライオネル殿、何処へ？ ——街を出るのではなかったのですか？」
わけがわからないといった様子で、マセマが言う。

「……大事なものを忘れて行ってしまふところだった——」
振り返りもせずにそれだけ言うと、ライオネルは力強い足取りで街の中心に向かって歩き去って行った。

エレインが目を覚ますと、そこは自分の部屋のベッドの上、窓の外から見える景色は薄暗く、もう夕方になっているようだった。

「——お気づきになれましたか」

ベッドの横の椅子に座っていたティグレインが声を掛けた。

「わたしはいい——」

「昼間、急にお倒れになったのですよ——皆、心配しました。御気分はどうですか？」

「——別に悪くないわ」

身体を起こし、エレインが言った。——いや、むしろ普段よりいいぐらいだ。まるで胸の中に詰まっていたしこりが消えてしまったよう。頭は妙にすっきりとしている。

「それを聞いて安心しました。——おそらく、日頃の執務のお疲れがでたのでしょう。特にここ数日はお休みする暇も無いご様子でしたから。——それと——」

ティグレインがそこで言葉を止める。少し、何か考えていたが、やがてゆっくりと口を開く。

「——昼間は申し訳ありません。言葉が過ぎたようです。——わたし、ライオネル様の事で気分が動転していたのです。公務に私情を持ち込むなど、許されない事ですの——きっとこの度の事は、エレイン様にはエレイン様の考えのあつての事でしょう。わたしの口の挟むことではありませんでした」

テイグレインが言った。

エレインがテイグレインを見る。

なぜだろう？ 昼間はあるにあつたわたしの中のテイグレインへの憎しみは、綺麗に消えてしまっていた。むしろ、今考えると異常、恐ろしくて身が震える思いさえする。——殺してしまえなどと——。

「——いえ、誤らなければならぬのはわたしの方です。今思うと不思議でなりません。いたい、わたしは何をあんなに氣を立てていたのか。——とにかく、昼間のわたしは普通ではなかつたようです。——本当に、ごめんなさい」

申し訳なさそうに、エレインはテイグレインに向かって頭を下げた。

テイグレインは少し驚いたような表情を見せた。それも当然、まるで昼間のエレインとは別人のようだったのだから。ここ最近、癌の様にテイグレインの心の中を蝕んでいた不安は逆に増殖していった。——いったい、エレイン様の中で何が起こっているのか。何かとんでもなく恐ろしい事が起こっているのではないか——まったく正反対のエレイン様が本当に二人いるかのよう——。

エレインがベットから身体を起こそうとした。ティグレインが慌てて止める。

「いけません。まだ寝ていないと。身体に疲れが溜まっているのです。無理は禁物です」

「しかし——」

「あなた様は我がレオデグランスにとって唯一無二の御方。大事があつてはいけません——せめて、今日一日ぐらいはゆっくりお休みください」

ティグレインの言葉に、

「そうね。——なんだか、今はわたしも休みたい気分だわ」

エレインは力なく微笑して答えた。そして、ちらりと机の上を見た。

「それ——とって貰えませんか？」

エレインが言う。ティグレインが机の上の羊皮紙を取った。あの、魔族に対する宣戦布告の宣告書だ。

エレインは手渡されたそれを、無造作に破り捨ててしまった。

「こんなもの——あなた達のいうとおりです。今は何よりも国家の運営と民の生活の安定を計るのが大事——わたしのエゴで、多くの民を苦しめるところでした。魔界侵攻作戦は無期限延期とします。——」

まるで自分自身に言い聞かせるように、エレインが呟いた。

「——それと、今すぐライオネルを探してください。運が良ければまだ街を出ていないはず——彼には酷い事をしてしまいました。彼に謝りたい。——この国にはまだライオネルが必要で

す。わたしにも、あなたにも」

「その言葉をお聞きして、わたしも嬉しく思います。しかし、——」

ティグレインはそこで言い淀み、悲しそうに微笑した。

「ライオネル様は見つからないでしょう。——仮に見つかったところで、もうわたし達の元に戻ってくる事もないでしょう。——あの方は、そういう人です」

そう言つて微笑しながら、瞳の端に涙を光らせた。

エレインもうな垂れる。彼女は知っていた。ティグレインのライオネルに対する思いを、——ライオネルがいなくなつて、いちばん悲しんでいるのはティグレインだという事を。

だから、言葉を掛けることができなかつた。

「——すいません。国務に私情を挟まないといったばかりなのに」

ティグレインが涙を拭いて言つた。そして、己の心を落ち着けようと、軽く息を吐くと、次の瞬間には国政の中枢を預かる政治家としての表情に戻っていた。

「——エレイン様が意識を失つていた間に二つ、重大な知らせが届いております」

「聞きましょう」

「三日後にバラハム法皇様がこのキャメロンにお越しなさるとの連絡がございました。エレイン様の戴冠式が終了するまで、この街に滞在のご予定です。現在、法皇様を迎える準備を急がせております」

妙だな——とエレインは思った。イーリアス教最大の保護国であるレオデグランスの戴冠式

に法皇が出席するのは、三百年來の慣習だが、少し來るのが早すぎるのではないか。このキャメロンに何か用があるわけでもないだろうに――。

――まあ、あの爺さんはだいたい変わり者だから、ただ気まぐれだろう。

「――そうですか。十分に礼を尽くしてお迎えするように。失礼のないように」

「もちろん、心得ております。それで二つ目の事ですが――」

「――何ですか？」

「――オクト・ヴァルリットを捕らえました。すでに、キャメロンに護送し、今はこの城の地下牢に収容しております」

そのティグレインの言葉を聞いた時、それまで穏やかだったエレインの瞳が、ぎらりと光った。側にいるティグレインが、殺氣を感じるほどに――。

ティグレンの中の不安が、また急速に大きくなっていく。

「――いかがいたしましたしょう？」

「――予定通りに」

それだけ冷たく言い放つと、エレインは顔を背け、ベッドに横になって目を閉じてしまった。「――わかりました。では、三日後に執り行います」

ティグレインの言葉に、エレインは答えなかった。ティグレインはそのエレインの背中に一礼すると、静かに部屋を出て行った。

だが、部屋を出て、エレインから遠く離れた後も、ティグレインの動悸の高まりは収まらな

かった。

先ほどのエレインの殺気——背中に氷柱を刺し通されたよう——背筋が震えた。

——やはり、今のエレインは普通じゃない。

ティグレインは片手で胸を抑えると、抱えきれない不安を覚えて、どうする事もできず廊下に立ち竦んだ。

予定通り——三日後にオクト・バルリットの公開処刑が執り行われる事が正式に決まった。

そしてまた、ティグレインの命で諜報部の人員を総動員したにもかかわらず、ライオネルの所在はまったく掴めなかった。

——カーマ屋敷最奥、結界の間、

「さあ次はあなた方の始末を付けてあげないとね」

サディスティックな笑みを浮かべ、いまだにダメージから立ち上がれない三人を目に写すカーマ。

その後ろで、完全に縛り上げられ、何かの薬品で眠らされているアムリタ。

「くそっ」

ロアが悪態を付く。しかし、身体は結界に縛られ、思うように動いてはくれない。

「無理、無駄、無謀。ここまで無が続くといっそ滑稽ね」

カーマは自由の効かなくなっている身体をなんとか動かそうとしている三人を見、満足そうに笑みを浮かべる。

「……っ……!!」

剣を杖代わりにしながら、その身を縛る鎖に抵抗しつつ立ち上がるアッド。

「あら、頑張ったわね」

無造作にアッドに近づき、その頬を叩く。

「がぁ」

軽く見える一撃、しかしその威力で弾き飛ばされるアッド。

「フッフ、可愛い人形ね」

その様子はさらにカーマを満足させたらしく、その顔には恍惚といった色が見受けられる。

「この結界させ……」

メルフィナがぼそりと呟く。

それが聞こえたのか、その表情を変え、メルフィナに大またで近づき、

「その結界をどうにかできるのかい？この雌豚が！」

怒気を漲らせた表情で、メルフィナに平手を浴びせる。

アッドの時よりも力をセーブしているのかメルフィナが吹き飛ぶことはない。

しかし、その平手を何度も何度も浴びせる。ヒステリックな母親が子供に折檻をしているようだ。

「てめえ！」

「何をする！」

そんなメルフィナの様子に声を上げるロアとアッド。

しかし平手の音は止まらない。

しばらく後、その平手の音が止み、聞こえるのはカーマが付く息と張り上げられた二人の声

だけとなった。

肩で息をするカーマの足元で、メルフィナが気を失っている。

いかな龍族であろうと、力を封印された状態ではただの女性でしかない。

「フフフ、ついカーアとなってしまったわ」

メルフィナを叩いていた掌をさすりながらカーマはそう漏らす。

「貴様あー！」

アッドとロアの殺気を孕んだ視線がカーマを貫く。

「フフフ、いいわあ」

しかし、意に閑せず。寧ろそれを心地よいといった風情で受けているカーマ。

「やっぱりモルモットは活きが大事よね」

口の端を吊り上げてそう言う。

「誰がお前なんぞに！！」

「好きにさせるかあ！」

そう叫びながら、結界内で立ち上がる二人。

「空元気はよした方がよくなってよ？」

そんな二人を見ながら、カーマは笑みを浮かべ平然とそうのたまったのだった。

——リリス・コワンクトウの城

「さあもう終わりですか？まだまだ私は健在、美を欲しいままにしていますよ」
両手を広げながらジョルジュはそう言い放つ。

そんなジョルジュから少し離れたところで、ネヴィーナ、リリス、ドウガンは肩膝を突き肩で息をしていた。

その身体には致命傷こそないものの、大小の傷が見られる。

「……化け物め」

ドウガンがポツリと漏らす。

幾度かの攻防、一糸乱れぬ連携を放つてもなお、ジョルジュは三人を上回っているのだ。

「一人で出てくるだけのことはあるようね……」

左の二の腕を押さえながら立ち上がるリリス。

「私はこんなところで止まってはられない……」

ふらつきながらも、その瞳には強烈な光を宿したままネヴィーナも立ち上がる。

「それでこそですよ！フィナーレにはまだ早い……もっと！もっと！！私を打ち振るわせてください！」

拳を握り、身を震わせるジョルジュ。

「ちっ変態めが」

ドウガンが舌打ちしながら悪態を付く。

その手にはカードが五枚ほど広げて握られている。

「変態とはひどいですね」

両手を上げ傷ついたとでも言わんばかりの表情を浮かべるジョルジュ。

「そろそろ痛い目を見せてあげるわ」

リリスはそう不敵に笑い、目を見開く。

「魅了(チャーム)！」

サキユバス族の特殊能力である瞳術、目標の脳に直接誘惑をかける技である。

そのサキユバス族の長たるリリスの魅了の効果は侮れるものではない。

「くっ」

今までの余裕からか、無造作に立っていたジョルジュはリリスの瞳の力にその身を縛られる。

ジョルジュ程の力があれば意識を乗っ取られることはない。しかし、それはリリスの力。

完全に身動きの取れない瞬間が訪れる。

その隙を見逃す他の二人ではない。

「ちえい！」

ドウガンが気合と共にカードを投げる。

投げたカードはジョルジュではなくその周り、周囲の地面に着弾する。

それは五紡星を描く。

「フィフス・チェーン」

そのカードから鎖のようなものがジョルジュに伸び、リリースの魅了による束縛をさらに強固なものにする。

「はあ！」

ドウガンがカードを投げたと同時に宙へ飛んでいたネヴィーナ。

ジョルジュへの束縛が強固なものになった瞬間、力を解放する。

ネヴィーナのその背に二対の翼が現われる。

「美しい」

そんなネヴィーナを見て、自由の効かない状態であるにも関わらず述べるジョルジュ。

「そう」

その言葉にネヴィーナは冷たく言い放ち、両手を前に突き出し印を組む。

「でも、貴方に言われてもなんとも思わないわね」

印を組み終えた両手に辺りのエネルギーとでもいうのか、何かが集まっていくのが感じられる。

「私を喜ばせられるのはこの世に一人だけなの。それだけ教えてあげるわ」

言葉を重ねるネヴィーナ。その間にも両手の間に何かが凝縮していく。

「お逝きなさい。デスペナント・ランス」

紡いだ言葉を合図に、両手に集まっていたものが急速にその形を整えていく。

「むっ」

その力の大きさにいささか驚きを隠せないジョルジュ。

それは急速に槍の形を取り、その矛先をジョルジュへ向ける。まるで意思でもあるかのよう
に。

「いけ」

ネヴィーナの合図と共に、雷光の如くそれは標的へと弾け飛ぶ。

その軌跡は空間を歪める。

「くおおお！」

放たれた瞬間、力を解放し束縛を解こうとするジョルジュ。

しかし、ここぞと力を込める二人を前に瞬時には解けない。

その瞬時があれば、その槍はジョルジュを捕らえていた。

着弾の瞬間、溢れんばかりの光を発する槍。

激しい爆発音。

朗々と巻き上がる煙。

「手ごたえは？」

下りてきたネヴィーナにそう問いかけるリリス。

「あったわ……けど仕留めてはいないと思う」

「あの状況で？」

慎重なネヴィーナの言葉を疑うドウガン。

無理もない、それほどの威力を持った攻撃をともに食らったのだ。

そんなドウガンの思いは、突如起こった笑い声で打ち破られた。

「フフフ、ははは！美しい、美しすぎます！」

まだ晴れていない煙の向こうでジョルジュの言葉だけが届く。

「やはりね」

構えながら自分の考えが正しかったことを確信させられるネヴィーナ。

「今のは効きました。並みのものなら、その命の華を散らされていたことでしょうね」

煙が晴れ、現われたのは多少ぼろぼろになったジョルジュ。

口の端から血は流れているが、それでも五体は満足である。

「だがね、私は並みのものではない……特別に美しいものなのですよ！」

そう叫びながら力を、魔力を解放するジョルジュ。

その波動が突風となって三人を押し。

「もう終わりにしましょう。散らせて上げますよ、まるで花占いでもするかのよう一枚ずつ

散らして行ってやる」

剣を軽く振るいながら歩き出すジョルジュ。

「本気になったみたいね」

「正念場ってやつですかな」

「私は終わらない！」

ジョルジュの様子に気を入れなおす三人。

「いくぞ！」

そう言ってジョルジュは駆け出した。

瞬時に、世界を縮めたかのようにドウガンの前に姿を現す。

「なっ！？」

今までと明らかに違う速度に対応が遅れるドウガン。

そんなドウガンを斬りつけるジョルジュ。腹を薙ぐ。

「ぐっ」

そのままの勢いで後ろ回し蹴りを放ちドウガンを吹き飛ばす。

「はあ！」

ドウガンに仕掛けたことで動きが止まった隙を狙ってリリースが間合いに飛び込む。

「甘いですよ」

その打撃を剣を持っていない片手だけで捌くジョルジュ。

リリースがその速度を上げても片手で捌かれる。

「かあっ！」

一瞬の隙に気合を放ち、リリースを足止めする。

その隙を突き、その剣でリリースを斬りつける。

「ちいっ」

それを何とか避け、片腕を軽く斬られるだけに留まるリリース。しかし、無理な体勢を取ってまで避けたせいでジョルジュに対して隙を作ってしまう。避けられない態勢のところに鋭い蹴りが繰り出される。

「こぶっ」

まともにはわき腹に決まりそのまま後方へ飛ぶ。

そのリリースに片手で魔力の弾を造り追撃。

リリースに直撃し、爆ぜる魔力弾。

「ダーク・エッジ」

ネヴィーナが滑空しながらジョルジュに魔力の刃を放つ。

リリースに弾を打った直後、本来ならば回避は不可能。

しかし、その刃をジョルジュは手にした剣を投げつけることで打ち消す。

「なっ」

予想外の対応に驚きを隠せないネヴィーナ。

その一瞬には、すでにジョルジュは間合いの中であった。

「ブラッディ・ブラッド」

そう囁きながら、片手をネヴィーナの腹に当てる。

衝撃は背中まで抜け、背に血の華が咲く。

そうして後方に吹き飛び、そのまま倒れこむネヴィーナ。

「フフフ、さてフィナーレです」

ドウガン、リリスともに重症。もはや戦闘はできないであろうほどダメージを受けていた。

ネヴィーナも同様、先ほどまでのダメージの蓄積と最後の術のダメージでもはや力尽きていくといってもいい状態であった。

仰向けに倒れ吹いたまま、魔界の空を見上げ、虚ろになりゆく意識の中、ネヴィーナはぼんやりと考えていた。

（私には無理なの？……ガルガンディ……逢いたい……貴方に逢うまでは死ねないと思ってたのに……ここで終わりなのかしら……やっところからだと思っただのに……いやなのに……身体に力が入らない……私はモート様の……魔王の娘なのに……貴方は笑うかしらね？なにやってるんだって……でも、でも……）

空を見上げるネヴィーナに剣を手にしたジョルジュがゆっくりと近づいてくる。

その時、ネヴィーナの意識が闇の底に行き着こうとしたとき一つの記憶が呼び起こされる。

（これは走馬灯？）

ネヴィーナ自身、それは夢か幻といった風に思っていた。

目の前にモートとガルガンディが現われたのだ。

目に映るガルガンディの容姿は幼い。遙か昔の記憶なのであろう。

「ガルガンディ、お前はどう思う？」

モートがガルガンディに話掛ける。

「ん、構わないぜ、ネヴィーナが王様でも」

そういつて笑みをネヴィーナに向けるガルガンディ。

「あつてもネヴィーナは女だから女王かな？」

今度はモートに向かつて疑問を投げかける。

「はは、違うない」

小さく笑い同意するモート。

(これはまだモート様が魔王と呼ばれる前の記憶だ)

ネヴィーナはそう思った。

「だってさ、ネヴィーナ」

モートはそう言いながらネヴィーナの頭を撫ぜる。

「でも……私に力なんて」

戸惑う幼いネヴィーナ。

「今はまだ目覚めていないだけだ。私の娘なんだからな」

力強い瞳でそういうモート。

「別に力が無くても大丈夫だって、俺が守ってやるからよ」

ガルガンディが満面の笑みを浮かべながらネヴィーナに言う。

「いや、守ってもらえばっかりなのはいや」

しかし、そんなガルガンディの言葉に反論するネヴィーナ。

「フフフ、そうだなネヴィーナ」

「ちえ。まあいいや、それじゃあ隣同士で戦っていくんだな。楽しみだぜ」

少し拗ねた様な表情のあと、すぐに楽しいな想像をし、わくわくしているガルガンディ。

「うん、隣にいる」

ネヴィーナはそう半分照れながら返した。

「ネヴィーナ、いつかお前に本当に力が必要なとき、本当に欲しいもの、この世で一番欲しいものを手に入れるために力を欲するとき、きつとお前は本当に目覚めるよ。よく覚えてさい」

モートはそう言いながら再びネヴィーナの頭を撫ぜたのだった。

(これは遙か昔の記憶……愛おしき過去……だけど……モート様、いや父さん……紛れも無く今がその時……私はガルガンディの傍にいたい……彼の横で戦っていた……私が欲しいのは彼だけ……彼さえいれば何も欲しくない……彼に逢うために、この場では死ねない！力が欲しい！私に眠っている種よ目覚めて！私は今心を決めた！覚悟を決めた！私は魔王モートの後継者！その私が欲するのは一人の男の傍らにいたいことだけ！それだけ！！！！)

ネヴィーナはリリースに告げられたときに心は決まったと思っていた。しかし、まだ足りなかった。しかし、今魔族化により、悠久に流れた時により押し流されていた記憶の封印が解か

れた。モートの言葉と共に完全なる自覚がネヴィーナの中に現われた。

そして今、霸王、魔王と呼ばれた者の後継者が、その娘が真なる目覚めを迎えた。空を見上げていただけなはずのネヴィーナから溢れんばかりの魔力が濁流のように辺りに撒き散らされる。

「なっなんだ!?!」

無造作に近づいていただけのジオルジュが声を上げる。

「わたしは!」

その本流の中で、ネヴィーナはそう声を上げ立ち上がる。

その長髪は自らの魔力の発散によって暴風雨の中にいるように荒れ狂っている。

「私は、魔王モートの娘、ネヴィーナ。矮小なものよ、私の前から消えなさい」

ジオルジュを睨みつけ、そう告げるネヴィーナ。

「わっわたしが矮小!認めない、そんなこと認めない!」

そう言いながら剣を振るうジオルジュ。

黙って手を翳すネヴィーナ。

ジオルジュの剣がその手に触れる寸前に、盾のようなものに防がれ、刀身は小気味良い音を立てへし折れる。

「なっ!?!」

「はっ」

その翳した手から魔力弾が発射される。

「うがぁ」

まともに喰らい、遙か後方まで弾き飛ばされるジョルジュ。

力の差は圧倒的になっている。

「なぜだ……魔王の娘だと？そんな馬鹿な！」

傷だらけになりながらも抗議の声をあげるジョルジュ。

「目の前にあるものが真実よ」

そう静かにいいながらドウガンとリリスに近づきその傷を癒す。

「それがどうしたというのですか！私の力はこんなものではない！」

そう叫び、ジョルジュは今までに無いほどの力を両手の先に込め始める。

「フッフ、ファイナールは変えるわけにはいかないんです。三人とも私に殺されてしまいなさい！」

そう言つて今までに無い巨大な魔力弾をネヴィーナに向かって放つジョルジュ。

対するネヴィーナも両手で印を組み、魔力を凝縮する。

巨大な弾が激突する寸前、

「はっ！」

気合の声と共に、凝縮した魔力を放つ。

放たれたそれは、理不尽に全てを飲み込み、ジョルジュに向かって飛来する。

「なに!!!!!!!!!!!!!!」

耳に痛い悲鳴を残し、ジョルジュは塊に飲み込まれていった。

「まだ加減ができないわね」

ネヴィーナはジョルジュには興味の色を見せず、自分の手を眺めつつそう言った。

しばらくそうしていると、魔界のどこかで、懐かしい愛おしい気配を感じる。

「っ！ガルガンディ！！」

空を見上げ、そう叫ぶネヴィーナ。

駆け出したいだろう、しばし逡巡をみせたあと、今だ意識の戻らない二人に手を貸すことにしたようだ。

二人を魔力で浮かび上がらせ、半壊した城に運び込む。

「ガルガンディ、貴方ならきつと大丈夫ね……すぐに行くわ、最後の親孝行だけは許して頂戴、ガルガンディ、父さん」

二人を運びつつ呟いたネヴィーナの言葉は魔界の風に吸い込まれ運ばれていく、まるでその言葉を伝えるべき者へ伝えるように。

——カーマ屋敷、封印の間、

「ぐふうっ」

カーマにまともにボディブローを喰らい息を吐き出すロア。そのままくの字曲がったところに蹴りを浴びせられ吹き飛ぶ。その先には剣を杖にしたアッドが膝を突いていた。

「ロア」

飛んできたロアを受け止め呼びかけるアッド。

「大丈夫大丈夫ってね」

鳩尾を押さえながらよろよろと立ち上がるロア。

その横でアッドもまた立ち上がる。

「まだ立てるのね……その体力呆れるわ」

二人の様子に呆れを見せるカーマ。

「まだまだやられんさ」

「男の子にはやらなきやなんねえ時もあるのよ」

アッド、ロアの順にそう言いながら構えを取る。

そんな二人に、カーマは平然な様子を装いつつ、しかしその額には青筋を浮かべ、

「いい加減諦めなさいな」

「だれが！」

ロアがそう言い二人して駆ける。

「いい加減うざったいんだよ！」

カーマはその様子を豹変させ、ヒステリックに叫び、二人を迎え撃つ。

アッドの剣を避け、殴りかかってきたロアの拳を掴みアッドに向かって投げ飛ばす。

「くっ」

またしてもロアを受け止めるアッド。

しかし、今度は違いカーマも間合いを詰める。

「これでどうだい！」

受け止められたロアの背に回し蹴りを放つ。

「ぐほお」

背を思いつきり蹴られ声を上げるロア。

「かはっ」

二人して壁まで吹っ飛び、ロアと壁にかなりの勢いで挟まれ声をあげるアッド。

「さっさすがに効いた……」

倒れたまま小声でアッドに話すロア。

「まずいな……」

ロアほどではないがアッドにもダメージは蓄積している。

しかし相手、カーマは無傷。

それ程にこのカーマの結界は強固なものであった。

「わたしや早く実験がやりたいんだよ！もうあんた達に付き合ってやるのはおしまいさね！」
そう言つて拳に魔力を込め始めるカーマ。

「ますますもってやばい」

カーマを見ながらロアが言う。

「諦めはせん」

「だな、アツド肩貸せよ」

二人して立ち上がる。ロアはアツドに肩を借りて漸く立てる状況だ。

「イライラするねえ！」

その様子を見たカーマはさらに機嫌を悪くする。

そのまま二人に向かつて駆け出す。

「くるぞ」

「ああ、見えてるぞ」

構えを取り、迎え撃つ二人。

先手、カーマに切りかかるアツド。剣の腹を甲であっさり弾き、アツドの懐に潜り込むカーマ。

「くらいなああ！」

そのままボディに二発。

「げほお」

その威力で壁まで吹き飛び、さらに壁にめり込むアッド。

アッドを吹き飛ばしたカーマはロアに向かって上段蹴りを放つ。

「くうっ」

両手を交差させ、顔面のやや上でその蹴りをなんとか受け止めるロア。その足が床に軽くめり込む。

しかし蹴りを受け止めたのもつかの間、受け止められた足を支点にロアの背後に飛び、ロアの背後から逆足の蹴りを見舞うカーマ。

そのまま蹴り飛ばすのではなく床に押し付け踏みしめる。

「あがああ」

骨を軋ませながら床にめり込むロア。

その声が止んだとき、カーマはロアに足をおいたまま笑い声をあげた。

「やったと片がついたわね。まったく手間をかせさせて」

口元に手の甲を当て笑うカーマを、薄れ掛ける意識の中アッドは見ていた。

(ちくしよう、力が欲しい……仲間を守る力が……ヤツを退ける力が……)

闇に堕ちていく意識の中、そう強烈にアッドは思う。

その時、何かがアッドに訴える。

酷く懐かしい、しかし、それは激しい頭痛を伴う。

(なんだこれは!?)

その感覚に戸惑うアッド。

「何!この力は!?!」

カーマが何事かを叫んでいる。

しかし、アッドはそれを感じすることなく、自分と向かい合っていると云えた。

(これは……この気配を俺は知っている!?なぜ?いや、失われた記憶か?しかし強烈に俺に影響を与える……この気配は昔……どこかで……)

そのまま、アッドは自分の意識の闇に落ちていく。

見回せど辺りは闇、光など何一つない。

そんな場所で、アッドは安らぎを感じる。

(ここは……いったい?)

辺りを見回すが闇であることに変わりはない。

その時、

「いい加減に目を覚ましたらどうだ?」

闇から突然に声が聞こえる。

(誰だ!)

アッドが声を上げる。

しかし、変わらず辺りは闇だ。

「もう目覚めてもいいころだ」

声が背後で聞こえた気がした。

アッドが振り返るとそこには、記憶の無いアッドの唯一の記憶が存在した。

魔王モート。

(モート！)

その姿を確認するや、斬りかかろうとするアッド。

しかし、身体が動かない。

「なぜ、俺を斬ろうとする？」

眼前のモートが平気な声で尋ねてくる。

(俺は貴様が憎いからだ！)

「ほう、記憶の無いはずの貴様がか？」

馬鹿にした様子でアッドの叫びに質問を重ねる。

(それは！)

「思い出せ、その気持ちがあるかを……自分と向き合え」

モートは言い返せないアッドにそう告げ、闇に消えていった。

(待て！モートオオオ！)

アッドは闇に向かって声を張り上げる。

しかし、モートは闇に消えたまま帰って来ることは無かった。

(自分と向き合えたと!?)

しばらく叫び続け、多少落ち着いたのか、アッドはモートの言葉を考え始めた。

(俺は、俺だった者はいったいなんだったんだ……モートへの気持ちは憎しみでは無いか?)

そう問いかける。自分に。

アッドにはその闇の中なら答えが見つかる気がした。

闇に向かい、自分に何度も問いかける。

その時、

「お前はなんだ？」

闇からモートではない声が響く。

(俺はアッド、アヴァアウッド・キャメロンだ)

「違う」

アッドの即答に、即答の異論を返す闇からの声。

(違うだと?俺はアッドだ!)

「違う、そうではないのだ」

(そうではない?)

闇からの言葉にふとした違和感を感じるアッド。

その言葉を反芻する。

何度も何度も、その言葉を繰り返す。

そして、闇の中に、一筋の光が差したような気がした。

(そうか……そういうことか)

笑い出しそうになりながらアッドは言う。

身体が動いている。手を額に当て肩を軽く震わしている。

「そうだ」

闇から肯定の声が聞こえる。

「俺はアヴァウッド・キャメロンであり」

(俺はヴェネルクス・ガルガンデイであり)

「アヴァウッド・キャメロンでない」

(ヴェネルクス・ガルガンデイでない)

「そして、ヴェネルクス。ガルガンデイでもあり」

(アヴァウッド・キャメロンでもあり)

「ヴェネルクス・ガルガンデイでもない」

(アヴァウッド・キャメロンでもない)

二人のやり取りだけが静かに続く。

「我らは別個の者であり」

(一個のもの)

「ここに至った時点で」

(俺達は二人で一人)

「そうだ」

(俺は、俺でしかありえない)

「それでいい」

闇の声が安心したような声を上げた。

(すまないな、心配かけてしまったようだ)

アッドが闇に声を掛ける。

「気にするな、お前は俺で」

(俺はお前だからな)

アッドは闇からの声を引き継ぎ、そう告げた。

(あれは、ネヴィーナなのか?)

先ほどの気配を質問するアッド。

「間違いないだろう。俺から俺という存在に頼むことは彼女のこと位だ」

(分かっている。俺はお前だから……任せていろ)

「そうか、では頼んだぞ俺よ」

(ああ)

アッドは闇とのやり取りを短い言葉で締めくくり、意識を外側へと向けていった。

身体に力が溢れている。

無意識に禁忌していた力が身体を巡っていく。

アッドの目覚めの時だ。

これほどまですっきりとした目覚めをアッドは感じたことはなかったであろう。すっと瞳を開く。

天井を見やり、親指の爪を噛み、何かを呟いているカーマ。

「この力は魔王！？まさか……」

考えに夢中でアッドが目を覚ましたことに気がついていない。

ゆっくりと壁から起き上がるアッド。

そこでやっとアッドに気がつき、顔を向けるカーマ。

「まだ動けるのかい、鬱陶しいね」

そう言いながら拳を握り締めるカーマ。

「仲間のお返しはさせてもらう」

カーマに対して静かに告げるアッド。

「お返し？ハハハ、何にもできないくせに意気がってるんじゃないよ！」

不機嫌を顔に全快にするカーマ。

「それでもない……いくぞ！」

素晴らしい、力を解放する。

アッドを中心に嵐のように魔力が渦を巻く。

「こっこれは!?!」

その力の上昇に焦るカーマ。

そんなカーマを蚊帳の外に、どんどん上昇する魔力。

「まずいこのままでは結界が!?!」

カーマが叫んだときにはすでに遅かった。

「はあっ!」

アッドが気合と共にその魔力を発散させる。

それと同時にカーマ自慢の、アッドたちを苦しめた結界が紙のように吹き飛ぶ。

魔力の嵐が晴れた後、アッドには変化が起きていた。

左手に出ていた刺青の量が増え、その炎のような模様は肩を通り左頬にまで広がっている。

そして、剣と剣を持つ左手を覆う黒き炎。

「きつきさまは……」

カーマはその様子を見て声を震わせる。

「知ってるかもしれないが、違う存在(もの)だ」

アッドはカーマの様子に口の端を少し吊り上げそう告げた。

「なっ!?!」

焦るカーマ。しかし、その焦りを取り除く時間は与えられなかった。

「お前はやりすぎた……久しぶりで加減はできんぞ」

「そうアッドは一方的に告げ、

「遺恨の焰！」

剣を一閃させる。

剣にまとわっていた黒い炎がカーマに向かって飛ぶ。

「そんな！そんなあああ！」

炎はあっさりとカーマに纏わりつき、その身を焦がし始める。

「なぜ、なぜあんたがこんなところにい」

カーマは炎に巻かれながらも声を上げる。

「お前に手向けは必要ない」

カーマの問いかけを一閃するアッド。

「おのれっ！おのれええええ！」

怨念の籠った断末魔を残し、カーマのその身を墨へと変えた。

アッドの放った黒き炎はカーマの絶命と共に消え、その欠片も残っていなかった。

アッドはカーマの死を確認したあと、三人に寄り、その安否を確認する。

ロアが一番酷かったが無事である。さすがは吸血鬼といったところであろうか。

三人を部屋の奥に横たえ、クマネコ王子を拾いに行く。

その途中、声を聞いた気がした。

どこかしらから魔界の風が入り込んできている。

「すぐに逢えるさ」

アッドはなぜかそういう気分になり、そう呟いた。

そしてクマネコ王子を拾い上げ、

「お前のペットはどこにいるんだ？」

そう問いかけたのだった。

——ミルチア城

戦闘を終えたミルチア軍が集結しつつあった。その中で、ガウエインの傷を癒しているルシィ、傍らでその光景を黙って見守るロットの姿があった。そのロットの姿を見つけ、ゼトが足早に彼の元へと近づく。

「ここにいたかロット殿」

「ゼト殿？何か御用ですか？」

「ああ、そうだ。他の将達の働きもあり、民の混乱も静まりつつある。そこで、君に話があったな」

「それはよかった……それで私に何か？」

「君たち三人にはミルチアから出てもらいたい」

ゼトの意外な言葉に、目を丸くする三人。

「これより軍法会議が開かれる。確かに、この悲惨な状況を作ったのはアルテオムだ。だが、

王を殺害したという事実は変わらない。私も審議にかけられるだろうな」

「そんな……それでは、ゼト殿とヴァネッサ殿だけ犠牲になろうと言うのですか？」

「我々は裁きを受ける気は毛頭ない。他の将も、逆らわなかっただけでアルテオムに不信を抱いていたからな。だが、君は別だ。君はアルテオムではなく、前王クラモリ様を暗殺したという容疑がかけられているからな」

「そうでしたね……」

「とにかく、私に任せて欲しい。君はアルテオムにはめられたが、ミルチアを救うために戦ってくれたと訴え、疑いを晴らしてみせる。だから、疑いが晴れるまではサンダルクに身を隠していてくれ」

「……わかりました」

力なく返事し、二人の下へと戻るロット。

「どうしましたロット様？」

ルーシイが、不思議そうな顔でロットに尋ねる。

「我々はこのを去らねばならない」

「なんですと!？」

その言葉を聞き、声を荒くしたのはガウエインだった。

「我々はミルチアの為に戦ったのです。それを出て行けなど……」

「わかってくれガウエイン。我々の為を思ってくれての事だ」

ロットのその言葉に、口をつぐむガウエイン。

ガウエインの回復を待って、ロットたちはミルチアを出発した。馬を駆り、ヴァルレー大橋を渡る。途中、空を飛行する船を目撃する三人。おそらくエフラムの艦隊だろうとロットは思った。

三日をかけ、彼等はヴァルレー大橋を渡りきった。そこで、意外な人物と出くわす三人。
「モリスン殿？」

ロットは不思議そうに彼の名を呼ぶ。しばらく考えて、別に不思議な事ではないと気づく。モリスンはサンダルクに残っていたのだ。ここで出会っても不思議な事ではない。

「ロット殿か。よく無事で戻った」

「はい……」

モリスンの言葉に、力なく返事するロット。

「ミルチアは……いったいどうなったのだ？」

「ミルチアは……当初の予定とは少し違いましたが、なんとかアルテオムの手から奪還する事ができました」

「そうか……では、率直に聞こう。コーディリアはどうしたのだ？」

「それは……」

モリスンの問いに、言葉を詰まらせるロット。

「言いにくいというのはわかる。だが、私はすでにコーデリアと出会ってしまったのだ。コーデリアは……あれからは魔族の気配を感じ取った。コーデリアに何があったのだ？」

「コーデリアさんに会ったんですか!？」

モリスンの言葉に、今度は驚きの声をあげるロット。

「ああ……理性があるうちに立ち去れと、そう言っていた」

「理性……ですか」

「やはり心当たりがあるのだな。話してくれないか？」

「ミルチアに魔族が現われたのです……そこら辺にいる下級魔族ではなく、強い上位魔族でした。その魔族に……コーデリアさんは一度殺されかけたのです」

「なんと……その魔族とは一体……」

「わかりません。ただ、その時に……これは見ていないので推測になるのですが、コーデリアさんは恐らくティティスに噛まれたのだと思います」

「ティティスに!？」

ロットの言葉に、今度はモリスンが声をあげる。

「それから、コーデリアさんは瀕死の状態から立ち上がり、ティティスの首を跳ねて、人間とは思わぬ力、速度でその魔族を倒したんです。ですが……そこへ十三使徒モードレッドが現われ、コーデリアさんに従えと言って……」

「モードレッドだと!まさか……あの術をコーデリアにかけたのか。くっ……では、今のコー

デリアは噂に聞くモードレッド率いる四魔候、吸血鬼コーデリアだということか」

「あくまでも推測ですが……可能性は高いと思います」

「なんて事だ……!」

落胆の色を見せるモリスン。

「しかし、どこでコーデリアさんと?」

「精霊の森だ。恐らく、自分自身を無くす前に、人目の付かないところへと考えての事だろう」

「精霊の森……モリスン殿は、そこへ何用で行ったのですか?」

「ドラゴン族に纏わる、双対剣が封印されていた場所なのだ。彼らが、それを守り続けている」

モリスンはそう言って、後ろの二人に目をやる。

「コーデリアは……その封印をあつさりと破り、双対剣の一本を持ち去ってしまった」

「コーデリアさんが……何のために?」

「取り返したくば、自分を殺せる者を連れてこいと言っていた。だから二本とも奪わず、一本だけを持ち去ったのだろう」

「残した剣を持ち、自分を殺しにこいと……言う事ですか」

ロットの言葉に、黙って頷くモリスン。

「彼女を……コーデリアさんを殺す気ですか?」

「剣を取り返すためならば、仕方が無いことだ」

「古い友人としての言葉とは思えません！」

ロットが声をあげるが、モリスンの表情は変わらない。

「一番残酷なのは……あなた自身がやるのではなく、メルフィナさんにコーデリアさんを殺させようとしている事です。それであなたは平気だと言うのですか！」

「平気なわけが無い。だがなロット殿……もう魔王討伐などと、甘い事を言っていてられる時ではなく、コーデリアさんは放っておいてあげたらいいじゃないですか」

「ならん。剣はとりもどさねばならない。それは、メルフィナも承知してくれるはずだ」

「とにかく……私はその考えには同意できません。それでは……」

怒りを露わにしつつ、ロットは待っている二人の下へと戻り、モリスンの前から立ち去っていった。

「同意などしなくてもいい……人間に、どうこうできる問題ではないのだからな」

モリスンは、一人そう呟いたのだった。

ミルチア城の近くにある空き地……とにかく広い空き地に、ゴッドシップは着陸しようとしていた。プロペラの回転による風圧で、あたりの砂煙を巻き上げながら、それはゆっくりと地面へ着地する。しばらくして扉が開き、中から数百の兵とエフラムが地面へと降り立つ。その

エフラムを出迎えたのは、ゼトであった。

「……ゼトか」

エムラムが、ゼトの方を向きながら、静かにそう言った。

「俺に処罰を与えにきたのか？」

半ば、ヤケクソのように言い放つエフラム。しかし、エフラムの言葉にゼトは首を横に振った。

「お前の事はわかっていているつもりだ。だから、処罰を与えるような事はしない。まあ、そんな権限は俺にはないがな……」

「一体何がどうなつてやがる？ エーデルリッターがアルテオムを殺したのか？」

「そんなようなところだ。俺もエーデルリッターに加担した身……どうなるかはわからん」

「仮にも王であったことに違いはないからな。これからどうするつもりだ？」

「審議にかけられるだろうな。私もヴァネッサも……」

「待てよ、コーデリアはどうしたんだ？ 他にもエーデルリッターの奴もいたはずだが」

「エーデルリッターで唯一生き残った隊長はヴァネッサだけだ」

「おやまあ……それは大変なことだ」

他人事のように言うエフラム。

「お前はアルテオム側の兵だったからな……審議にかけられる事はないだろうが、一応会議には出席してもらいたい」

「ま、仕方ねえな。わかったよ」

エフラムはそう答え、ミルチア城へと歩き出した。

「アルアルパッツ！」

ネッコは悠然と立ち上がった。さっきまでの不安や恐怖は、更なる怒りの高波に覆い隠され、見出すことが出来ない。

敵はネッコの姿を見るなり、戦闘という名の美酒が彼の眼前に差し出されたことを知り、狂気さえ思わせる破顔に表情を崩す。

睨み合う二人。

沈黙と殺意の間を一陣の風が走る。

二人の魔法使いの間に相容れない魔力の陽炎が渦巻き、

その傍らでアリスを抱きかかえながら背中を振るわせるメンフィス。

もう一度風が吹いて、ざわざわざわと枝葉が囁く。

ちぎれかけた枝が振り子のように揺られ、

そしてぷつりと切れた。

枝が地面に落ちた音を合図に、

二人の魔法使いは駆け出す。

アルアルパッツが放つ青白い火炎弾。

数発の炎がネッコ目掛けて襲い掛かる。

ネッコはそれらを避けようとしてもしない。

命中寸前のところで、唱えられる魔法。

「炎の壁！」

ネッコが右手を薙ぎ払うと、彼の前に弧を描いて数mもの高い炎の壁が現れた。炎の壁に着弾した火炎弾は、まるで海に落ちた雨の様に飲み込まれ、それと同時に壁の炎は勢いを増す。

盛んに燃え盛る壁を見て、苦虫を噛み潰した表情のアルアルパッツ。彼の放った魔法弾は、結果的に壁の増強を助けるハメになってしまったのだ。

陰であろうが陽であろうが、同じ炎ならば関係ない。魔法法則よりも更に大前提にある物理法則を活かしたネッコの機知に、アルアルパッツは不愉快さを露にさせた。

「小癪な！」

アルアルパッツは慌てて氷結魔法を詠唱し始めるが、それより早くネッコは己の魔法の次の段階を発動させる。

「炎よ、変化しろ！」

ネッコの言葉を受け、燃え盛る炎の壁はまるで水流のような滑らかさで、中心に向かって何度も何度もうねり返し、どんどん小さくなっていく。なんとも不思議な光景であった。

「ぬっ!?!」

驚嘆の声を上げるアルアルパッツ。

気が付けば炎の壁は、人の拳より少し大きいぐらいの、綺麗な球形になっていた。さながら小さな太陽と言った高密度の熱量は、ネッコ自身が思わず顔を背けるほどだ。

「百年間寝てたんだ、魔法の進歩も分かるまいさ!」

彼は炎の球体をひつつかむと、それを足元に落とす。

「喰らえ!」

大きく踵を後ろにあげて、サッカーボールのように球体を蹴飛ばす。——球体は真っ直ぐアルアルパッツのどてツ腹に命中し、彼は爆風に吹っ飛ばされ、玄関の隣に新しい入り口を作つて、屋敷の中突っ込んでいく。

屋敷の中で窓ガラスを吹き飛ばし、大爆発を起こす。

ネッコはもうもうと立ち込める煙を見ながら罵声を浴びせた。

「ふん、ザマあ見やが……げほゲホ」

げほん、げほん、と咳をするネッコ。

魔法一つにいつもより体に負担がかかる。彼は本格的に自分の体の異変を疑うのだった。脳裏に過ぎる、一抹の不安。

(……病気か?まさかな……)

疑念を払うかのように首を横に振る。

(大丈夫。久々の魔法に体が上手く慣れてないだけさ。くよくよしない)

彼は自分の顔を掌でばんばんと打つと、ちらっとメンフィスの方を見た。

メンフィスは自分の腕にアリスの血みどろの頭を抱き寄せ、静かに沈黙している。その様子は幾千の言葉を並べるより、ずっと深くて、悲しげな印象をネッコの胸に与えた。アリスが亡敵となった今でも、二人の主従関係は永遠に続いていくのだろう。

ちえっ、とネッコは舌打ちし、十字を切る。

(……なんだって俺なんかを助けにでしゃばるんだ、いつまでもツマンない恩義なんて感じちゃってさ！黙って見ていればこんなことにはならなかったんだ。クソ、クソ、クソ！……悪かったよアリス・ルービンシュタイン。僕はきつとお前の敵をとって……)

……と、その時。

ネッコは思わず我が目を疑う光景を目の当たりにした。

「……ぎょっ!？」

「やってくれたな、若造。後学になったぞ！」

屋敷から飛び出してきたアルアルパツゾは、そう叫ぶや否や、右手から衝撃波のようなものを立て続けに発射した。空気の歪みが高速で迫ってくる。

慌ててゴロゴロと転がり、それらを回避するネッコ。

——しかし実の所、彼の胸中は他にあった。

「イテッ！」

衝撃波が足を掠め、ネッコはその場にゴロゴロとすっ転ぶ。追い討ちに発射された衝撃波をよけるため、彼は地面についた手から爆発魔法を発射させて、ハンドスプリングの要領で飛びのく。辛うじて免れる追撃。衝撃波が彼の鼻先ギリギリを掠めていった。

(くっ……アブねえ！……いや、そ、それより……)

……それよりも問題は、さっきの「……ぎよっ!？」の正体だった。あれは、アルアルパツゾの復活に対する驚嘆ではない。あれぐらいの魔法で倒せる十三使徒で無い事は、彼だって既に承知しすぎるほど承知している。あのヴァジュラと同程度の魔族なのだから、命を賭して初めて同じ土俵に立ち、それでも五分には到底満たない相手なのかもしれない。それにどこか優れない今日の体調。アルアルパツゾを吹き飛ばした瞬間、彼はそのまま逃げてしまうことすら考えたものだ——もちろん、彼のプライドがそれを許さなかったが。

とにかく、あの「……ぎよっ!？」は一体なんだったのか？

彼は見たのだ。メンフィスの腕に抱かれるアリスの腕が、アンデッドさながらに動き出し、メンフィスの肩を力強く、というよりもはや乱暴と言っても良いぐらい、荒々しい力でぎゅっと掴んだのを。当然メンフィスも驚き、思わず己の肩にかかる白い手と、アリスの血にまみれた顔を交互に見つめていた。

己の目を疑うネッコとメンフィス。

生れ落ちて十と余年。全てを魔法に捧げてきたネッコ・ヴァンシュタインだって、アルアル

パッツの魔法を顔面に喰らってもまだ心臓の鐘を打ち鳴らす自信は無い。ましてや何の能力も無い人間の少女が、十三使徒の魔法を喰らって生き延びているはずがないのだ。

……そう、ただの人間の少女ならば。

ネッコの思案など露知らず、嬉々として追撃を放つアルアルパッツ。

「どうした青二才！逃げるばかりでは私は倒せんぞ！」

「か、火炎竜！」

ネッコが両手を構えて叫ぶと、強力な火炎がアルアルパッツに向けて放射された。

しかし、アルアルパッツの目の前に、オレンジのバリアが現れて、それを阻止する。

「ははは！どうだ！陽の性質のシールドだ！」

アルアルパッツは嬉々とした表情で言った。

「さっき生身で食らった火炎弾は確かに効いたが、同属性のシールドさえ張れば、もはや貴様に打つ手は無かろう！万事休すと言ったところか？まだ遊ぶか？なんなら、またあの詰まらない魔法でもやってみるかね？新しい魔法を見てみたい気持ちはあるがね。それとも一思いに頭を爆ぜさせてやろうか？そこに転がる無様で哀れなアリスのように！はっはっは！」

その時……ネッコは感じた。

アルアルパッツの傲慢な笑い声をそっと掻き分けるように、細く、静かに、しかし安定感のある音色が響いてくるのを。

(ん?)

『……Sweetly she sleeps, my Alice fair, Her cheek on the pillow pressed』

「はっは……なんだ？」

「なんだ？」

アルアルパッツとネッコは同時に身構える。

俄かに、森に木霊する優しい子守唄。

その声色は、紛れも無く少女のそれを想起させる。

ふと、幼い頃の記憶を思い出す。窓辺ではためく白いカーテン。揺りかごを揺さぶる白い手。

にっこりと微笑む、母マリアの……

『……Sweetly she sleeps while her Saxon hair, Like sunlight, streams o'er her breast』

「何、この歌」

ネッコの杖を持ってようやく玄関に現れたアールグレイが、ぼつりと呟く。しかし、彼女の疑問はその場にいた全員の疑問なのだから、誰も答え様が無い。

アルアルパッツが身構える。

「ネッコ・ヴァンシユタイン！今度はなんだ？これも新しい魔法だということのか？」

「何を言ってるんだ。お前だろ？」

「面妖なマネを！」

「お前だろぅが！？」

お互いに警戒を解かないネッコとアルアルパZZ。

メンフィスはアリスを腕に抱いたまま、声の木霊する森の方をじっと眺めている。

また響いてくる甘い歌声。

『……Hushi! Let her sleep! I pray, sweet breeze, Breathe low on the maple bough

Hushi! bright bird, on her window trees! For sweetly she sleepeth now』

「……う、うおっ！」

突然、メンフィスがうめき声をあげて立ちあがる。

拍子に、彼が抱きかかえていたアリスの頭は勢い良く地面に落ちた。当然、アリスは地面に激しく頭をぶつける。だが、彼女は動かない。

「今度はなんだと言うのだ？」

アルアルパZZとネッコ、そしてアールグレイの三人の視線が、メンフィスの居る方向……
正確には、血まみれで横たわるアリスの方へと移った。そして……

「げげっ！」

「ひっ！」

アールグレイとネツコが同時に悲鳴をあげる。二人はメンフィスが狼狽した理由を解した。同時に、体中に走り回る寒気と嫌悪感。

うぞうぞうぞうぞ。

アリスの顔を這う、無数の蛆虫。

肉の蛆虫。

うねうねうねうね、とアリスの筋肉を組織し、皮膚を組織し、元の顔つきを手探りで紡ぐその様子は、蚕が繭を紡ぐように美しい光景とはいかない。

両手を広げて、まるで誰かに抱きかかえられて引つ張り起こされるような不自然な動きで、アリスはふわっと起き上がった。アールグレイは吐き気と卒倒を堪えるのに精一杯で、ネツコやメンフィスはもちろん、アルアルパッツに至ってまで、そのグロテスクな再生劇を呆気にとられながら見守っている。

皮膚の下の真つ赤な筋肉剥き出しで、蛆虫の這いまわる顔つきで、にんまりと笑顔を作るアリス。

そして、構成されて間もない声帯から、か細く、それでいてぞっとするような歌声が響いてくる。

子守唄は、アリスのものだった。

全てが自動的に、まるで透明人間でも召し使える様に。

どんどん癒えていく顔面の傷。

透き通るように青ざめる病的な肌の色。

そして、見開く真っ赤な瞳。

彼女を包んでいた闇が、霧のように蠢き、

まるでコウモリのような翼を形づくる。

翼は彼女の意思通りに、一度バサッと羽ばたいた。

真っ黒の闇の雫が、翼の先からポタポタと零れ落ち、それは地面につくまでには闇に解けるように消滅する。

「それは、私は悪魔ですもの」

と、アリスは言った。

クスクスクス、と木霊する笑い声。

声はつま先から吸い込まれるように体に響いて、脳天から抜けていく。

彼女の従者達は、この懐かしい戦慄に肌を粟立たせ、歓喜に打ち震えた。

そして、真の主の帰還を理解する。

「お嬢様！」

「あ、アリス様！」

メンフィスとアールグレイの声が同時に彼女の名前を呼ぶ。まだ片方は眼球剥き出しのまま

の顔で、アリスは二人をぎゅっと睨んだ。主と分かっているも、そのグロさに胆を潰す二人。

「アリス様……アリス様の魔力が戻った！」

アールグレイが叫ぶ。

「アールグレイにメンフィス、ただいま。私は帰ったわ！さあ、後始末を付けてお茶にしましょうよ。私の領地を汚すウザったい厄介虫を取っ払ってしまっただね……クスくすクス」

アリスはそう言って、ネッコを睨みつけた。

ネッコは口をへの字に曲げて、アリスを睨み返す。

しばらく呆気にとられていたが、思い出したようにアルアルパッツは口の端を歪めた。

「ふ、ふふ、ふ。そうか、魔力が戻ったか！よし、アリス。もはやこの小僧の力量は分かった。私が出るまでも無い。お前の力、この私に思う存分見せてみよ！それでお前の罪は帳消しだ」と、アルアルパッツは己の従者に言った。

しかし、彼は途方もない思い違いをしていた。

「アールグレイ、ネッコに杖を」

と、アリスは言った。

「……なにを！？」

己の耳を疑うアルアルパッツ。

「ネッコ、それっ！」

掛け声と共に、アールグレイの手から放り投げられた一本の杖は、回転を加えながらネッコ

の方へと飛んでいく。

それを上手く片手でキャッチするネッコ。

勢いそのままに振り回すと、杖の先から真っ白い炎が糸を引く。

「サンキュー、アールグレイ！」

そしてアルアルパッツに向けて構える。

アリスは残酷な笑みを浮かべてアルアルパッツを見た。

「……き、貴様……貴様はそれでも魔族かアア！」

激昂するアルアルパッツ。

マイマスタ―

「我が主。下克上というのは魔族らしからぬ行動でございますかしら？」

アリスは言った。

「後悔するぞ！」

「後悔？ふふ……それはそれは、ご忠告痛み入りますワ。だって、私と同じハネツ返りが原因で、アナタ様は穴ぐらに叩ッ込まれたんですものね……クスクスクス」

「……」

怒りに顔を歪めるアルアルパッツ。

「はっはっは！こいつはいい」

対照的に大笑いするネッコ・ヴァンシユタイン。

「形成逆転だな、アルアルパッツ」

と、ネッコは言った。

「アルアルパッツ、もうお前に勝機は無いぜ」

「クスクスクス」

自身満々のネッコとクスクス笑いのアリスを見て、アルアルパッツの血管がぷつん、と言う音を立てた。アルアルパッツは目玉はぐるつと白目にひん剥いて、歯茎を剥き出しにして、大きく大きく息を吸う。

「調子に乗るんじゃないねエ！クソガキどもッ！」

アルアルパッツは叫んだ。ビククリしたアールグレイが思わず背筋を硬直させる。態度には出さなかったが、ネッコも少しびびったりした。

「ネズミが一匹や二匹増えたからと言って、一介の獅子が倒されるようなことが、そんなことがあって堪るか！十三使徒ぞ！？魔王モートの片腕ぞ！？次期魔王の大候補ぞ！？雑魚存在とは次元が違うということを理解しろ！真っ黒に焼き殺して食ってやる、クソ虫どもめが！」

見栄も何もない汚い言葉を吐き散らし、アルアルパッツは右手をクロスさせた。彼の放つ白い縞々の波動が、猛烈な勢いで周囲をなぎ払う。

ネッコは木の上に飛び移り、三発の火炎弾をアルアルパッツに撃つ。

アルアルパッツがそれを陽のシールドで防ぐ。

シールドの上で火炎弾が三発とも消滅した。

「わはは！どうだ、同属性のシールドだ！魔法は通るまい！」

アルアルパッツが勝ち誇ったように言った。

しかし、ネッコは勝利を確信した瞳でアリスの方を見る。

「今だ、アリス！やれ！」

ネッコがアリスに合図するが、彼の言葉を待つまでも無く、アリスは己の魔法を解き放つ。

「M4577 “Consume of the Black” (黒の焼却) -」

アリスの放った黒い火炎弾が、アルアルパッツの陽のシールドを軽々とぶち抜き、彼の背中に直撃した。黒い炎が背中を焼き、紫色の焦げ目がついた。

「ぎ、ぐやああ！」

激痛に思わずうめき声をあげるアルアルパッツ。

アリスの魔法は明らかにネッコとは違う、魔族独特の魔法様式。

「不思議かしら、理不尽かしら？ご自慢の、陽のシールドが簡単に破れたわ」

アリスは眉を潜めて、さも残念そうに言った。

「だって、私が放ったのはアナタ様の良くご存知、陰の魔法、ですものね」

アリスの言葉にネッコが続く。

「お前は陽のシールドを張れる。そして陰のシールドも張れる。それらはそれぞれの魔法を防ぐのに絶大な効果があるが……違う性質のシールドを一度に両方張ることは、流星のお前にもできやしないだろう」

思わず冷や汗を流すアルアルパZZ。彼はようやく自分の置かれた状況に気づき始めた。魔族と人間族が組む……それは、この世の二大元素である。陰と陽の二つの属性を司ることに他ならないのだ。

この歯車が上手く噛みあえば、文字通り敵はいない。

アリスとネッコは悠然と歩を進めてアルアルパZZの方へと近づく。

「相反する二つの属性を同時に唱えられる者などいませんわ」

「いや、そもそも、そんな体質を得られること自体が嘘っパチさ」

「アナタ、本当に生きてらして？」

「僕たちには信じられないなあ……」
アンデッド
不死者 アルアルパZZ！

「心配なさらずとも、今度の死出の旅路は決定的な現実になりますワ」

「お袋に祈る時間くらいはやるよ」

「死への冒読者に受け入る神なし」

「生への冒読、覚悟しろ！」

「く……ぎ……があああああ！」

紳士の面をかなぐり捨て、野獣のような叫び声をあげて、アルアルパZZは陽の魔法をアリスに放つ。が、ネッコの張った陽のバリアが、アリスを守って攻撃魔法を打ち消した。続けざまに陰の魔法をネッコに撃つアルアルパZZだが、それはネッコに到達する前に、やはりアリ

スの陰のシールドによって相殺される。

急激な疲労。肩で大きな息をするアルアルパッツ。

「はあ、はあ……はあ……畜生……ガキ……どもめ、俺は……十三……使徒……なんだぞ……！」

「炎竜の牙！」

「ぐっ！」

ネッコの炎の魔法を何とかシールドで防ぐアルアルパッツ。すぐさま彼はアリスの方を振り返った。

「M1245 “Spyrogyra” (アオミドロ) …！」

黒い翼を羽ばたかせ、宙よりアリスの両手から放たれた緑の渦巻きは、猛毒の性質を持った波動光線。

アルアルパッツは辛うじて陰のシールドを間に合わせるが……

「白銀氷結晶！」

「ぬううっ！」

ネッコの冷気魔法も、これまたシールドで堪えきるアルアルパッツ。続けざまに陽、陰、陽という無茶な魔法の切り替えをしたため、体中に崩壊の兆しが現れ、全身に血と汗が噴出す。

しかし、二人は攻撃の手を休めない。

「おやおや、頑張りますこと……！」

空を飛んでいたアリスが地面に着地する。

「そろそろ止めを刺してやるのが敬老精神ってもんさ」

「……ならば、M892” Shadows fall”（影の凋落）！」

陽のシールドや補強魔法を無効化する暗闇がアルアルパッツを包む。

「し……私のシールドが……！」

真っ青になるアルアルパッツ。

「禁則処理解除、魔力のフィードバック・ゲインを限界まで！」

ネッコは杖を振りかざし、声高らかに叫んだ。

「どうして、どうして私のシールドが張れんのだ……こんな小娘の魔法封じに……どうして私の魔法がかき消され……！」

アルアルパッツは無茶な魔法の切り替えで体力を消耗しつくし、もはや歩くことすらままならない。そんな状態で魔法の名手であるアリスと魔力合戦を行うのは、いくら十三使徒と言えども無理難題というものである。彼はふらふらと覚束無い足取りで二、三步下がると、なにも無い場所で足を滑らせてこけてしまう。

「……イーリアス神の名の元に、汚れ多き背徳者に光の修正を加えん！」

ネッコは杖を振りかざし、レベルにして4の数字を冠する強烈な破壊魔法を唱えた。

「必殺魔法・神威！」

唱名と同時に、ネッコを中心に強烈な閃光が広がっていく。

その爆発的な熱量は、木を叩き潰し、弾き飛ばし、四つん這いで逃げるアルアルパZZを静かに飲み込んでいく。陽の性質を備えるアルアルパZZの肉体も、この圧倒的な太陽の輝きを前に、性質や体質の全てを飲み込んで、焼き尽くされていく。

「ぬうううう……ぐ、ぐわあああ！」

しかし、驚くべきことが起こった。

アルアルパZZは己が身を橙の白熱に焼きながら、苦痛の咆哮をあげながら、尚も毅然と立ち上がり、目の前の敵を滅ぼさんと飛び上がる。

それは生への執念であろうか、執着であろうか、

それともあるいは憎悪であろうか。

「コノ野郎オオオ！」

アルアルパZZは叫ぶ。

ネッコは仁王立ちのまま哀れみの表情でもって、襲い掛かってくるアルアルパZZを睨みつける。

ネッコの首根っこを引っ掴むアルアルパZZ。

ネッコの首が神威の熱で焼けるが、彼は眉を潜めるだけで抵抗しない。

そしてアリスがアルアルパZZに向けて右手を差し出し、魔法の詠唱を始めた。

「Out of the depths have I cried unto thee, O Lord (領主よ、深き淵よりわれ汝を呼ぶ)

Hell's lord, hear my voice. (かの地の領主よ、わが声を聞け)

Let thine ears be attentive to the voice of my supplications!! (汝の耳を傾けて、わが願いを聞きとげたまえ!)」

アリスの黒い翼が大きく広げられると、辺りは全くの漆黒に包まれた。真っ暗の空間の中に、アリスとアルアルパッツの二人だけがポツンと存在する。

まるでただっ広い無の空間に、二人だけが取り残されたような……

絶対的に真っ暗で、静かで、孤独な世界。

「なっ……!!」

アルアルパッツの驚嘆の声。

「これは!そんなまさか!」

十数匹の幽鬼の影が闇から這い出てくる。

身動きの取れないアルアルパッツを、彼らは取り囲んだ。

彼らは皆違った武器を手に持っていた。

巨大な三日月の鎌。

血油の落ちぬ剣。

身の丈よりも長い槍。

地を断ち割るような巨大な斧。

茨の鞭。

レイピア。

逆十字を象る長剣。

棘の付いた棍棒。

叩き潰す為にあるような大剣。

幽鬼たちはそれぞれの武器を手に、影からゆっくりと出てきてアルアルパッツに近づくと共に、幽鬼たちの姿がはつきりと見え始める。彼らは骨身に薄皮一枚が残っているだけの、半死半生の屍食鬼たちであった。眼球と光を失った彼らは、同じように鼓膜も鼻腔もたず、己の獲物を探さんと手当たり次第に武器を振るう。

レイピアが頬を掠める。

鎌が皮膚を切り裂く。

剣が耳を削ぎ飛ばし、

斧が足を叩き潰し……

率直に殺すでもない遠まわしな殺戮に、アルアルパッツは真の恐怖と言うものを知る。

「まさかまさか、そんなまさか！ 貴様如きが……そんなバカな……」

アルアルパッツは震える絶叫を漏らす。

アリスが闇の遠くから笑みを返す。真っ赤に光る二粒の瞳と白い歯が、真っ暗闇の闇にぽっかりと浮かぶ。

「ご存知でしょうか？」

棍棒がアルアルパッツの顎を砕く。

「アナタがサンダルクと相まみえたときに使った術」

鞭がアルアルパッツの目を潰す。

「禁断のレベル5魔法……:M666 [forbidden]」

長剣がアルアルパッツの胸を刺す。

げふっ、という声が漏れた。

「“My Bloody Valentine” (血塗られた私のヴァレンタイン)！」

口から血反吐を吐くアルアルパッツに、亡者どもによる更なる

リンチ
私刑。

肩口に大剣が埋もれ、

斧が左腕を弾き飛ばす。

棍棒が背中を打ち砕き、

レイピアが腹部に沈み込む。

暴力、暴力、暴力！

アルアルパッツうめき声もあげないで、

朽ち果てていく己を朦朧とした意識で感じている。

これから彼が行くであろう地獄に、

果たしてこれより辛い場所があるであろうか？

パチン、と指を鳴らすアリス。

刹那、辺りを覆っていた闇の霧がさっと晴れた。

「う、うわ！」

ネッコが思わず叫ぶ。

「なんだこりゃ！」

メンフィスとアールグレイも良く分かっていない様子だった。

ネッコたちはアリスの魔法をまばたき一瞬の時間程度にしか感じておらず、気が付けば目の前に血まみれで横たわるアルアルパッツの姿があったのだから。

肩が裂け、指の股が裂け、顔が裂け、胸が裂け、足が裂け、喉が裂け……

見るも無残で哀れな元・主の姿を眺めながら、アリスは不敵に笑っている。

クスクスクス……と響く笑い声と、真っ黒の衣装に飛び散った返り血姿に、ネッコは空寒いものを感じた。

「逝ってらっしゃいませ、我が主。アナタの愛する、愛無き世界へ」

クスクスクス……と、笑い声は虚しく辺りに響き渡った。

黒焦げのズタボロになったアルアルパッツは仰向けに倒れ、煙をあげて沈黙している。

なんだかんだで十三使徒だから油断は出来まいと、杖を構えてそつとアルアルパZZに近づくネッコ。アリスは両手を後ろに組んで、主だった燃えカスをじつと眺めている。背中の黒い翼はいつの間にやら消えていた。

ネッコが恐る恐るアルアルパZZの腕を蹴り飛ばすと、まるで雪の塊でも蹴り飛ばしたみたいに、黒い腕がぼろぼろに崩れて欠落した。一陣のそよ風が燃えカスを宙に飛ばす。

「うわ、こりゃ流石に死んでるな……スカスカのスポンジだ」

「陽の魔力と性質を内に蓄えることの出来た体。その実、中身はカラッポ」と、アリスが言う。

「ドルイドとか何とか言ってたけど、そんな便利な体になれるわけ無いよな」と、ネッコ。

「いや、あるいは……限りなく理想に近いところまでは行ったのかもしれない。この哀れな十三使徒は、結局のところ理想を抱えたまま、穴グラの中でくたばってしまっていたんだろうな」

「ええ、とつくの昔に」

「恐るべき執念だった」

「そして、その執念を実体化させた何か奇怪な力」

アリスの言葉にネッコはうなる。

「……奇怪な力って？」

「さあ……そんなの、私が知りたくらいだわ」

「本人に聞いてみるっきゃないな」

「からすはきいても知らぬ顔、はるのひながのたんぼなか。クスクスクス。さあ、ネッコ・ヴァンシユタイン。少し散らかってるけど、お茶でもいかが？」

「ぶすぶす煙を上げる瓦礫の屋敷に向かって、優雅に手を差し示すアリス。

「頂きます」

「アールグレイ。ご用意してらっしゃい！」

アリスの声に、勢い良く答えるアールグレイ。

「あ、ハイ！」

その笑顔にはここ数日間に見られなかった晴れやかなものだった。やはり、彼女の主たるべく者は、魔族であるべきなのだろう。

「メンフィス」

メンフィスの前に立つアリス。

「お帰りなさいませ、アリス様」

「私は、魔族に戻っても……それでも人間の誇りは失わない積りよ」

「はい」

「なかなか貴重な体験だったわ。アナタもどうかしら？」

「ご遠慮させて頂きます」

クスクス笑いを浮かべるアリス。メンフィスは少しも笑わない。——それがメンフィスであつた。

アリス、メンフィス、ネツコの三人は、揃つて屋敷の方へと足を運んだ。

ふとした拍子に振り返つたアールグレイの目に、三人の姿が映る。

黒いフリルのついたドレスに身を包み、不敵な笑みを絶やさないブラッディ・アリス。

二人に比べて些か長身で真っ直ぐ伸びた背筋、黒のタキシード・スーツを完全に着こなすメンフィス・ブラウン。

ズボンに手をつつこんで、ポロポロのマントのようにはためくローブを肩に掛けて、我が物顔の、悠然とした態度で歩くネツコ・ヴァンシユタイン。

滅茶苦茶になつた森を背景に歩くこのクセの強い三人は、今まで誰も見たことの無いような異色の取り合わせで、しかし、それでも人間界と魔界の協調、そして、それらを超えた新しい文明と新時代の訪れを予感させる何かがあつた。「何かが変わるのかもしれない」と、予感させるようななにかが……少なくとも、このアールグレイはそう思った。

と、その時、突然ネツコがつんのめつた。

彼は危うく頭からずっこけそうになつた。

「大丈夫かね」

すぐ後ろを歩いていたメンフィスがネツコに声をかける。

ネツコは膝に手をつけて、首を二、三度ふつた。

「大丈夫。さすがに疲れたよ……眩暈がする……げほ、げほ、げほん」

げほん、げほん」と咳をするネッコ。

「また咳だわ」

と、アリスが言った。

「戦闘中もずっと咳をしてたわ。ゲホゲホ忙しいのね」

「風邪でも拗らせたかね？」

メンフィスが続く。

「いや、そんな感じでもないし、ただの咳だよ。本当に疲れてるだけさ。大丈夫！アルアル野郎は死んだんだ。ゆっくりと休養をとって……それからアッド達に連絡とらないと。そう、アルアルなんかじゃない。諸悪の根源を倒すまで、僕は……」

言葉を途中で、急に全身の力が抜けていくのを感じるネッコ。地面に膝をつき、続いて両手をつく。思わず顔を見合わせるアリスとメンフィス。メンフィスが手を差し伸べた。

「大丈夫かね？さあ、立ちたまえ」

「あ、ああ。悪い……」

ネッコが手を伸ばす。が、しかし、それはメンフィスの手を捕えることなく、虚しく空を切って終わった。

「ばたん、と横に倒れるネッコ。」

「ネッコ・ヴァンジユタイン？」

寝転がるネッコに向かってアリスが声をかけるが、反応は無い。

「……死んだの？」

眉を潜めてアリスは呟く。

どうでしょうな、とメンフィスは呟いた。

お茶会は中止になり、ネッコはアリスの屋敷の客間のベッドへと運ばれた。

アリスの屋敷の煌びやかな客間のベッドの上で、ネッコはぼんやりとしていた。どうしようもない気だるさにまどろみながら、秒針が時計を一周する間に十度はやってくるしつこい咳に、ほとほとうんざりしていた。

「ゲホッ、げほ……ゲッ……ガフッ!……ゼエ……」

ぼんやりとした視界の先に、ゆらゆらと壁の揺らぐのが見える。耳鳴りも酷い。頭の中に長い音の糸が縫い通されて、それを延々と引っ張られているような、そんな感覚。それには酷い頭痛が伴う。ぜえぜえという呼吸の度に重い肺を膨らませると、言い知れぬ痛みが胸を刺す。そして、また咳をする。

「ガフッ!……うえ……」

口の中が血なまぐさい。

本日、三度目の血痰であった。

ネッコは備え付けのバケツの中に赤い痰を吐き捨てると、テーブルに置いてあるコップに水を注ぎ、ゆっくりと喉へ流し込んだ。度重なる咳に傷つけられた喉が冷たい水の感触に癒される。

(酷い風邪だ。こんなところではかかるなんて、ツイてないというか……薬は魔族のものばかりで人間のものとは違うし、そもそも環境が悪い。アリスに人間界の薬を取ってきてもらうように頼んでみたものの……こんな激んだ空気の中に居たんじゃ治るものだって治らんぞ)

ネッコが思案していると、ドアを開けてアールグレイが入ってきた。ご丁寧に口元にはマスクをしている。

「具合はどう?」

「あんまり……げほっ、げほん、よくないな」

「寒くない?」

「大丈夫だよ」

アリスはドアを開いたままにして、ゆっくりとカートを部屋に運ぶ。カートの上には鉄製のトレイが乗せてあり、トレイには暖かいスープが乗っていた。とてもいいかぼちゃの香りが、

ネッコの鼻腔をくすぐった。

「かぼちやのスープ……言われたやつだよ」

「ありがとう、助かるよ。せめて体に栄養つけなきゃね」

ネッコは嬉しそうにアールグレイからスープを受け取って、その臭いを嗅ぐと、サンダルークの質素だが暖かい家庭を思い出した。リジヨは、リタは、ナターシアは元氣だろうか？……アムリタは？

存分に香りを堪能すると、ネッコはスプーンでスープをよくかき混ぜて口元に運ぼうとしたが、ふと、アールグレイの心配そうな顔を見て手が止まった。

「……どうしたんだ？」

「いや、本当にいいのかな……とと思って」

「なにが」

「……そんな臭い食べ物を体に入れちゃってさ」

ネッコは、きよとんとした。アールグレイの言わんとしていることが分からなかった。

しかし、すぐさま彼女と自分とが違う体質であることを思い出すと、なんとも言えない滑稽な感じがして、彼はけたけたと笑った。

「はっはっは……!!」

「めちやくちや臭いよ、ソレ」

「お前たちに出された紫色のパンよりはマシだぜ。ありやあ、人間の食うもんじゃない」

何かを言い返そうとしたアールグレイだが、ぐっと口を噤んだ。

そして、ネッコと自分の間に跨る果てしなく深い境界をまざまざと思い出す。

魔族と人間。

食べ物さえ違えば、吸っている空気まで違う。

アールグレイはネッコのやつれた顔を見て、気が重くなるのを感じた。

あのアルアルパッツとの死闘から三日たつが、ネッコの体は一向に回復の兆しを見せない。

日に日に悪くなっているのが目に見えて分かる。この病気の悪化が人間の体に障る魔界の空気のせいだとすれば、ネッコは一刻も早くここを立ち去った方が良いのだ。肌に艶が無く、顔色

は冴えず、頬は痩せこけ……

そして目だけが活力的にギラギラしていた。

彼特有の、信念と意志に燃えた目。

こうした気力がある分にはまだいい。しかし、彼を内から支えるその気力の源泉が、同じ魔

族である十三使徒を倒すという目的にあるのだから、アールグレイは素直に肯定するわけには

いかない。

「面倒くさいな、と彼女は思った。

いろいろな面倒くさい。

「共存は無理だ」

と、ネッコは言った。

アールグレイは寂しそうに彼の横顔を見つめるばかり。

「でも、歩み寄ることはできる」

「ずらず、とスープを啜るネッコ。」

暖かいスープが喉を撫で、胃にまで運ばれると、

痛んだ胸がほっと温まった。

「うん、結構いける」

ネッコがそう呟くと、アールグレイはようやくにっこりと笑った。

「笑ってんのか？」

ネッコに言われて、アールグレイは初めて自分がマスクをしていることに気づいた。

彼女はマスクを外して、もう一度笑い直す。

いろいろ面倒くさいけど、全てはきつと良い方向へ向かう。

アールグレイはそう思った。

そう思わせてくれるネッコに感謝した。

あるいは、歩み寄ることすら出来なくとも、

こうした希望を抱いてそれに向かって進んでさえいれば……

世界はぎらぎらと輝き、

快活さに満ち満ちて、
そしてきっと、何か良くなって行く。

アトラーズ・サーガ（仮） 未完